本主義最後の段階としての帝國主義」にまで發展したるが故に日本の資本主義が崩壞に直面するに至つた場合と、さうではなくて、他の原因に由り日本の資本主義がそれ自身の崩壞（猪俣曰ふ、特に それ自身の崩壞」といふのは如何なることを指すか？ 自動的崩壞のことか？「自分だけの崩壞」とでも言ふやうなことか？）に直面するに至つた（！）場合とでは、事情は丸で異つて來る』[1]——（見よ、高橋氏の頭の中では、日本の資本主義が「已に崩壞しつゝある」かと思ふと、今度は「崩壞に直面するに至つた」りする。それからまた、「私のいち早く主張し來れる如く、それはいま徐々ながらその崩壞に直面してゐる」[2]ことゝもある!!）

(3) レーニンの定義の曲用

讀者の見らるゝ通り、高橋氏は、此の一節に移ると、「資本主義最後の段階としての帝國主義」なる概念を、「いち早く」日本一國の資本主義に轉用し、「いち早く」その「崩壞」に結びつけてゐる。從つてまた、氏は、世界的範疇であるところの「資本主義最後の段階としての帝國主義」の、「單にその基底的な、純經濟的な諸概念のみに局限して」レーニンが打立てた一定義に含まれるところの五つの特徴が、一國的な、政治＝經濟的な概念であるところの日本の帝國主義に備はつてゐるか否かをいち早く調べることによつて、日本が「プチ帝國主義の段階にある」ことをいち早く發見することも出來るのである。そのレーニンの定義とは、言ふ迄もなく、かうである。

『帝國主義は、獨占と金融資本の支配が確立され、資本輸出が優れた重要性を得、國際的トラストによる世界の分配が始まつてをり、最大の資本主義諸國の間に地球の全地域の分割が結了されてゐるところの、さうした發展段階における資本主義である。』[1]

此の定義が世界的體系としての資本主義に關するものである事は、如何に讀み違ひようとしても讀み違ひ得ぬほどの明かさである。[2] しかるに高橋氏は曰ふ——

『以上がレーニンの云ふ所の「資本主義最後の段階としての帝國主義である。なる程、世界的に云つて（！）斯樣な現象が近年（！）著しくなつて來たことは事實であるが、しかし乍ら（?!）その故に日本の資本主義も亦（！）斯樣な所まで（？？）發展したといふ譯では無論ない。……そこで、いま、日本の資本主義現在の發展段階そのものを、レーニンの尺度によつてはかつて見ることにする（!!）』[3]

かくて、高橋氏は、日本においては、生產及び資本の集積や獨占が、「英米獨等に比較すれば殆と云ふに足らない」こと、「我國の經濟は、未だ、全く「金融資本」の時代に轉入してゐない」こと、「日本が今日（！）資本の輸出國でなく逆に輸入國である」こと、それは「レーニン自ら之を明言してゐる」（！）ことを實證する。[4] 氏は進んで、「國際的トラストによる世界の分配が始つてゐる」

1) 太陽四月號、3頁。 氏の著書「左翼運動の理論崩的壞——右翼運動の理論的根據」41頁。

2) 太陽、34頁。著書、92頁。

1) 獨本ウエルトハイム版79—80頁、英本ロンドン版103—104頁。

2) 尙ほ、「改造」の拙文參照、特に 63—65頁。

3) 太陽 9頁。著書、51—52頁。 4) それが悉く僞證であることを、私は「改造」六月號で詳論して置いた。（本書、「資

といふ第四の世界的特徴をば、『日本の資本家は殆んど、その「資本家の國際的團結」に由る「世界の分割」の埒外に取り殘されてゐる』といふ特徴とすり換へ、最後の特徴であるところの「最大の資本主義諸國の間に地球の全地域の分割が結了されてゐる」といふことを、『いま、日本は、最も「領土」の獨占に由つて苦しんでゐる國であり、消極的に搾取されてゐる國である』といふ、全く見當違ひの立言に結びつけようとする。かやうにして、高橋氏によれば、日本を帝國主義國たらしめるやうな特徴は、日本の資本主義には殆んど見當らないことになる。しかも、日本の資本主義は、氏によれば「已に崩壊しつゝある」のだといふ。

(4) 丸岡重堯氏の問題提起

かくまでの、餘りにも粗大な逆說、餘りにも入念な歪曲は、如何にして可能であるか？ すくなくとも、それが、(一)資本主義の崩壞、(二)資本主義の最後の段階、(三)資本主義全般の歷史的段階としての帝國主義、(四)かゝる帝國主義のエポツクにおける各國の帝國主義——これらの概念の關聯と異同とが明確なる時に、可能であらうか？

だが、かうした曖昧さは、わが高橋氏の獨占ではない。氏の先取でさへもない。氏とほゞ同樣な問題を、氏とほゞ同樣な曖昧さにおいて、「いち早く」提起した者は、寧ろ、丸岡重堯氏であつたであらう。氏は言つた——

（氏が）『左翼の言分である』（となすところの）『世界の資本主義はいま崩壞期に在るが故に日本の資本主義も亦崩壞の他なしとする議論は、果して正しいであらうか？……「資本主義は最後の段階としての帝國主義時代に入つた」といひ、「我國の資本主義は最後の斷末魔に瀕してゐる」といふやうな言葉も亦斯うした見解から叫ばるゝものである。』（猪俣曰ふ、丸岡氏も、「左翼の言分」を理解してゐたであらうか？）

氏は續けて述べる——

『私は後段に於て之れが吟味をなす筈であるが、それに先立つて、我國社會運動の流行語である「資本主義最後の段階としての帝國主義」といふ言葉の意義を、その題名の書を書いたレーニン自身の言葉に聽いてみよう』

そして、それに附言して氏は卒直（？）に言ふ、

『或は無用の詮議立てかも知れぬが、私自身此書を讀んだに拘らず、瞭りしてゐなかつたからである』[1]

かくして氏は、吾々が前に引用したレーニンの定義に含まれる五特徴をあげ、

『そこで問題なのは、我國の資本主義が、一般に云ひならされてゐる如く（？）斯うした眞の

1) 「社會思想」大正十五年十二月號、3頁。傍點は猪俣。

意味（?!）の帝國主義時代（!）に在るかどうかである』

そして問題は、氏の頭の中で、テキパキと片付いて行く——

『吾々は、いま玆にその吟味をする爲めに、面倒な經濟上の數字を持つて來る必要はない。只吾々は果して「獨占と金融資本の支配が確立し、資本輸出が重要な意義に得來」つてゐるかどうかに想到すれば十分であらう。……何れも日本に於ては未だ問題ではないのである。吾々は日本の資本主義が漸次斯うした時代に入らんとしつゝあることは認めるけれども、既にその時代に在りと見ることは出來ない。況んや、帝國主義を以つて、侵略主義、軍國主義と同一視し、既に日本は夙に此の時代に在りとする一部論者（誰々？）には元より與することが出來ない』[2]

氏は、五つの特徴のうちの初めの三つの有無に『想到すれば十分であらう』といふ。だが、讀者よ、氏がもし他の二つにも『想到』したら?! ——世界的體系としての資本主義の世界的特徴として不可分的な五特徴を、一國の資本主義に發見せんする冒險者としては、初めの三特徴に『想到すれば十分であらう』筈ではないか？ 氏は、高橋氏よりも賢明である。

(5) 崩壞の概念と帝國主義の概念

「本當のところ」はかうである——

2) 同上、14頁。傍點は猪俣。

（一）「資本主義は、世界的體系として、十九世紀末、二十世紀初頭から、帝國主義の段階、時代に入つた」——それは正しい。だが、「資本主義が、帝國主義の時代に入ると共に、資本主義の崩壞が始まる」——そんな「左翼理論」はないのである。

（二）「資本主義は、帝國主義世界戰爭の結果。一九一七年に、その世界體系の構成部分たるロシアその他において、崩壞を開始した」——それは正しい。「崩壞現象は現に進行しつゝある、資本主義は今ま崩壞期にある」——それは正しい。だが、「だから日本においても資本主義は崩壞しつゝある、『崩壞に直面』してゐる」——そんな「左翼理論」はないのである。

（三）「十九世紀末、二十世紀初頭に帝國主義の時代が始まつてから幾ばくもなく資本主義日本は帝國主義世界體系に編み込まれて、帝國主義國となつた」——それは正しい。「帝國主義は、世界戰爭を轉期として、更に新らたなる段階、新らたなる時代——資本主義の沒落の時代——に入つた。現在の帝國主義日本は、この新段階における帝國主義世界體系の一構成部分をなす、」——それは正しい。だが、『日本は帝國主義國である。であるから日本資本主義は已に崩壞の過程を過程しつゝある。』（高橋氏）——そんな謬言が「左翼理論」ではないのである。

では、いつたい、「資本主義の崩壞」とは何か？

世界の「左翼理論」において學術語の一であるところの、資本主義の Zusammenbruch. collapse

（崩壞）とは、資本主義的生產關係が强行的に破却されること、資本主義社會が××されることを意味し、無產階級××が成立することを意味し、社會主義經濟によつて資本主義經濟が克服される過程をも含意する。そして崩壞の生ずる物質的基礎は、何等かの經濟的危機である。崩壞は從つて斷續的に生ずる。卽ち、崩壞は、社會的な概念であると同時に、破局的（カタストロフアーレ）な概念である。マルキシズムにあつては、一切の經濟的範疇は、結局において社會的範疇である。が、資本主義の崩壞は、資本主義の沒落（Untergang, Niedergang, decline）と區別されねばならぬ。後者にあつては主として經濟が强調されてゐるからである。

(6) 定義の相對的意義

では、また、帝國主義の世界體系と、その構成部分たる帝國主義諸國との關係はどうか？　考察の範圍を、今ま吾々の前にある問題の闡明に必要な程度に局限しつゝ、先づ、レーニンの定義が彼れの帝國主義理論において占むる地位、演ずる役割を知らねばならぬ。彼れの定義は、彼れの明言してゐる通り、帝國主義の重要な一面――恐らくは最も重要であらうが併したゞ一面――の特性記述である。それは、特定の考察對象についてのみ下された定義である。それは、資本主義全般の特定の歷史的發展段階について、それのみについて、その諸特徵を述べてをり、しかも、さうした段階の「單に基底的な、純經濟的な」部面のみについての諸特徵を述べてゐる。從つて均しく帝國主義に關するものでも、その他の一面、その他の考察對象に適用したのでは、用をなすべき筈のない定義であり、あらゆる定義がさうであるやうに、特定の對象に適用される時に限り、特定の對象に對してのみ、――卽ち相對的にのみ、正しい定義である。そのことは、定義を下すに當つて彼れ自ら、『どんな定義でも、發展の過程にある諸現象のあらゆる關聯を包括し得るものでは決してないから、一切の定義は總じてたゞ限られた相對的な意義しかないといふことを忘れずに――』と、特に附言してさへゐるのである。

政治に現はれるところの、帝國主義の諸特徵は何々か、――それは此の定義の直接に關はる所ではない。資本の擴張再生產の法則であるところの、內在矛盾展開の觀點からは、帝國主義は如何に把握されるか、――それは此の定義の直接に關はる所ではない。國際無產階級運動に對する關係に於て、帝國主義は如何なる意義を有するか、――それは此の定義の直接に關はる所ではない。で、勿論、帝國主義のエポックにおいて、具體的には、如何なる資本主義國が帝國主義國であるか、何が、資本主義國をして、帝國主義政策をとらしめ、帝國主義國たらしめるか、そして各帝國主義國それぞれの特質は何々か、――さうしたことを、此の定義が敎へてゐるのでは決してないのである。

(7) 闘爭の體系としての帝國主義

帝國主義は特殊の闘爭の體系である。此の闘爭の目的は、市場、資源、放資域の獨占である。此の闘爭の競闘者は皆な、既に多かれ少なかれ獨占的地位を獲得してゐる。此の闘爭の犠牲者は、無産階級であり、農民であり、半開未開の諸民族である。彼等は、搾取され、隷屬せしめられつゝ、獨占者に朝貢する。貢物の、掠奪物の、享有者は、資本であり、典型的には、金融資本である。帝國主義の闘爭は、獨占者間の闘爭であり、獨占的地位の爭奪である。そして、その決定的武器は、近代的陸海軍である。即ち、帝國主義は、政治＝經濟的な範疇である。レーニンは、その「純經濟的な、基本的な」諸特徴を拾ひ上げて一つの定義に編み込んだ。資本主義が、その全體としての歴史的發展段階においてそれらの特徴を具ふるに至れること――それが、その段階を典型的な「帝國主義の段階」たらしめ、「最後の段階」たらしめる。「帝國主義の段階」「資本主義最後の段階」とは、ルーズな類推を外にして、たゞ世界資本主義についてのみ妥當なる概念である。レーニンが、曾つて、一國資本主義における資本の集積、獨占と金融資本の發達、資本輸出の有無大小等を調べ、しかもそれのみで、その國の資本主義が、「帝國主義の段階」、「資本主義最後の段階」に在るの無いのと言つたことを、吾々は未だ知らないのである。

(8) その歴史的發展

周知の如く、二十世紀初頭から世界大戦に到る期間の帝國主義の闘爭、獨占的地位の爭奪は、英吉利と獨逸との對立を中心に進行した。また、周知の如く、此の對立を或は緩和せしめ或は尖鋭化せしめつゝ、謂はゆる「勢力均衡」の要因となつたものに、佛蘭西、露西亞があつた。そして此の帝國主義の闘爭に、亞米利加が參加し、伊太利が參加し、日本が參加してゐたことを、何人が否み得るといふのであるか。――理論は、現實から離れて在るのではなく、まして現實を歪曲する爲めに在るのではない。それは、現實に即して存し、現實を説明する爲めに存し、現實を克服する爲、戦ひとる爲に存するのである。

レーニンは曰ふ――『帝國主義は、資本主義の最高の段階として、亞米利加と歐羅巴とにおいて、また次いで亞細亞においても、一八八九年から一九一四年に到る間に、十分に成熟するに至つた。米西戦爭（一八九八年）、ボーア戦爭（一九〇〇――一九〇二年）、日露戦爭（一九〇四――一九〇五年）及び歐羅巴における一九〇〇年の經濟恐慌、これらが、世界歴史の新時代の最重要な歴史的道標である。[1]』

これらの戦爭は皆な言ふ迄もなく帝國主義戦爭であつた。米國がフイリツピンを、英國がトラン

1) レーニン選集、獨逸本、327頁。

スヴアールを、日本が朝鮮及び滿洲を××した此の期間において、佛蘭西はモロッコを、伊太利はトリポリを××した。

(9) 日本の帝國主義政策

これらの資本主義國は皆な帝國主義國である。丸岡氏や高橋氏は、彼等の遂行した侵略の、掠奪の戰爭が、如何なる戰爭であつたかを考へて見られるがよい。それらは「單なる侵略」(!)であつたか? (だが、そも〳〵「單なる侵略」(高橋氏)とは如何なる侵略なのか?)。米國がフイリツピンを奪つた戰爭は、米國を「國民的統一の實現に導く」ところの國民戰爭であつたか? 日本が、×××鐵道と、南樺太と、大連と、朝鮮とを××し、××した戰爭は? 更にまた、兩後の「滿蒙政策」と「二十一ケ條の要求」は? かゝる戰爭、政策が、「國民的統一」の爲め、資本主義の國內的發達に基礎を供する爲め、古典的な「植民」の爲めのものであると說く者をして說かしめよ。あらゆる事實は、反對に、それらが「資本家的膨脹」の爲め、資本の植民地搾取、海外進出の爲め、更に亞細亞の搾取における獨占的地位の獲得に基礎を供する爲めのものであることを語るであらう。戰爭を賭して遂行される斯かる政策、——それは帝國主義政策である。かゝる政策の强行者、——それは帝國主義國である。(一九〇五年の日露戰爭を、一八九五年の日清戰爭と比較せよ。一八九五年にあつては、歐羅巴においてさへも帝國主義は未だ十分に成熟してはゐなかつた。當時の日本は、「不平等條約」の桎梏から解放されて國內の資本主義的發達を促進すべき立場にあつた。かくて日清戰爭は、既に帝國主義を萠芽的、志向的に包藏した戰爭であつたとは言へ、尙ほ——もちろん特殊の意味においてゞはあるが——「國民戰爭」に類する役割をもつとめた。國內における資本主義的發展の速度(テンポ)は、日清戰爭から日露戰爭に至る十年間において、其後の十年間におけるよりも著しく急速であつた。)

(10) 典型的な帝國主義政策と日本

帝國主義の政策は、その成熟した段階、典型的な形態においては、金融資本の政策である、言ひ換へれば、政策としての帝國主義は、金融資本主義をその國內經濟的基礎とするに至る時、最も成熟した、典型的なものとなる。私は、資本の蓄積、擴張再生產の過程の法則性——內在矛盾の展開——の觀點から、帝國主義を理論づけようとした論文(本誌前號所載[1])において、資本主義的發展の內的必然性としての金融資本の成立と、かゝる資本の發展の內的必然性としての帝國主義、卽ち金融資本と帝國主義との內的關聯を、歷史的、具體的にではなく、一般的抽象的に論定して置いた。そして私が、該論文の範圍外のことながら特に附註の一個所で次ぎのやうに述べて置いたの

1) 本書、「帝國主義の必然性」

は、一國における金融資本の發達未發達によつて直ちに其國が帝國主義國であるか否かを決しようとするやうな誤りを避け度いからであつた——

『……しかるに、帝國主義時代の世界資本主義を、それの構成諸單位としての個々の『國民經濟』の方面から考察すると、世界資本主義は、少くとも三群に大別し得る異質の諸單位から成ることが知れる。(一)帝國主義的に能働的原動的なもの、(二)被動的なもの、(三)中間的乃至派生的なもの。第一群は、代表的な金融資本主義國及び之れに準ずるもの、第二群は植民地又は半植民地化されつゝある『國民經濟』群で、最後の中間群は、それ自身金融資本主義の段階に達してはゐないが、第一群の帝國主義的攻勢の影響の下に、反作用的に、自衛上もしくは對抗上帝國主義的政策をとる。例へば日本は、日清戰爭前後から既に第三群に屬し、レーニンの謂はゆる Militaristischer Imperialismus (軍主的もしくば軍閥的帝國主義)なる言葉をもつて特徴づけ得る政策の實行者であつたが、內的轉形によりて今や第一群に屬さんとしてをる。帝政露西亞もまた第三群に屬したが、彼れの發達の歷史的條件の爲め、第一群の或る者にも增して强烈なる帝國主義政策の遂行者であつた。第一群そのものもまた、歷史的には多かれ少なかれ異質の諸單位の集まりであつた。各單位は、發達の歷史的條件を異にする所から、世界資本主義が金融資本のエポックに入込んでからの、帝國主義的政策の遂行における强烈性を異にした。：

…金融資本と帝國主義との關係を形式的乃至『公式的』に考へてはならぬ。帝國主義の考察において、一體系の世界資本主義の時代的特質としてのそれと、その內部において個々の構成單位が個々の場合に演ずる役割とが、兎角混同されやすい。本質的な傾向とその現象形態との混同である。本質は、理論的にのみ、抽象の手段によつてのみ把握され、本質の把握を通じてのみ現象は正しく說明され得るのである。そして現象の說明を怠つてはならない——マルキシズムをドグマと化さずして常に行動への手引たらしめようと欲するならば。」(序でながら、同じ附註の中に、「北米合衆國は、自國の金融資本……」とあるのは、「……自國の獨占的資本……」とあるべきであつた。[2])

レーニンは、更に、次のやう言つてゐる——

『十九世紀の後三分の一は、新しき帝國主義のエポックへの過渡をなした。今や、獨占の用益者は、一個の强大國の金融資本ではなく、二三の極く少數の强大國の金融資本である。(日本とロシアにおいては、近代的金融資本の獨占は、兵力の獨占や尨大な領土の獨占や又た支那等の外國民を搾取する特殊便宜の獨占によつて、一部分は補充され、一部分は置代へられてゐる。)[3]』

2) 「社會科學」四月號、39頁、40頁。
3) レーニン選集(獨逸本)、336頁。

(11) 各國の經濟的發達の特殊性

各國の「經濟事情」に精通される高橋氏や丸岡氏は、レーニンが帝國主義が世界體系として十分に成熟したとなした一九一〇年前後におけるその基本的純經濟的な特徴として彼れのあげた五特徴のうち、せめては氏等の目的に役立ちそうな三つの特徴――「獨占と金融資本の支配が確立され、資本輸出が優れた重要性を得」た――を、當時の帝國主義諸國にあてはめ、おの〳〵が帝國主義國であるか否か、乃至はまた「プチ・帝國主義國」であるか否かを、「檢討」して見られるがよい。(一)英國は、資本輸出において首位を占めた。が、國內における產業の獨占化は、生產においても資本においても、遙かに米國に及ばず、獨逸にさへも及ばなかつた。更にまた、國內における金融資本の發達、その支配といふ點では、佛國よりも獨逸よりも、おくれてゐた。(二)國內產業の獨占化において最も進んでゐた米國は、金融資本の支配においては最もおくれてをり、且つ「資本の輸出國でなく逆に輸入國」(高橋氏)であつた。(三)獨逸は、國內產業の獨占化では米國に次ぎ、金融資本の發達では佛蘭西と伯仲したが、資本輸出では遙かに英、佛に劣つた。(四)最後に佛蘭西では、國內產業の獨占化は、「始んど言ふに足るものがないと言つてよい」(高橋氏)のであつた。――かくて諸君は、諸君の机上で、いくらでも帝國主義國を抹殺することが出來、いくらでも「プチ・帝國主義國」を創作し得るのである。

(12) 高橋龜吉氏の「プチ・帝國主義國」

またそも〳〵高橋氏は、氏の「プチ・帝國主義國」なるものを如何に定義してゐるか? 氏は曰ふ――『日本の資本主義は、之れを國際的に見れば、なる程、帝國主義「的」であるかも知れないが、しかし、それは精々の所、大ブルジョアーに對する小ブルジョアの如き帝國主義「的」國であつて、(猪俣曰ふ、何といふ明確な表現であらう!)、若しプチ・ブルジョアーと云ふ言葉に倣つてプチ・帝國主義國といふ分類(!)が出來るならば、日本はそのプチ・帝國主義國の一つに過ぎない。』[1] 此の特性記述は、徹頭徹尾、比喩で成り立つてゐる。しかも、これ以外に定義らしいものは、氏の論文の何處にも見當らない、だが、氏が、此の曖昧極まる言葉に托してもつて强調せんとしてゐる點だけは、かなりに明白である。氏は、「小ブルジョアが大ブルジョアに搾取されてゐるやうに、」我が日本は、他の帝國主義國に搾取されてゐると言ひ度いのだ。(例へば氏は言ふ――「斯樣の事情であるから、之を國際的に見る限り、日本は被搾取國であつて斷じて搾取國ではない。被獨占國であつて決して「獨占國」ではない。被帝國主義國の仲間に入りこそすれ、決して、帝國主義的仲間に這入る地位ではない。」[2]) 氏は專らそれを强調せんと欲するが故に、帝國主義日本が本國の面

1) 太陽、四月號、5頁。著書、
2) 太陽、四月號、32頁。著書、

積に匹敵する植民地を領有し、數千萬人の異民族を隷屬せしめ、搾取してゐることには一言も觸れない。帝國主義日本が、數十億圓の政治的經濟的對支投資と、尨大な陸海軍とによつて、他の帝國主義諸國を排擊しつゝ、しかも彼等と共に、隣邦支那において工場と鑛山と金融市場で搾取し、「特殊利權」を獲得し、「勢力範圍」を設定し、「不平等條約」と「租界」を固持し、內政に××し、政治的自由を××、反帝國主義××運動を阻止しつゝあることには一言も觸れない。

(13) プチ・帝國主義論の歸結

かくして氏は、××の支那民衆に向つて言ふことが出來よう——『日本はプチ・ブルジョアのやうな帝國主義國に過ぎない。我が日本は、支那と同じやうに、（猪俣曰ふ、すべてかく曖昧に言はねばならぬ——）、大ブルジョアの××や××から搾取されてゐる。支那は、日本と協力して、××や××の帝國主義、白人の帝國主義と戰ふべきだ。日本の帝國主義を敵としてくれるな。』そして、勿論、それは帝國主義者の言葉である。また、高橋氏は、日本の無產階級に向つて言ふことが出來よう——『諸君は、日本の帝國主義と闘ふてはならぬ。日本は、帝國主義國といふよりは寧ろ「被帝國主義國」に近いところの、プチ・帝國主義國である。換言すれば、日本は、××や××の如き、大ブルジョア「的」帝國主義國に搾取されてゐるのだ。諸君は「人口問題」に苦しんでゐるではないか。諸君の生活程度の低くさを見よ。××や××こそは、日本の敵であり、諸君の敵である、先づ、彼等と戰へ！　而して、その戰ひにおいて支那民衆と握手せよ。それが、諸君の解放への道である。忘れてはならぬ、支那民衆と協力するのは、決して、日本の帝國主義に對する彼等の戰ひ、諸君の戰ひにおいてではない！』　そして、勿論それは、主戰論者の言葉であり排外主義者の言葉であり、「勞働者の陣營內におけるブルジョアジーの手先き」の言葉である。帝國主義を帝國主義として、資本主義を資本主義として、階級を階級として把握し得ざる者だけが發し得る言葉である。

(14) 掠奪者のイデオロギー

自國をもつてプチ・帝國主義國であるとする高橋氏は、頻りに、自國が「人口問題」に苦しみ、領土の獨占に苦しんでゐる事を强調する。それは、伊太利の帝國主義者とその手先き、獨逸の帝國主義者とその手先きとが、自國の勞働者農民に向つてなせることを繰り返してゐるに過ぎない。どの國の帝國主義者が、自國は搾取されてゐる、壓迫されてゐると言はなかつたと言ふのか？　高橋氏の「プチ・帝國主義國」なるものは、本質的にはブルジョア・イデオロギーに屬する、帝國主義の時代において、資本主義諸國の領土と人口の大小、人口の密度、重要商品の生產高、獲得せる資源、

市場、放資域の廣狹肥瘠、等、等を比較し、自國が搾取され、壓迫されてゐることを力說することを、なぜ吾々はブルジョア・イデオロギーであるといふのか？

（一）それは掠奪者同志の見方に過ぎないからである。レーニンは曾つて自國のロシアを頭に置きながら、ザーの檢閲官を顧慮して暗喩的に次のやうに書いた――『例へば今ま、一人の日本人が、米人がフイリツピン群島を併合したことを非難するとしよう。彼れが抗議するのは、彼れが併合そのものを憎むからであつて、彼れ自らフイリツピンを併合せんと欲するからではない、と信ずる者が多いであらうか？　そして吾々は、日本人の、反併合の「奪鬪努力」なるものは、彼が、日本による朝鮮の併合に反抗し、朝鮮が日本から分離する自由を主張する時にのみ、眞率なものであり、政治的に誠實なものであると認むべきはあるまいか？』

(15)　發展の不均衡と帝國主義

（一）それは掠奪者同志の見方であるが故に、眼界は掠奪物の範圍を出でず、掠奪の體系を本質的に認識することには全く無緣であるからである。それにあつては、資本主義が資本主義として把握されてをらない。資本主義の生產は、社會の爲めの生產ではなく、個々の資本の利潤の爲めの生產であり、競爭と强食弱肉を知つて社會的計畫と統制を知らない。此の剩餘價値生產の組織は、それ自身の維持と擴大との爲めの政治的體制を生み、國家權力を結び目とする幾つかの「國民經濟」を對立せしめる。「國民經濟」群は、必然的に、資本家的鬪爭の擔ひ手として現はれる。何故であるか？發展する生產技術の諸條件を異にし、自然的條件を異にしつゝ、多かれ少なかれ狹隘な地域內に離隔されたる各「國民經濟」は、組織に固有なる搾取とアナアキーとの故に生產の各部門間に生ずる發展の不均衡と從つて生ずる矛盾とを如何ともする事が出來ない。或者は原料を、或者は燃料を、或者は機械を、或者は市場を、また或る者は放資物を、海外に求める。しかるに、國際的、世界的には、無政府と强食弱肉は更に甚しく、生產の社會的計畫、統制は全く無い。そこに掠奪の體系が展開する。掠奪は、各生產部門、各「國民經濟」の發展の不均衡を緩和せずして却つてます〳〵增大せしめる。對立は尖銳化する。「掠奪者の數學」が生れる。それは掠奪物の分前――自己の分前の貧少さを强調するところの「プチ・帝國主義」の數學である。だが、掠奪物の分配の「不公平」と發展の不均衡――それこそが、帝國主義の成立の爲めの先要條件なのであつた。發展の不均衡の一の現はれとして、資本の集積と資本構成の高度化とが若干の「國民經濟」において一定の程度に達し、獨占と金融資本とが、掠奪の全體系を、支配するに至る時、「資本主義最後の段階としての帝國主義」が成立する。今や、掠奪者は獨占者であり、掠奪の目的は獨占であり、手段もまた獨占である。資本主義的諸矛盾は、著しく增大し、深化し、その質的變化が生ずる。諸對立は極度に尖

鋭化する、――國内的にも國際的にも、經濟的にも政治的にも社會的にも。

(16) 要　約

吾々がもし、丸岡氏や高橋氏と共に、帝國主義の段階の經濟的諸特徴を、個々の帝國主義國に見出さうと試むるならば、十分に成熟した帝國主義の段階にあつてさへ、それらの特徴は諸國のおのおのに完全に一樣に例外なく備はつてをるのでないことを發見する。資本主義においてさうした齊一の發達が可能であるのなら、掠奪の體系は不可能であり、從つてその發展としての帝國主義は不可能であつたであらう。だが、吾々がもし、レーニンと共に、搾取の、掠奪の、鬪爭の世界的全體系を觀察したならば、その構成部分の發達の不均衡にも拘らず、また實にその不均衡を通じて、獨占と金融資本とが全體系の上にその支配を確立し、資本輸出が全體系に亘つて優れた重要性をもち來たれることを見たであらう。そして、國際カルテル、トラストによる世界の分配が始まつたことを見、しかも、强國間の世界の領土的分割が結了したことが、如何にその再分割の爲めの戰爭を不可避ならしめてゐたかを見たであらう。かゝる全事態の最も正確なる描寫と分析とは、吾々はこれをレーニンの名著「資本主義最後の段階としての帝國主義」に求めることが出來るのである。

「獨占と金融資本の支配」が、全體系について語られる時、謂ふ所の支配は、必ずしも個々の帝國主義國についての國内的支配を意味しないことは言ふまでもない。一國内に、金融寡頭政治が成立せざる場合、乃至はその國が未だ謂はゆる「債務國」である場合でさへも、植民地半植民地に對する支配は、「金融資本の支配」の樣式をとることが出來る。かゝる支配は例外なく政治的壓力を伴ひ、かゝる金融資本はしば〳〵「政治借款」の形態において作用する。對外的の意味における金融資本の支配において、政治的要因が優越すると否とは、搾取國及び被搾取國の内部的構成、相互の關係、第三者に對する關係、等、その時々の具體的情勢によつて定まる。「獨占の支配」とても同樣である。それは必ずしも個々の帝國主義國における對内的支配を意味しない。國内では未だ多くの産業部門が自由競爭の段階にあつても、特定の産業部門に生ずる獨占は、しば〳〵、對外的には支配力を有し得る。そして「獨占の支配」もまた例外なく政治的壓力に伴はれる。帝國主義の時代における經濟的な支配は、原則として、もはや積極的の政治的な力に俟たなければ作用することが出來ない。だから、軍備は必然に競爭的に擴張されなくてはならぬ。個々の帝國主義國について言へば、金融資本と經濟的獨占とは、しば〳〵、經濟外の諸力、諸獨占によつて『或は補充され、或は置代へられてゐる。』 尨大な領土の獨占、軍備の獨占、搾取の特殊便宜の獨占、等、等。そして此の場合の獨占とは、言ふまでもなく、一定範圍内の無競爭狀態を實現せしむる力の謂ひである。

帝國主義は、鬪爭の過程であり、絶えず發展する掠奪の體系であり、その全體性において政治＝

經濟的な過程である。經濟的特徴のみをもつて、帝國主義のすべての面、すべての相を律しようとする者は、さうすることによつて却つて經濟的特徴の特殊の重要性を抹殺し、かくして帝國主義を漫畫化する。吾々は、漫畫かきと袂を分たねばならぬ。

帝國主義國とは、國内における獨占と金融資本の支配が確立し、資本輸出が優れた重要性を有する國であると言つたのでは、定義にもならない。そうした特性記述は、高か〳〵、その國の帝國主義の經濟的基礎を示さんとしてゐるに過ぎない。帝國主義國とは、帝國主義の世界體系の構成部分として、それ〴〵の範圍及び程度において多かれ少なかれ獨占を享有しつゝ、自己の獨占的地位の維持と擴大との爲めに戰爭を賭して抗爭せざるを得ないところの、また抗爭する力あるところの、資本主義國の謂ひである。で、勿論、一國は單に植民地を有するが故に帝國主義國なのではない。單に陸海軍を有するが故に、また單に戰爭するが故に、帝國主義國なのではない。そして、今ま特性づけたやうな資本主義國によつての抗爭、戰備、掠奪、併合が、謂ゆる「侵略主義」、「軍國主義」以外以上のものであるのは多言を俟つまい。

(17) 日本帝國主義の新段階

資本主義日本は、日露戰爭によつて、近代的帝國主義國としての自己を、決定的に立證した、——言ひ換へれば、獨占的地位を爭ふ資本主義國として、帝國主義の世界體系に編み込まれたことを。そして、それは更に何を意味したか？

(一) 帝國主義政策の遂行を必然ならしめられたことを意味した。英、獨、佛を波動心中とする獨占と金融資本の支配の波動は、到る所に自身の對立物をつくり出した。資本主義日本もその一つとして現はれたのである。此の新しき支配樣式の來襲するところ、若干の内部的及び環境的條件を備へた資本主義國は、自國の資本の支配をも國外へ擴大すべき强き促迫に驅られる。資本主義日本は、極東に進出し來たれる各國資本との對抗において、當面の「經濟價値」の爲めといふよりは寧ろ爾後の膨脹への足場の爲めに、先取し得べき掠奪物を先取せずにはをられなかつた。

(二) 更にまた何を意味したかといふに、それは帝國主義政策を强行し得る力をもつたことを意味した。此の力は、レーニンの指摘せる武力の優越と、搾取物への近接とに加へて、近代的産業における相對的先進から生じてゐた。

爾來、帝國主義日本が如何なる政策を遂行し來たつたか、そして今ま何を搾取し、隷屬せしめてゐるかは、吾々の既に知る所である。日本は帝國主義國であるか、「プチ・帝國主義國」ではないか、——さうした問題からは、吾々はもはや完全に解放されなくてはならぬ。そして吾々は問はねばならぬ、日本の帝國主義が世界大戰以來入込める新しき段階の特質は何か？ と。

要約的に言へば、それは次の諸點にあらはれてゐる――

(一)帝國主義の全體系の發展は、世界大戰を轉期として、世界資本主義を沒落の過程に導き入れた。その全過程のうちにあつて、帝國主義日本は、今や、全然新らたなる對立關係に引入れられてゐる。日本の帝國主義が直接に關はるところは、東洋及び南洋である。

(1)亞細亞、南洋に於ける英國の覇權が動搖し、英國の帝國主義は退却戰を戰ひつゝ既得の地位を死守しようとする。

(2)日本は、英國の××的同盟者たる地位より、東洋に於ける最强の競爭者たる地位に轉じた。此の對立は、ロシアの帝國主義の崩壞、獨逸、佛蘭西の衰退によつて、著しく直接的な形をとる。

(3)日本の南洋進出によつて、米國との對立が激成された。米國は更に、急速に資本輸出國に轉化したことにより、しかも、南米への資本輸出が遠からず停頓すべき所から、支那への進出が避くべからざるものとなり、玆でも亦た日本との對立が尖鋭化する。米國の帝國主義は、未だ主として經濟的な支配を目指してをり、この實力にも富んでゐるが、對立者たる日本の軍備と戰略的地位とに拮抗するのでなければ其の目的を達することが出來ない。

(4)かくして、東洋に於ける帝國主義的對立は、世界大戰後の三大强國の對立である　それは帝國主義の全體系における對立抗爭の重心が東洋に移りつゝあることを意味する。

(5)同時に、此の新しき對立關係の故に、日本はもはや、戰需品の供給において以前の如く英米二國に依存することが出來ない。重工業と戰時工業とは、如何なる價を拂つても維持し、「獨立」せしめねばならない。

(6)此の必要は、後述する他の理由と共に、支那における「特殊利權」の維持と伸長、等、等の帝國主義政策を、死活的重要事として命ずる。しかるに、その支那はもはや從前の支那でなく、反帝國主義の革命運動の支那である。

(7)支那の革命的勢力を飽くまでも反帝國主義の方向に導いて諸國の帝國主義と對立せしむべき一大勢力として、反帝國主義の勞農ロシアがある。革命支那と、無產階級ロシアとは、東洋における帝國主義にとつての全然新しき對立力である。

(8)更にまた、幾つかの植民地、印度、××、××、は獨立を求めてゐる。

(二)全體として沒落過程に入れる世界資本主義の特殊の一環として、日本の資本主義經濟は、その生產力と市場との間の矛盾が異常に深大なものとなつてゐる。その矛盾を克服する手段として、帝國主義政策は、今や、日本の資本主義にとつて範疇的な必要となつてゐる。(此の點は、「中央公論」七月號の拙稿「我國資本主義の安定の型、沒落の型」の後半に展開して置いた。)

（三）日本の帝國主義は、今や、新しき國内經濟的基礎の上に立つ。

(1)産業の重點は工業に、工業の重點は輸出工業に移り、重工業の擡頭を見た。

(2)生産及び資本の集積が進み、自由競爭の揚棄としての獨占が、全經濟生活にとつて決定的意義をもつに至つた。金融資本は急速なる發展過程にあり、國家資本主義的トラストの機構が形成されつゝある。

(3)各産業部門間の矛盾、わけても工業生産とその原料、工業全般と農業との矛盾が著大となり、農民の窮乏化が甚しい。

(4)過剰資本が異常に增大し、資本輸出の促迫が强い。

（因に、これらの諸點は、日本帝國主義の新段階の重要な特徵をなすものであるが、吾々が此の部面の分析究明を試みるのは日本帝國主義の經濟的基礎を明かにせんが爲めであり、しかもそれを、諸矛盾、諸對立の新しき形態の基礎として明かにせんが爲めである。日本が帝國主義國であるか無いかを決定せんが爲めではない。）

（四）國内政治的には——

(1)さきの支配者群たりし文武の國家官僚に對するブルジョアジーの優越。

(2)コンツエルン型の巨大資本に對し、商工資本と、土地資本とが、それ〴〵に、多かれ少なかれ獨立の政治的結成に向はんとする傾向。同時に勞働者及び貧農に對し、且つ帝國主義政策の遂行において、ブルジョアジーと地主及び舊支配者群の協同戰線。

(3)無産階級の政治的結成——勞働者農民の政治的協同戰線。

(4)小ブルジョア層の政治的覺醒と動搖。小ブルジョア政黨の擡頭。

(5)新たなる經濟的基礎、新たなる國際的對立の基礎の上に於ける、新たなる政治的反動。

（右の諸點の多くは、最近に發表した三論文において筆者の既に論及した所であるが、尙ほ、詳論を要すること勿論である。）（一九二七・七・五）

泥沼に陥沒した「プチ・帝國主義」者

——高橋龜吉氏の駁論(?)を笑ふ——

本書に收めた第三の論文「資本主義日本の帝國主義」に對する高橋龜吉氏の「駁論」が、雜誌「改造」並びに「太陽」の八月號にあらはれた。それを讀んで見ると、同じ八月の雜誌「社會科學」に發表した私の前稿「日本帝國主義の新段階の問題」(本書の第四論文)が、既におのづから高橋氏の「駁論」に對する徹底的批判に該當するものとなつてゐることを知つたが、私は尙ほ稿を新たにして批判の一文を草し、「改造」九月號に寄せた。それが、雜誌社の都合で十月號に載つた。此の一篇がそれである。高橋氏の「駁論」は、私の批判の重點に對しては殆んど答へ得ずして而かも虛勢の大風呂敷をひろげ、特に日本現在の無產階級運動を毒する日和見主義指導方針の理論的誤謬を糊塗すべく最惡のジャーナリズムを發揮したものであるから、私は更に氏の前稿にも遡り、それと「駁論」との一切を對象とする包括的な、假借なき批判を試みる必要を感じた。本篇は、その前半である。

一、何が「駁論の駁論」か

(1) 銷夏の讀物

『左翼帝國主義理論の自殺』と題して改造八月號にあらはれた高橋龜吉氏の文章は、先づ、『坊間傳ふるところに依ると、今度左翼側から私(高橋氏)の小論に對して駁論せられるについては、左翼陣營の理論家諸君が會合して研究せられ、而して、誰れがその駁論の擔任者になるかと云ふことも色々詮議せられて、猪俣氏が其の任に當られたと云ふ』『噂さ』を報導して、[1] それを、『錚々たる左翼理論家の諸君が、拳を揃へてその駁論を發表せられた』[2] といふ、氏にとつては貴重な事實と衝突せしめ、此の憐れむべき理論家共に教ふるに、『帝國主義といふ概念は……例へば、學校と云つたやうな種類に屬するものである』[3] ことをもつてし、就中、『帝國主義に對する造詣の最も深い學者として著名である』[4] とかいふ猪俣が理解する帝國主義には、『世界規模のもの、東洋規模のもの、一國規模のもの』があることを指摘、嘲笑し、[5] 『一國の帝國主義國』はあるが『一國の帝國主義』はあり得ないと切言し、[6] また、或は讀者をして『第三インタナショナルの大會』で帝國主義を論ずる高橋氏その人を想見せしめ、[7] 或は讀者の爲めに『論理學上謂ふ所の ignoratio elenchi』とは『卽

1) 改造八月號 50頁。 2) 49頁。 3) 54頁。
4) 50頁。 5) 55頁。 6) 同上。 7) 56頁。

ち論點不知』なりと講じ、[8]『ペダン的である』と頻りに猪俣を叱り、果ては『マスタベーションの快味』を說き、[9]進んで『現に世の中に實在する社會に於ては、マルクスなどの、資本主義理論や、帝國主義理論(？？)に現はれてゐるが如き、單純な資本主義國もなければ、帝國主義國(！)も無論ない。斯の如きことは、この種の實際問題に初歩的な關心を持つ誰れでもが常に心得てゐることである』と絶叫し、[10]かくして遂に『左翼帝國主義理論』を『自殺』(！)せしめたものである。およそ高橋氏の此の長論文を通讀したほどの根氣ある者にして、あの八月號に滿載された「鎖夏の讀み物」の一つとして誠に絶好であることを疑つた者はあるまい。が、畢竟、鎖夏の讀み物以外の何物であるといふのか？　すくなくとも私は、氏の「駁論の駁論」によつては何一つ敎へられなかつたことを玆に卒直に告白する。

(2)　蘆原將軍の一味？

氏の論文のサブタイトルには『猪俣其他左翼理論家諸君の駁論の駁論』とあり、論篇の第一節の小みだしは『猪俣氏一派の駁論の構へ方』とある。即ち、改造六月號の拙稿『資本主義日本の帝國主義』[11]は、私が高橋氏に對してなせる駁論と見做されてゐる。駁論したといふからには、それに先立つて私は高橋氏によつて批判されてゐなければならない。だが、高橋氏は、氏の自殺論以前の如

8)　66頁。　9)　同上下段。　10)　69頁。
11)　本書の第三論文。

何なる論文の如何なる箇所において私を批判したことがあるといふのか？　批判されたことのない私が、駁論し得る筈もない。此の論爭における批判は私に始まるのである。

高橋氏は、『日本資本主義の帝國主義的地位』[1]その他の論文において、しば〳〵「左翼理論」なるものを「批判」したつもりでゐた。そして此のつもりは、「左翼理論」なるものに對する完全なる無理解に基づく獨よがりに過ぎない。氏が「批判」の對象としたつもりでゐる「左翼理論」なるものは、世界無產階級運動のいづこの左翼もあづかり知らぬ「理論」であり、まして私の知る所ではない。だから私は、本誌六月號の拙稿において言つた——

即ち、氏は、「左翼理論」なるものを評し、それは、『現に日本の資本主義が「資本主義最後の段階としての帝國主義」にまで發展したるが故に日本の資本主義が崩壞に直面する』となすが故に直譯であると難ぜられたのであつた。さうした珍奇な左翼理論なるものを、氏が氏の混亂せる頭以外の何處から引出して來られたかを知るの自由は吾々はあひにく氏によつて毫も與へられてをらない……[2](更に私は、八月號「社會科學」の拙文『我國資本主義の現段階の問題』においても右の點を力說して置いた。[3])

更にまた、如何に高橋氏が、氏の謂はゆる「左翼理論」に無理解であらねばならぬかは、「資本主義の崩壞」といふ容易ならぬ概念が氏の頭腦の一角において演じつゝある亂舞のさまを瞥見して

1)　太陽四月號。
2)　改造六月號 65頁。本書、125頁
3)　「社會科學」八月號　404—412頁。本書の第四論文、181—190頁

も知れよう。氏は、『私（高橋氏）は日本の資本主義が已に行詰り、崩壊しつゝある（！）ことは、いち早くこれ迄で幾度か實證（！）して來た』と述べた言葉の直ぐ次ぎの行で、『日本の資本主義がそれ自身の崩壊に直面するに至つた』と言ひ、[4] 同じ論文の終りにおいては『私のいち早く主張し來れる如く、それはいま徐々ながらその崩壊に直面してゐる』[5] と說く。現に崩壊しつゝある、にも驚くが、同一の事實が、こんなに幾つにも見えるのだとすると、高橋氏の頭腦こそが『いま徐々ながらその崩壞に直面してゐる』のではないのか？ ——實際、氏の頭の何處かに「左翼理論」の案山子をつくりあげ、或はそれを批判し得たとなし、或は「駁論の駁論」においてそれの自殺を口走つて意氣揚々たるやうな氏が、人をして、「蘆原將軍」の一味なるやの感を抱かしめなければ不思議であらう。

二、高橋氏は何故泥を投げたか

(1) レニニズムの一發展としての主戰論（！）

筆者知らず、出所知らず、えたい知れずの「左翼理論」を「批判」せんとした高橋氏の論文はしかしながら、十分な理由から、徹底的に批判さるゝに價した。その理由を私は、私の批判（改造六

4） 太陽四月號 3頁。著書 41頁。
5） 太陽 34頁。著書 92頁。

月號拙稿）[1] の序論において兩面より述べて置いた。その一面は、帝國主義ブルジョアジーと闘爭する無產階級運動は如何に指導さるべきかの問題にかゝはるものである。私の批判の重點は、高橋氏によつて提起された此の問題、わけても氏がそれに與へた解答の上に置かれた。

高橋氏は、如何なる指導方針を主張したか？ 氏は、我國の無產階級及び被壓迫大衆の運動を、支那におけるが如き反帝國主義運動に導けと主張する。[2] しからば、反帝國主義運動に導けとは？ それは、我國の無產階級及び被壓迫大衆をして、自國のブルジョアジーの搾取より自己を解放するに先立つてまづ、外國の帝國主義ブルジョアジーの搾取より自己及び自國のブルジョアジーを解放する爲めに戰はしめよといふにある。[3] 此の場合の外國とは何か？ それは、米國であり、英國であり、佛國である。[4] 言ひ換れば、我が無產階級及び被壓迫大衆の當面の任務は、自國のブルジョアジーその他の支配者群と協力し、英米佛に對する戰爭を敢行することにある、——これが高橋氏の見解である。

では、此の見解は、高橋氏一個の獨立の見解であるか？ 氏によればさうではない、それは實にレーニンの理論の一發展である。レーニンは『被帝國主義國（卽ち植民地や半植民地諸國）における國民運動乃至民族運動が、帝國主義の打破と如何に密接な關係にあるかを洞察』し、『斯樣な被帝國主義國の民族運動、國民運動に、極力支持を與ふべきことを力說』した。しかるに、日本は伊太利

1） 本書の第三論文、115—7頁。 2） 太陽四月號33頁7—9行。著書90頁。社會科學四月號144頁4行—145頁4行。著書33頁。
3） 太陽四月號 4頁7行—10行。著書 42頁。 4） 同上 33頁3行—4行。著書90—1頁。社會科學145頁 4行。著書、34頁。

の如き「プチ・帝國主義國」であり、かゝるプチ・帝國主義國たる日本の利害は、『英米等の帝國主義國と一致する所よりも、却つて、支那、印度其他の被帝國主義國と一致する所の方が遙かに大である。[5]』即ち日本の無產階級運動は、植民地や半植民地國の民族運動の性質を有し、從つて反帝國主義運動にまで展開せしめねばならぬ。——かやうに高橋氏はレーニンの理論を發展(!)せしめた。また、我が日本は、たか〳〵プチ・帝國主義國に過ぎず、『被搾取國であつて斷じて搾取國でない[6]』といふ認識に到達するに當つても、高橋氏は、帝國主義に關する「レーニンの尺度[7]」をもつて日本をはかるといふ手續をとつた。が、それだけでもない。日本を見るに當つて『更に重大なことは、レーニン其他の言及から漏れた所の人口問題である。この點は、歐洲人には從來問題ではなかつた所であり、從つて恐らくレーニンなどの見逃した所であらうと思ふが』[8]、此の『人口問題に對する解放的要求こそは、……日本としては（伊太利其他人口過剩に苦しむ國皆然り）之れの解決は決死的に圖らなくてはならない事情に迫りつゝある要求』である。[9]『人口問題の解決策は……專ら英、米、佛等の領土の獨占を解放せしむる「解放戰」に行く外策はない。』『人口戰爭は一の無產階級の解放戰としての色彩の深いものである。[10]』

かくして、わが高橋氏はレーニン以上に出づることを忘れなかつたと同時に、また、常にレーニンの權威において語ることを忘らなかつた。氏は專らレーニンの權威を借りて左翼を「批判」し、

5）太陽四月號 34頁。著書91頁。　6）同上 32頁。著書89頁。
7）同上 9頁。著書52頁。　8）同上 31頁。著書88頁。
9）社會科學四月號 145頁。著書、34頁。　10）太陽四月號 33頁。著書 90頁。

『左翼運動の理論的崩壞』を宣言したのであつた。（因に、これは今ま私が問題にしてゐる高橋氏の諸論文を收めた氏の近著の標題であることを紹介して置く）。

之れを要するに、氏の論文の重點は、帝國主義の現段階に於ける我國無產階級運動の戰略及び戰術の根本方針を示すことにあつた。人口論や、プチ・帝國主義論は、『反帝國主義運動へ！』、『英米佛と戰へ！』といふ氏の主張の論據として役立つたものに過ぎない。そのことは、高橋氏自ら反覆强調してゐるところである。

(2) 私は如何に批判したか

私の批判の焦點もまた、かくて、當然に氏の根本主張の上に置かれねばならなかつた。かくて私は、私の小論の序論をば「この問題の重要性の强調に捧げ、[1] 結論に當る部分「無產階級の任務」及び「結語[2]」の數頁をば、高橋氏の根本主張に對する直接の批判にあてたものである。

で、高橋氏にしてもし、眞に私を論駁せんと欲し、また眞に私を論駁し得るのであつたら、他の如何なる論點を措いても、先づ、此の部分の批判——氏の根本主張に對する直接の批判——をこそ駁すべきであつた。之れの駁擊に力點をおいてこそ、「駁論」は駁論たり得たであらう。——しかるに、氏の書いた「左翼帝國主義理論の自殺」（改造）と、「左翼一派の駁論は何を曝露したか」（太

1）改造六月號 60—62頁。本書の第三論文、115—7頁。
2）同上 80—83頁。本書の第三論文、159—163頁。

陽）と、併せて五十七頁にのぼる長大なる「駁論の駁論」において、氏は、たゞの一行をもそれに費してをらない。――氏は、いつたい、何の爲めに、何を長々と書き散らしたのであるか?!

では、私は如何に批判して置いたか？　氏が飽くまでもレーニンの權威において語らんとしてゐたが故に、私もまたレーニンに行くの當然なるを思つた。そして、レーニンが氏とは全く正反對の見解と主張との持主であることを、氏の論點の一々について示した。

一、高橋氏の直覺の鋭どさにも拘らず、レーニンは、事實、「伊太利の帝國主義と社會主義」なる論文において、多くの數字まであげて伊太利の「人口問題」――歐洲人の「人口問題」を論じてゐる。

二、彼れはまた、伊太利を、形容句抜きで、帝國主義國なりとする。そして日本は帝國主義强國であるとした。

三、周知の如く、伊太利の「人口問題」は、日本の「人口問題」よりも遙かに「惡化」してゐた。そして伊太利の國民主義者、排外主義者、「愛國的」社會主義者――コラディニ、ラブリオラ、等、等――は、恰もわが高橋龜吉氏の創意を横奪し先取せんとしたかのやうに、我が伊太利の無產階級は、伊太利の解放の爲めに、英、米、獨、佛と戰ふべきであるとなし、「反帝國主義運動」を高唱してゐた。もし日本の高橋氏今日の主戰論が、レーニンの理論の正しき論理的歸結であるのならば、氏の伊太利の同志ラブリオラ等の主張に對しては、レーニンは滿腔の贊意を表してゐた筈である。然るに彼れは、さうしたことを臆面もなく主張する彼等こそは、「勞働者の陣營內におけるブルジョアジーの手先き」であると罵倒した。

四、またもし、高橋氏の言ふが如く、プチ・帝國主義の日本の「人口戰爭」が、『無產階級の解放戰』であり得るものならば、プチ・プチ・帝國主義の伊太利の「人口戰爭」は、尙更らさうであつたであらう。然るにレーニンが言つた、「人口問題の爲めに戰爭せよ、それが諸君の解放への道だ！」とは、帝國主義ブルジョアジーの言ふことであり、彼等がさう言ふのは、「我々の帝國主義的利益の爲め、我々の資本の特權と優先權との爲めに戰爭せよ」とは言へないからである、帝國主義ブルジョアジーの支配下にある無產階級の運動を指導する者が、「故意であれ過失であれ、」何かの理屈をつけて無產階級を戰爭に導かうとする時、彼等は事實において帝國主義ブルジョアジーの利益、特權、要求を防衛してその食客となり、從僕となるのである、と。――で、高橋氏がその權威の下に語るところのレーニンに依れば、帝國主義國の「人口戰爭」は、たとひそれがプチ・プチでも帝國主義國である限り、絕對に『無產階級の解放戰』とはなり得ない。

五、更にまた、高橋氏の强調するが如く、今日の日本は『被搾取國であつて斷じて搾取國でない』としたら、伊太利は尙更らさうであつたであらう。そして、一の帝國主義國が他の帝國主義國

に搾取されてゐるといふことが、それほど強調に價するとしたら、レーニンは伊太利については何倍にか強調し得た筈である。だが、彼れは、高橋氏とは正反對のイデオロギーをもつてゐた。彼によれば、他國よりも多く搾取せんとする帝國主義ブルジョアジーの立場からすれば、自國よりも多くの植民地、多くの資本、多くの軍隊を有する國は、みな、自國を搾取してゐることになる——自分の搾取し得べき分を奪つてゐると言ふ意味において。が、自分が現實に搾取してゐることの方は全く問題としない。しかるに、現實に搾取される一方の無產階級——帝國主義ブルジョアジーの支配下にある——の立場からすれば、自國が如何なる國によつて如何に搾取されてゐるかは全く問題でない。問題は、反對に、自國のブルジョアジーによつて如何なる弱小民族が如何に搾取されてゐるかにある。自分達と同樣に搾取されてゐる彼等こそが、同一の搾取者に對する共々の闘ひにおいて、眞に自分達の戰友であり、自身の解放戰における信頼すべき援軍であるから、

六、即ち、高橋氏が極力强調する通り、「民族運動、國民運動を支持すべき事を」、レーニンが極力强調したのは、あひにく、「プチ・帝國主義國」とかいふものにおけるさうした運動の事ではなく、如何なる意味においても帝國主義國でない國における運動を指しての事である。帝國主義國に於ては、プチであれ其のまたプチであれ、言葉の正しき意味における民族運動　國民運動は斷じてありえない。あるやうに言ふのは、まがひ物、喰はせ物である。——そして以上の見解は、階級を階級として、資本主義を資本主義、帝國主義を帝國主義として、しつかりと把握した者——レーニンの如き——が、當然にもたねばならぬ見解である。さやうに把握し得ない者だけが高橋氏の如き見解に立つ。

(3)　泥沼に陷沒す

讀者諸君、私は、高橋氏に敬意を表し、特にレーニンの言葉を引用しつゝ、右の諸點を昂揚して置いたのである。そして恐らく、氏の根本主張の救ひ難き誤謬の指摘として、從つて氏のプチ・帝國主義の議論全體の顚覆の證明として、これくらゐ端的な、適切な、また徹底的なものはあり得なかつた。氏にしてもし曩きに揚言せるが如く、『若しも、私（高橋氏）の考が間違つてゐると云ふことが分れば、私は、少しの躊躇もなく左翼の軍門に降る』といふ勇氣をさへ持合してゐたならば、八月號改造及び太陽に發表された氏の文章は、折柄の銷夏號に「錦上花を添へる」底のものである代りに、自己の誤謬の卒直な認識——どんな人間にもあり得る過誤の男らしき承認に出發し、新しき基礎の上に新しき議論を展開したものであつたであらう。

だが、プチ・帝國主義者そのものゝやうに仰々しい法螺鐘太鼓を打鳴らし吹立てゝ『左翼の軍門』を逆襲するかに見せかけたあの「駁論の駁論」において、何故に氏が論爭の焦點に觸れるを恐るゝ

こと處女の如くであつたかの理由もまた、今や全く明かではないか。明かに――吾々の批判を讀了したプチ・帝國主義者は餘りにも意外な自分を見出したのである　それは泥沼に落ち込んだ自分であつた　彼れの兩脚は早や餘りにも泥深くはまつてゐた。だがしかし、降伏の自認は、將軍一代の恥辱でなければならぬ。さりとて、答へざるもまた、屈服を裏書きする。悶ゆる者に惠みあれ、窮餘の一策が胸に浮ぶ――、批判者共に泥を投げろ！

かくして、駁論の爲めの駁論は書かれた。しかも泥まみれに！　なぜであつたか？　狼狽者の泥は天に向つて投げられた。しかも彼れは、動ぜぬ者のやうに大きくそり反つてゐた。

(4) 虚勢の破綻

虚勢の破綻は、隨所に見られる。

（例一）　氏の論文の小みだしの一つ『所謂帝國主義「世界範疇論」のコケ嚇し』は、嚇しもせぬに嚇かされたことの自己告白である。

（例二）『氏（猪俣）は先づ、「藪蛇の恐れでもあるかのやうに」（此の言も、氏（猪俣）が、私（高橋氏）に見當違ひにも下さつたものであるから、いま氏の必要に際して返上致す』[1]とは、いつたい、何のことか？　あわてなさるな、「藪蛇の恐れ」などいふ文字が、私の論文の何頁何行にあるといふのか――。これこそは絶好の懸賞字探しもの。そしてそれこそが「藪蛇」といふものではなかつたか？

（例三）　讀者諸君は、高橋氏の八月號改造の論文の五五頁上段を一讀あれ。――高橋氏は、玆で六月號の私の論文の七十五頁にある言葉二行ほどを引用し、『こゝに讀者の先づお目に止められんことは』と手品師の口上を使ひ、さて、猪俣はさう言つた『その舌の乾はかない裡に』、もうこんなことを言ふのだといつて、私の論文の六十四頁から四行ほどの言葉を引いてゐる。「想ふても見よ」、七十五頁で言つた『その舌の乾はかない裡に』、その十一頁も前に言つたことが言へるものか、言へないものか。が、高橋氏の言ふことが愉快である。――『それで猪俣氏の頭には矛盾も何もなくして分つてゐるらしいが、私には一寸も分らない。皆さん、猪俣氏の仰言る意味が御分りになりますか』と。分らない筈ではないか、――氏が手品のしくじりをしたといふことのほかは。

（例四）　前の論文で高橋氏は、レーニンが明治時代の日本について言つた言葉を引用し、『日本が今日（！）資本の輸出國でなく逆に輸入國であることは、レーニン自ら之を明言してゐる』と唱へてゐた。私は六月號の拙稿で、さういふ貴重な『高橋氏の發見を見落すことは公正を缺く』と言ひ、それをうけて次ぎの頁で、『だが、讀者よ、不機嫌な顏をし給ふこと勿れ、それらの（日本の「國際的地位」に關する高橋氏の澤山の）數字たるや、これほど公正を重んずる私にさへ、最早や眞面目に取り上げて見る勇氣を起さしめないほどに、云々』と言つた。此の「公正を重んずる」が

1) 改造八月號 62頁。

アイロニーである位のことは、ラテン語などを自由に引用するほどの博學者高橋氏に解らない筈はない。しかるに氏はそれを、『しかも氏（猪俣）は「これほど公正を重んずる私」と自稱せられてゐる、云々』ともちり、如何にも私が眞面目腐つて公正を自負してゐるかの如き印象を讀者に與へようとしてゐる。こんなアイロニーの逆用も、時には愛嬌で惡くない。だが、その「公正」を五六遍も重用するのでは、氏は、ちと公正を重んじ過ぎはしなかつたか。

狼狽がさせたのか、狡獪がさせたのか、それは見ようであり、取りようであらう。が俚言の一つに、「蛙は口から呑まれる」といふのがある。高橋氏は、氏の長論文の初めの方で、『斯樣なわけで、いま猪俣氏の駁論は(!)は、單なる氏一個の研究論文ではなくして、我が無產階級左翼運動の理論として、多分に實踐的意義を持つてゐる。こゝに、猪俣氏の駁論に對し、我が無產階級運動は、假借なき批判を要求せざるを得ないのである。以下私の猪俣氏に對する駁論が行文の綾に紛れて(?!)甚しく禮を失する場合があらうとも、右の如き意味に於て、何卒寬容せられんことを、豫め執筆者諸氏に御願ひする』と述べてゐる。此の切口上は、二つの點で興味をそゝる。無產階級運動にとつての多分の實踐的意義の故に、無產階級に代はつて、假借なき批判を、私に向けようといふほどの氏なればこそ、實踐的意義の最も深く直接的な、無產階級指導方針の爭點、反帝國主義運動の爭點に對しては、口をあけるさへ恐わいといふのか。また、『行文の綾に紛れて』とは何か。「文書僞造」みたいになることか。とにかく、餘りに紛れ過ぎてゐる。

だが、「何卒寬容せられんことを」氏が乞はねばならないのは、私に對してではあるまい。それは、氏の自我と、氏が代辯せる無產階級とに對してゞなければならぬ。そのことは、問題の重點を回避したる氏が、如何なる點を如何に捉えて「駁論」を書いたかを學び知るにつれ、ます〳〵明白となつて行く。

三、「プチ・帝國主義者」の諸幻想

(1) 溺るゝ者の摑んだ藁

わが親愛なる高橋氏は、氏が駁論し得ると感じたでもあらう六つの論點を拾ひあげた。その一つは、私の論文の中の次ぎの一句である――『高橋氏の思考における根本缺陷の一つは、資本主義が資本主義として、階級が階級として把握されてゐないこと、從つて諸多の矛盾と對立とがぼやかされ、まやかされてゐることにある』。此の一句、――それが、溺るゝ者の摑んだ藁であつた。

氏は、右の言葉だけを拔き出し、その前後の文章から全く孤立せしめ、氏の反駁の用に供さねばならぬ。そこで氏は、それを引用した直後に何と言つたか。曰く、『斯くて、氏（猪俣）に由ると、

いま、われ〳〵が日本といふ具體的な客觀的條件の下に於て、無產階級運動の實踐的政策論を研究する場合に於て尙ほ、抽象的に、概念的に單純化された資本主義論や、帝國主義論を、何ものにも制約せられずに、之をその理論のまゝに發展さすべきである、然らざるものは、誤謬だといふことになるらしい』と。何で、さういふことになるらしいのか、それは無論、氏の明言する限りではなく、また明言し得る所ではない。私はそれに對し、たゞ事實をして答へしむれば足る。(一)私はその一句を書き下すに先立ち、十四頁以上に亘つて極めて具體的に「我國資本主義の現段階」を分析し、我國帝國主義の歷史的發展を述べてその新しき段階の特質を明かにし、「無產階級の任務」にまで及んでゐた。(二)私は更に、右の一句に始まるパラグラフにおいて高橋氏の安價で甘やかな資本主義崩壞の理論に論及し、つゞいて氏の全議論の核心であるところのプチ・帝國主義者的主戰論に對する批判に進んでゐた。そして此の批判こそは、私が本稿の前段において改めて展開しつゝ指摘した通り、高橋氏の遂に答へ得ざりし所のものであつたのである。

(2) 階級對立の解消

では、私は、高橋氏の如何なる思考において、資本主義が、階級が、矛盾對立が、明確に把握されてゐないと評したのであるか。それは、實踐的、具體的な問題の解決、政策の樹立に關する氏の思考においてのことである。ではまた、何故にさう言つたか？

第一、氏のスローガンたる「日本の無產階級は英米佛と戰爭せよ」は、プロレタリアートとブルジョアジーとの對立を解消して兩者の協調を實現せしむるものだからである。かゝる協調の結果は、必然的に、プロレタリアートをしてブルジョアジーを支持せしめ、ブルジョアジーの指導下に立たしめずにはおかない。尤も、「私は敢てブルジョアジーと協調せよ、ブルジョアジーを支持せよ」とは言はぬ、と高橋氏は辯解するかも知れない。だが、その辯解こそが、階級關係のぼやかしを、まやかしを、暴露する。氏は、我が無產階級をば、ブルジョアジー及び文武の國家官僚よりなる我國の支配者群と協調せしめずして、しかも英米佛と戰はしめることが、如何に可能であるといふのか。かゝる戰爭と、その一切の準備とにおいて、前者が後者の指導下に立つことなしに、斯かる戰爭の遂行と其の一切の準備とが如何に可能であるといふのか。今ま何づれの階級の手に國家權力があり、兵馬の統帥權があるといふのか。

(3) 日本ブルジョアジーの方向轉換

幻想に富める高橋氏は、頻りに、我國無產階級の「解放」の戰爭を口にしながらも、ひそかに（しかも十分に？）、かゝる戰爭が事實上帝國主義の戰爭となるべきことに氣づいてゐる。そこで氏は、

日本といふ一社會からその內部的階級的對立並びに現實の支配服從關係を抹殺し去り、たゞ單なる（日本）といふ言葉で語ることによつて、氏の解放戰爭論の辻褄を合せねばならぬ。で、氏は曰ふ、（猪俣註、下の引用文中、括孤に入れた言葉はみな私のもの）。——我が無產階級は、（我が帝國主義ブルジョアジーの支配下にある）「日本」をし、『その地位の寧ろ、被帝國主義國の利害と一致することを自覺せしめ(！)、彼れ（日本）が被帝國主義國として反帝國主義運動に努力することに由つてのみ、彼れ(日本)の解放は所期し得られることを理解せしめ(！)、以つて日本が、（卽ち我が帝國主義ブルジョアジーが）、××××に努力する方向を、帝國主義倒壞（卽ち先づ英米の帝國主義倒壞、進んで全世界の帝國主義倒壞）のために轉換（！）せしむることに主力を注がねばならない』。[1] 卽ち、手短かに言へば、我が無產階級は、現に支配者階級たるブルジョアジーを、かやうに自覺せしめ、理解せしめもつて、ブルジョアジーの帝國主義政策をば、彼等の滅亡を意味するところの、帝國主義倒壞の政策へと「方向轉換」せしめ得る（！）と、高橋氏は信ずる。果して然らば、此の甘まやかな空想のうちに、階級がその本質において把握された形跡を爪垢ほども認め得る者があらうか?! 吾々はたか〳〵、讀者諸君と共に、今や『コケおどし』の鎧に身を固めた高橋將軍を先頭とするブチ・ブルジョア群を前衛に、無產階級本隊これに續き、後衛としては帝國主義ブルジョアや文武の國家官僚がヨチヨチとついて行くところの、破天荒な世界解放十字軍の雄々しき

1) 太陽四月號 25頁。著書 78頁。社會科學四月號 144頁11行。著書、33頁。

隊伍を想ひ浮べて微苦笑するの機會を與へられるに過ぎない。

(3) 資本主義の自然消滅

ブルジョアジーの「方向轉換」に關する高橋氏の空想は、察するに、氏のいま一つの空想に基礎づけられてゐる。卽ち、我國資本主義の「行詰り」、「徐々ながらその崩壞への直面」——言ひ換ればその自動的崩壞、從つて生ずるブルジョアジー自滅、(『資本家的機能の喪失。總破產』)、從つてまた社會主義的秩序の自生的な成立、これである。言ふ迄もなくそれに、プチ・ブルジョア・イデオロギーの一典型であり、これに對しては、私は最近の二三の拙稿（中央公論七月號、社會科學八月號等）[1]において既に批判を加へておいた。尙ほ機會ある毎に加へるであらう。

また、氏の二つの空想は、恐らく、次ぎのやうに結びつけられてゐる。——日本のブルジョアジーが既に自然往生への途上にある以上、我が無產階級は、彼等との鬪爭などに骨折らずとも、餘生みぢかき彼等にはその運命を說き聞かせ、佛心を起さしめ、帝國主義的獨占、領土併合の慾念を斷たせることが出來る。そして無產階級は、世界解放戰の手始めとして英米佛と戰ふに當り、我が帝國主義ブルジョアジーにかく敎ふれば足る、——吾々はいま戰爭する、しかし君達はその機會に利潤をあげるのではない、我々の勝利を君達の資本の海外膨脹に利用するのではない、我々は我々の

1) 本書の第四論文。

解放の爲めに戰ふのだから、と。そこで發心したプルジョアジーや文武の國家官僚は、數珠つまぐつて法に歸依する――、嘘！　たゞ、此の昭和の聖代の清盛が掻き合す墨染の襟からは、コケおどしならぬ緋おどしの鎧がのぞかないといふのだ?!

(4)　高橋十字軍の陣容

が、それにしても、吾々は、高橋十字軍の机上戰術の一發展を見落すならば『公正を缺く』。それは國際戰線への發展である。「駁論の駁論」においても氏は、『或る一國の特殊事情を研究する第二の視點は、一國内における敵陣の形勢と味方の狀勢でとある。』といち早く主張し、『更に、インタナショナルの客觀的條件をも考慮に入れるべきや云ふ迄もない』と明記してゐる。（但したゞそれだけ）。前の論文においてはまた、『英米佛等の領土の「獨占」を解放せしむる「解放戰」に行く外に策はない。即ち、支那其他の被壓迫民族並びに勞農露國等と手をとつて、世界の帝國主義の倒壞運動を熾にし、全世界を人類のために解放せしむる方向に行く外に策はないのだ』とある。では、此の「世界の帝國主義の倒壞運動を熾に」するに當り、當の英米佛に於ける被搾取階級とは手をとらないのか？　さあ……？　此の關聯において氏が如何に階級を把握してゐるかは、次ぎの言葉から察するより外はない。曰く、『現に、我が輸出の大宗たる生絲にしてからが、その輸出において、それの勞働者は外國に搾取されてこそゐるが、（云ふ心は、その勞働に値する人間なみの報酬を外國消費者は支拂つてゐない事實を指す）[1]』（猪俣曰ふ、括弧の中も高橋氏の言葉）。

玆に外國の消費者とは、勞働者大衆を含まねばならぬ。從つて米國其他の無産階級は、日本勞働者階級にとつての搾取者でなければならぬ。（何と憐むべき搾取者よ！）。何人にも增して實踐を重んぜられる我が高橋氏は、「眞理」（！）の敎へる所に從ひ、必ずや聲を大にして我が無産階級に說かれるに違ひない、――「彼等もまた君達を搾取してゐるのだ！」。またもちろん、その意氣でなくてどうして英米佛と戰はしめることが出來やう。そして、それも決してむづかしいことではない。一の職業と他の職業の勞働者、一の産業部門と他の部門の勞働者、一國の勞働者と他國の勞働者とを、割りがいゝ、割がわるい、搾取してゐる、ゐないと說いて互に敵視せしむやうな指導者こそは、あらゆる支持をブルジョアジーに期待し得るのである。だが、かくして、「萬國の勞働者團結せよ」は、無雜作に屑籠へ投げ込まれた。

しかしまた、吾々は、高橋氏が『勞農露西亞とも手を握る』べく、それこそ『第三インタナショナルの大會』へのはる〴〵の旅にのぼられるであらうことを、忘れてはならない。そして、例へば輕輕なブハーリンなどが手をさし延べて言ふであらうことを、――ウエルカム！　同志タカハシ。我々ボルシエヴイキは、日本ブルジョアジー方向轉換の指導者としての君に全幅の信賴を置く。」

1)　太陽四月號、22頁。著書、73―4頁。尙ほ、氏は、明白に次のやうに言つてゐる――「帝國主義國の資本家のみならず、その勞働階級も、被帝國主義國を搾取する」と。（太陽四月號4頁。著書、42頁）。此の點に就ては後に詳述する。

さう單純に行かぬのは支那である。支那の解放運動は既にその發展の第一段階を終り、國內的階級對立はいよ〳〵尖鋭化し、民軍左翼に指導される支那大衆の闘爭力の前に自身の地位を脅かされて來た支那ブルジョアジー――蔣介石に代表される――は、支那軍閥との妥協を通じて帝國主義ブルジョアジーと握手した。從つて、今や、支那民族の打倒帝國主義の運動は、ひとり支那無產階級の力によつてのみ徹底的なものとなり得る。唯だ支那無產階級のみが、反帝國主義運動を徹底せしめ得る。ひろく解放運動の見地からしては、支那はもはや單なる支那であり得ない。わが高橋氏が手をとるのは、支那のブルジョアジーか、プロレタリアートか？　プロレタリアートではあり得ない。何故なら、氏は、人口問題を『解決するために、資本主義の基礎においては、戰爭以外にいかなる方法があるであらうか』[2]といふ意氣組で、英米佛を向ふに廻すのである。資本主義の基礎において「日本」が戰つて勝つ爲めには、その資本主義を强めるより外に道はない。如何にして强めねばならぬか？　日本の資本主義がとり得る唯一の方法は、支那における特殊利權等々の維持であり、擴大である。戰爭には鐵が要る、石炭が要る、綿が要る。英米と戰ふ時、それを支那以外の何處から取つて來れるか。しかるに――プチにせよ何にせよ――帝國主義日本のそうした特權に對してこそ、支那プロレタリアは闘ふのだ。能く英米と戰ひ得べく、我が資本主義を支那へ喰ひ込まさうとすれば、高橋氏の手は自づから支那ブルジョアの手を握らねばならぬ。そして手をとつて支那

2) 社會科學 142頁。

プロレタリアを抑へねばならぬ。――で、いつたい、誰れが、何を、解放するのであるか?!（現下の支那における階級對立と帝國主義的對立との交錯を究明した小稿を、私は、九月號太陽に寄せて置いた。併せ讀まるれば仕合せ。）

(5)　プチ・帝國主義者

高橋氏が日本プロレタリアートに强ひんとする「解放戰爭」の觀念は、日本と全く正反對の立場にある支那の解放運動の類推から生れ、しかも極めてルーズな類推から生れたものである。だから、今まで見た如く、少しでも具體的な分析にかけて見よ、ひとたまりもなく崩壞する。支那では、資本主義がまだ幼弱で、從つてブルジョアジーも弱い。支那は如何なる點でも帝國主義國ではない。反對に、典型的な半植民地國であり、帝國主義諸國によつて、政治的經濟的に、直接に搾取されてゐる。だから、支那プロレタリアは、國際プロレタリアの支持の下に、自國內で、プロレタリア的方法により、資本主義の沒落期の特殊の帝國主義的對立を利用しつゝ、成功的にそれと闘ふことが出來、從つてその闘ひによつて自己を强め、直ちにそれを自國のブルジョアジーに對する闘ひに結びつけることが出來、またブルジョアジーの支配の確立に先立つてプロレタリア支那をも實現し得るのである。しかるに、日本は、發達した資本主義國として、押しも押されぬせぬ帝國主義國とし

て、ブルジョアジーの支配下にあり、人口數千萬に上る植民地を有し、半植民地國にしぶとく喰ひ込んでゐる。「日本は搾取されてゐる」といふ高橋氏の主張が假りに正しいとしても、その搾取は氏自身の言ふ通り間接的な何物かに過ぎない。此の日本が英米佛と戰ふことが無產階級の解放戰であるなどゝは、「資本主義を資本主義として、階級を階級として把握してゐる者」の口から聞ける言葉かどうか。明確に掴んだ理論を、具體的な分析に適用し、正しく特殊を捉へてもつて行動への案內たらしめ得る者の口から聞ける言葉かどうか。氏の思考方法が如何に觀念的であり、公式的、機械的であるかは、此の粗大な類推、「解放戰爭」の白晝夢のみでもが證して餘りあるではないか。

「解放」の美名を刻めるメタルは、高橋十字軍の將卒の胸から剝ぎ取られねばならぬ。彼等の戰ひは、英米佛のプロレタリアートを敵とし、支那プロレタリアートを敵とし、從つて勞農ロシアを敵とし、×××××××してのみ行はれ、しかも我がプロレタリアートを帝國主義ブルジョアジーの祭壇に捧げるものである。それが帝國主義戰爭でなくて何であらう。そして、プチ・ブルジョア的夢幻に躍動して帝國主義の泥濘に飛び込んだ我が高橋龜吉氏、——彼こそは、プチ帝國主義者でなくて何であらう。

明記して置くが、吾々が高橋氏のプチ帝國主義者的主戰論を批判し粉碎せねばならぬと感ずるのは、決して理論的遊戲の好題目としてではない。また、戰爭それ自體がいけないといふ「平和論」の立場からではない。また單に、帝國主義戰爭は有らゆる犧牲を勞働大衆に强ひるからといふ一般的理由のみからでもない。理由は、遙かに特殊具體的な、しかも當面の事柄に存する。(一)『わが無產階級がまず〳〵明確なる意識の下に政治鬪爭の段階に進出せんとしてゐる時、恰もその、更に格段なる意識化を强要するものゝ如く、我國の帝國主義は今や、わが無產階級に、果敢なる「對支非干涉運動」を遂行すべき任務を、現實に課した』[1]からであり、(二)謂ふ所の政治鬪爭が今や、政治的自由の獲得に向けられねばならぬ時、高橋氏の說く如き主戰論こそは、必然的に、政治的自由の放棄を强要して止まないからである。

四、人口問題の陷穽

(1) レーニンの浸書化

泥沼にはまり込んだ高橋氏が、批判者の批判に答へ得ぬ悔やしまぎれに、批判者の言葉を、彼れの論旨と無關係なものに歪變して引用し、手當り次第に泥を投げて凱歌をあげる狂態は、行人をさへそゞろ惻隱の情を起さしむるものがある。

高橋氏が熱愛する日本帝國の、ブルジョア政治家、學者等によつて近來さも新しげに擔ぎ廻され

1) 改造六月號、60頁。本書の第三論文、115頁。

てゐるところの新しくもない「人口問題」こそは、氏の胸に殉教者の血を燃え立たせ、氏を驅つて帝國主義十字軍の先頭に立たしめたものである。私の批判は、當然に、此の「解放」戰爭論の一根據としての、氏の「人口問題」の把握に向けられた。私が批判の一點としたのは、氏が、人口問題なるものと、プロレタリア解放との間の或る必然的な關係についての創見を誇負し、プロレタリア解放の指導者、「帝國主義」の理論家たるマルキスト・レーニンも遂にそれに想到し得なかつたと述べてゐる所の、次の名文句にかゝはつてゐた。

『レーニンは、彼れが白人種なりしによるか、兎に角彼れは、人口問題を日本人の如く痛切に感じてゐなかつたと見えて、帝國主義的領土の獨占が人口問題を驅りて戰爭に導くべしとの可能性につき、全く論及してゐないやうだ。我國の直譯的左翼は、日本の（人口戰爭的）立場を全然理解し得ずして、之を非科學的にも漫然と、「帝國主義戰爭」と混同してゐる。從つて彼等の之れに對するに策戰は少なからず混線して却つて、レーニンの精神を失ふものが少くない。』[1]（見よ、故でも高橋氏はレーニンを眼下に見下しつゝ、しかもレーニン權威において語つてゐる！）

これに對して私は言つた、『此の、皮膚の檢討に始まつて精神の昂揚に終る一文における、氏によつてのレーニンの漫畫化は、蓋し篇中の白眉であらう。氏は、レーニンに、マルサス（嗚呼、たつた一字の違ひではある）のガウンを着せてゐるではないか』と。そして行を改めて、

1) 社會科學四月號、43頁。著書、32頁。

『氏において全く缺けてゐるところの、「人口問題」のマルキスト的把握の爲めには、私は幸にも河上博士の近著『人口問題批判』……を推薦するの便宜をもつ』と述べ、

此の一句に始まる十數行の一パラグラフを終つて更に行を改め、

『で、誰れが今ま『非科學的にも人口問題のワナにかゝりつゝあるのか！』

と言つた。何故言つたか。私はその十數行において、資本主義社會における「人口問題」は今に始まつたことでなく、「人口問題」と「解放戰爭」と「帝國主義戰爭」との關係の問題も、マルキストにとつては新しいどころではない、しかもマルサシアンでなくマルキストたる當のレーニンは、高橋氏とは全く正反對の見解に立つこと本稿の前段に述べたるが如くなることを示したからである。此の批判に答へ得ざる高橋氏は、答へる代りに何をしたか？　前掲の、『氏において全く缺けてゐるところの……』といふ私の一句と、『で、誰れが今……』といふ私の一句とを、恰も、後者が直ちに前者をうけてゐるかの如く一文に組合せ、『氏（猪俣）は傲然と云ふ』といふ前置きでそれを引用し、次のやうな惡態をつく。

『斯くの如き素朴な書生論を氏が臆面もなく、堂々と發表せられるところを見ると、氏のナイーヴの頭には、抽象され、單純化されて出來上つた「資本主義論」や「帝國主義論」や「階級鬪爭論」が、直ちにそのまゝ、實在の社會と見えるものらしい』と。

見よ、氏が斯う言つて大きくそり反つたさまを！

(2) 高橋君の匕首

氏の「人口問題」の把握に對する私の批判の他の一點は、資本主義社會、資本主義國の人口問題が、氏にあつては資本主義的現象として把握されてゐないことであつた。私が問題にした氏の二論文において、氏が「人口戰爭論」の根據としてゐた日本の「人口問題」なるものゝ內容は、日本は人口の密度が高いといふことに過ぎなかつた。[1] 此の資本主義社會において、人口の密度の高い事が「人口問題」になる、といつたナイーヴな——(失禮)——見解は、河上氏の『人口問題批判』において既に徹底的に批判されてゐた。その後、高橋氏も讀んだと見えて、氏の駁論(！)では、さすがに人口の密度は姿を消してゐる。その代り、氏は、敎へて貰つた河上氏にも泥をひつかけ、[2] 今度は、『資本主義枠外』の農村が耕地の狹少の故に人口過剩に陷り、最も「人口問題」に苦んでゐるとか、『資本主義枠內』では『資源の衰弱乃至減滅の故に』人口過剩が起り、從つてマルクスの人口理論は『必ずしも正しくはない』とかいふ飛んでもないものを飛び出させ、そして私に向ひ、氏の著書「資本主義末期の研究」六八頁に氏が言つてゐることに對して何故『堂々と解答』しないのかと詰め寄つてゐる。[3] しかも其の六八頁には人口といふ文字もないのだ。讀者は何と思はれるか知らんが、『書生論』のみを口にする吾々如き『素朴』な者には、高橋君が何處に呑んでゐるか知れない匕首にまで氣を配るほどの修業は積んでゐないのである。

1) 太陽四月號 31頁—33頁。著書 85—92頁。社會科學 140—146頁。
2) 70頁下段。
3) 70頁—71頁。

(3) 僧正マルサスの使徒

だが、議論の進展は、低徊に勝る。わけても高橋氏の場合はさうである。何故といつて、進展し變轉すればするほど、如何に氏が資本主義を資本主義として把握してゐないかゞ明かになる。

氏は、飽くまでも僧正マルサスの使徒であらうとするのであらう、耕地の狹少だの資源の衰弱だのと、人口問題を自然に歸さうする。しかるにマルクスの人口理論の特質は、「人口問題」を社會に歸した所にある。吾々は、日本が資本主義國であるといふ。それは、一の國家權力を結び目とする日本といふ社會においては、資本主義が支配的な生產形態、生產關係となつてをり、それが社會の一切を本質的に規定してゐるといふ意味である。かゝる資本主義的關係は、日本の津々浦々に及び、朝鮮に及び、滿洲に及び、日本の政治、經濟、財政、軍事、敎育、宗敎、藝術に及んでゐる。高橋氏の欲すると否とに拘らず、此の資本主義日本における人口現象は、資本主義的現象である。その人口問題において農村だけが資本主義の枠外にあるといふ譯には參らぬ。

資本構成の高度化と共に資本家企業に生ずる所の過剩人口は、謂はゞ全過剩人口軍の「本隊」で

ある。だから、それを私は強調して置いた。氏は、農村に過剰人口があるといふ。では、何故それがこれ迄のやうに都會へ出て行けないのか？　都會の資本家企業それ自體が過剰人口を生み出し、新しい勞働力を吸收する能力を減じたからではないか。ではまた、何故生活に困る者が多く農村に生ずるのか？　それは、農家特に小作人層が、取引において、金融において、賃勞働において、資本主義的に搾取され、また資本主義的に利廻計算をする地主に高い小作料を拂ひ、更に資本主義的に割當てられた「公課」等々の負擔に堪へないからではないか。それほど困つても尙ほ農村に止まることを餘儀なくされるからこそ、一人當りの耕地、大きくならないのではないか。なぜ農業の生産力の發展が遲いのか？　それは、資本主義社會では農業が「不利」で、資本が農業へ流れ込まないからではないか。

高橋氏がマルクスの修正をでも要求しさうな氣勢を示してゐるところの「資源の衰弱」、例へば炭坑が廢棄される場合でも同じことである。坑夫が失業する、それだけで「過剰人口」は生じない。失業した勞働者を、自余の資本家企業が雇傭し得ない程に、「過剰人口の本隊」が增大してゐる時にのみ、彼等は過剰人口として追加される。

(4) 天下の愚論

要するに、工場關係にせよ、鑛山關係にせよ、また農村關係にせよ、過剰人口の增大は、資本主義生産關係が社會の生産力の發展に對する桎梏となつたことの顯著な現れである。組織を變へて見よ、利潤の爲めの生産を社會の爲めの生産に改めて見よ、そして自由に生産力を發展させて見よ、現在の過剰人口は消えて無くなる。かゝる事情の下にあつて歷史的使命をになふ無産階級の任務は明かである。しかるに高橋氏は、『資本主義の基礎において』の人口問題の解決(！)を提唱し、戰爭を主張する。氏は、マルクスやレーニンの知らないことを發見したと思つて見たり、一の資本主義社會の人口問題を論ずるのに農業と資本家的産業とを資本主義の枠外と枠內とに峻別して人に喰つてかゝつたり、『現に農業に於ける資本の最要部は耕地である』[1]などゝ地主の算盤をはじいて三百萬戸の小作農家の存在を無視して見たりしてゐる暇に、もつと具體的に物を見、實踐的に考へて、人口問題の分析らしい分析を積極的に展開し、無産階級はもとより吾々書生共にもはつきりと敎へねばなるまい。人口問題こそは、氏の解放戰爭の根據ではないか。氏が此の問題の所在を明白にせぬ限り、氏が折角ブルジョアジーの爲めに動員せんとする十字軍の募集事務所は「門前雀羅を張り」、將軍の椅子は遠からず、もつと老巧な何者かに取つて代はられるであらう。

本來、人口問題の爲めに戰爭のラッパなど吹き立てることは、それに對する反對者に左翼も右翼も書生も學者も糞もなからう程の、けつたいな間違ひである。『時論としての人口問題』（中央公論

1) 改造八月號、70頁。

七月號)においても、矢內原教授は高橋氏を批評し、『……現代に於て帝國主義戰爭を否認しながら、人口問題に基因する戰爭をば國民戰爭として是認せんとするは全く意味をなさない』と言ひ、『支那動亂に際して我國出兵の擧ある今日、人口問題が國民の名によりて利用せられざらん樣、吾人は特に注意を怠つてはならない』と結んでゐる。[2] 實際、高橋氏のは、——私も前の論文の冒頭で指摘して置いたやうに、「時節柄」でさへなかつたら、默殺してもよからうほどの愚論に過ぎない。

高橋氏の「人口問題」に對する私の批判の言葉の斷片を材料としてでつちあげた氏の「駁論」の部分には、「日本に於ける社會形態の複雜性を見逃せる書生論」といふ小みだしを氏は與へてゐる。溺るゝ者の摑んだ藁が、溺るゝ者には何と大したものに見えたことぞ。

——本稿は、これで終つてゐるのではない。が、かなりに長文である爲めに、後半はそれを、近刊の拙著「帝國主義」に收錄することにした。尙ほ、高橋氏が、「駁論」において大袈裟に論じ立てゐる所の、(一)「帝國主義世界範疇のコヶ嚇し」、(二)「全體と部分との關係」、(三)「日本の帝國主義的地位の檢討における(猪俣)氏等の根本誤謬」、(四)「プチ・帝國主義國理論における問題の所在」、等の部面に橫溢する氏の誤謬に至つては、すでに、氏の「駁論」と同時に出た八月號「社會科學」の拙稿の後半「日本帝　主義の新段階の問題」[3] において十分に指摘され、徹底的に批判されたかたちになつてゐる。——氏の駁論の先を越したやうで甚だ體を失した次第ではあるが——(一九二七・八・五)

2) 同誌、42—3頁。
3) 本書の第四論文。

泥沼に陷沒した「プチ・帝國主義」者（續稿）

「泥沼に陥沒したプチ・帝國主義者」の讀稿である此の一文は、本書に於て初めて發表するものである。これに展開されたる批判は、高橋龜吉氏の謂ゆる「プチ・帝國主義國論」を直接の對象としてはゐるが、私は此の批判をば、單に氏の誤謬と虛構との指摘に盡きる消極的なものに終らしめまいと欲し、帝國主義に關して、我國の研究の徒、實踐の士が、最も誤謬に陷り易き諸問題を、能ふ限り平易且つ具體的に解明しつくす機會に利用した。そして、沒落期帝國主義の現代における日和見主義、排外主義の執拗な傾向に對する「イデオロギーの鬪爭」に寄與する所あらうと努めた。それが、本稿をかなりの長篇たらしめた理由の一つである。他の理由は、批判の公正を期するために高橋氏の論文を出來るだけ詳しく引用したからである。本稿を此の論文集に收めるに就ては、氏の「駁論」の全文をも併せ收めて對照に便し度いと考へ、その許諾を氏に乞ふたが遂に許されなかつた。

一、序　說

(1)　日和見主義者の典型としてのプチ・帝國主義者

讀者諸君は、吾々が前稿において論じた所によつて早くも、わが高橋龜吉氏の「駁論」の正體を見究められたであらう。それは、氏がとうてい我々の批判を論駁し得ざる事を覆はんが爲め、空ラ威張り、負け惜しみ、饒舌、駄辯、歪曲、漫罵、まぜかへし、揚げ足取りの有らん限りをつくしたものに過ぎない。同じことを更に明瞭ならしめるであらう所の、以下の吾々の批判は、同時にまた、プチ・帝國主義者なる面妖な存在を白光の下に曝らし、如何なる變裝をもつてするも再び無產階級の前に現はれ得ざるに至らしむるであらう。

プチ・帝國主義者は、帝國主義日本の勞働者運動の現段階に應當して發生したところの、日和見主義者の典型である。吾々は本論の上篇を結ぶに當り、『人口問題の爲めに戰爭のラッパなど吹き立てることは、それに對する反對者に左翼も右翼……もなからうほどの、けつたいな間違ひである』と言つた。だが、それほどの間違ひに充ちた愚論でさへが、現在の發展段階における我國勞働運動の日和見主義的右翼指導者等の「理論的」(!)要求を充たし得るのである。何故なら、現段階

における日和見主義的右翼指導者等は、戰爭を準備しつゝある我が帝國主義ブルジョアジーに奉仕することなくしては最早や存在し得ないからである。また吾々は既に、我が高橋龜吉氏の「解放戰爭」の理論が、如何に荒唐な幻想に基づいてゐるかを指摘し批判した。だが、かゝる幻想を幻想と感ぜざること、乃至は幻想と知りつゝも故意にそれを科學的に紛飾してもつて勞働者大衆を欺瞞せんと努むること、――そこにこそ日和見主義の論理的特質はある。して見れば、吾々は單に、「解放戰爭へ」の主張それ自體の迷妄を摘發するのみでは足らない。かゝる主張を「理論づけ」て科學的紛飾を施す手續きにおける一切の虛妄をも暴露しつくすことが本論の任務でなければならぬ。かくしてのみ、現在日本における一社會現象としての此の日和見主義の典型を、理論的に完全に克服し得るからである。

高橋氏の「解放戰爭」の主張の根據は、氏の謂はゆる「プチ・帝國主義國論」である、即ち、日本は「プチ・帝國主義國」であるから、といふのだ。それに對して吾々は、本論の上篇において、假りに日本が、氏の言ふ如き伊太利級の「プチ・帝國主義」であるとしても、それを理由として我が無產階級に英米佛と戰爭せよと說くが如きは、誤謬中の誤謬であることを明かにした。

しかるに、日本は言ふ迄もなく「プチ・帝國主義」ではない。否な、「プチ・帝國主義國」なる概念そのものからが無意味である。即ち、高橋氏の「プチ・帝國主義國」論それ自體がまた誤謬の集積である。そのことは、早くも、私の前稿「資本主義日本の帝國主義」[1]において既に明白にされてある。が、私は更に、「社會科學」八月號の拙稿の後半「日本帝國主義の新段階の問題」[2]において、特に高橋氏の「プチ・帝國主義國」論を詳細に批判した。此の批判は、高橋氏が私の前稿「資本主義日本の帝國主義」に對して書いた「駁論」――改造八月號所載――と同時に現はれたものだが、それは既に、氏の「駁論」そのものに對する批判にさへ該當する內容を有つてゐた。即ち、氏の「駁論」の誤謬は、早くもその出現と同時に明白となつてゐるのである。だが、「駁論」における高橋氏の虛勢と虛構、欺瞞と虛僞は、日和見主義者の言說の模型として、それ自身徹底的に批判さるべきものである。私は、面倒ながら、改めて氏の「駁論」の各節を追つて批判を進め、「プチ・帝國主義國」論の潰滅を最終決定的たらしめるであらう。

我が日本の現在にあつては、帝國主義の理解における僅ばかりの不徹底でもが、無產階級運動を救ひ難き邪路に導く危險は實に絕大である。

(2) 「方法」の問題

プチ・帝國主義者高橋氏の「プチ・帝國主義國」論は、プチ・帝國主義國なる概念そのものゝノンセンスと、我が日本を「プチ・帝國主義國」に仕立て上げんとする氏の方法のノンセンスとの結合

1) 本書の第三論文。
2) 本書の第四論文。

から生れたノンセンスである。

その方法は、なぜノンセンスであるか？

氏は、我が日本の資本主義は、「資本主義最後の段階としての帝國主義」の段階にあるか？ 我が日本は、「資本主義最後の段階としての帝國主義」に該當する「帝國主義」の國であるか？ と斯やうに問題を提起した。その問題提起そのものが、頭から間違つてゐる。何故なら、「資本主義最後の段階としての帝國主義」とは、資本主義全般、即ち世界的體系としての資本主義についてのみ言ひ得ることで、その一構成部分としての一國の資本主義——例へば日本の資本主義——については殆ど意味をなさない言葉だからである。しかるに右の如く問題を提起した高橋氏は、レーニンが此の世界資本主義の一定段階としての「帝國主義」の特徴としてあげた五つの特徴が、日本といふ一國の資本主義にあるかないかを調べ、その狀態の如何によつて日本が帝國主義國か否かを決定しようとし、或は日本は帝國主義國でないと言ひ、或は、漸く「プチ・帝國主義國」に過ぎないと言つてゐる。それは途方もない間違ひである。それは、高橋氏が、故意であれ過失であれ、レーニンのあげた帝國主義の諸特徴の意義をさへ理解しないことを暴露する。讀者諸君は、試みに、その五特徴を取入れたレーニンの定義——「資本主義最後の段階としての帝國主義」の定義——を一讀あれ。

『帝國主義は、(一) 獨占と、(二) 金融資本との支配が確立され、(三) 資本輸出が優れた重要性を得、(四) 國際的トラストによる世界の分配が始まつてをり、(五) 最大の資本主義諸國の間に地球の全地域の分割が結了されてゐるところの、そうした發展段階における資本主義である。』

かゝる發展を遂げ、かゝる發展段階にある「資本主義」とは、世界體系としての資本主義のことであつて、その構成部分をなすところの日本とか獨逸とかいふ一國の資本主義でないことは、疑ふ餘地がないではないか。然るに高橋氏は、盲滅法にも、此の定義を「日本の資本主義に當嵌め」ようとした。だから、私は、前稿において言つた——

『氏の方法上の誤謬は、まことに致命的』であり、『かゝる誤謬に出發する議論から引出される如何なる議論でもが皆な誤謬であると結論することはたやすい。[1]』

(3) 高橋氏の「力瘤」

吾々は轉じて、此問題が、高橋氏の「駁論」において如何に扱はれたかを見やう。

高橋氏は、「駁論」において、右の私の言葉を一度ならず二度までも引用し、[1] 猪俣氏等は『就中この點に對し多大の力を用ひられ、この一點のみで(！)勝負を決せんとするの概を示されてゐる』と言ひ、[2] 更に次の如く言ふ——

1) 改造六月號 65頁。本書 126頁。
1) 改造八月號 50頁 53頁 56頁。
2) 同上 50頁。

『私を以つて見るに、猪俣氏が私の論文を反駁するに、先づ斯様なスキダラケの構へ――（方法上の誤謬の指摘）――に全力（！）を入れて來られたことが不思議千萬である。最初は、氏等の力瘤の入れ方が餘りに大きいので、マサカこんなクダラないものに(！)、さう迄力瘤を入れる筈がないと再三讀み返して見たが、矢張りクダラない駁論の起し方であることに見違ひはない。しかし、我が猪俣氏其他が、それ程までに顏を赤くして力瘤を入れてゐられることであるから、以下少し（！）この點につき檢討して見るであらう』。[3]――（讀者よ、此の種の駄辯は、高橋氏の「駁論」の全生命である。だが、讀者は此の際は特に上の一くさりを御記憶あれ！）

此の問題に對し、私が果して『それ程までに顏を赤くして力瘤を入れて』ゐたかどうかは、私の論文を一瞥すれば明瞭する。即ち私は　拙稿二十三頁餘のうち僅か二頁餘をそれに費して滿足していた。[4] なぜであつたか？　（一）私は、あの論文において、單に高橋氏の誤謬を指摘するだけに止らず、我國帝國主義の新段階の特質に關する正しき見解を具體的に展開して無產階級の戰略及び戰術の一基準を供せんと欲し、その目的の爲めに頁の大部分を捧げた。（二）また、高橋氏の方法の誤謬そのものが、多言を費すには餘りにも明白、餘りにも初等的であつた。（三）加ふるにまた後段に述べるであらうやうに、氏の誤謬は、私が極めて單純なる一事實を指摘したことによつてもはや議論の餘地なきものとなつてゐたからである。

3）同上 53—54頁
4）即ち 63—65頁

だがしかし、駁論の爲めの駁論を書くべく餘儀なくされた氏としては、吾々が『スキだらけの構へに全力を入れて』ゐたかの如き印象を讀者に與へる爲めに『全力を入れる』必要はあつたでもあらう。自己の文章に駁論の體を裝はしめんと血眼になつたプチ・帝國主義者が、此處ぞ擊ち込み所と感じた『スキ』を、吾々のその『構へ』とやらに見出したことは疑ひない。そこで、此の『構へ』にこそ批判者の力點があると極力誇張しなければならぬ。かくて氏は、『此の一點のみで勝負を決せんとするの概を示す』ことにより、眞の爭點は首尾よくまやかしてしまふせたつもりである!!　――見よ、『以下少しこの點につき檢討するであらう』筈のその『少し』が、氏の改造の論文二十三頁の過半にわたる十四五頁ほどに膨脹し、「駁論」の爲めに拾ひあげた六つの論點のうち三つまでを占めてゐる。曰く、『所謂帝國主義「世界範疇論」のコケ嚇し、』曰く『全體と部分との關係』、曰く『日本の帝國主義的地位檢討に於ける氏等の根本的誤謬』。

で、高橋氏が、『それ程までに顏を赤くして力瘤を入れてゐる』ことは、『再三讀み返へす』迄もなく明かである。氏が折角の『構へ』ではあり、必死の逆襲ではある。せめては「プチ・帝國主義國」の詭辯學派の後學の爲めにも、吾々はその逐一を見取り置かねばなるまい。

(4)　高橋氏の「駁論」の要點

高橋氏は曰ふ、私は日本が帝國主義國なりや否やを決定するに當り、帝國主義の五特徴としてレーニンがあげてゐる所のものが果して我が日本の資本主義に見出さるゝや否やを檢討した。卽ち、彼れの定義を「尺度」として日本をはかつた。しかるに猪俣は曰ふ、その方法が頭から間違つてゐる、レーニンの定義は、世界體系としての資本主義に與へられた定義であつて、それに對してのみ妥當であり、日本といふが如き一國の資本主義には適用すべからざるものだから、と。かくて猪俣は『鬼の首でも取つた如く喜び勇んで高橋征伐の凱歌をあげ得た』[1]とする。だが、しかし、それは『御氣の毒ながら』『糠喜び』[2]に過ぎない。——何故か？

(1) 私(高橋氏)がレーニンの「尺度」を用ひて決定せんと欲するのは、日本が『世俗』的な意味における帝國主義國卽ち單に領土の××をなした國、單に植民地を有する國か否かの點ではなく、レーニンの謂はゆる「資本主義最後の段階としての帝國主義」といふ意味での帝國主義國か否かである、それを決定する爲めには、飽くまでも、かゝる帝國主義を特性づけた所の、レーニンの定義を用ひねばならぬ。また用ひることが出來る。

(2) 猪俣は、適用不可能なりといふ理由として、(一)定義に含まれる特徴の第四と第五とは之れを一國の資本主義（例へば日本の）に當てはめるならば、『日本の資本主義において世界の領土的分割が終結したりするやうな』荒唐無稽なことになるではないかと、『鼻高々と勇敢にも（但し盲

1) 改造八月號 52頁。
2) 同上 58頁 59頁 等、等。

蛇に恐ぢざる如く）嘲笑する。』[3] また、(二)レーニン自身も定義を下すに當つて特に「一切の定義は總じてただ限られた相對的な意義しかないといふことを忘れずに」と附言して定義の適用を限定してゐるではないかといふ、——『私(高橋氏)が恰もそれを無視してゐるかの如き口吻を以つて。』[4]

だが、猪俣よ、(一) 君がその『輕卒にも討取つたと糠喜びされた鬼の首、卽ち……第四、第五の國際的特徴を、(君が)口先きでのみしきりに主張するやうに、之を「相對的」な意味に（とりさへすれば）容易に之れを或る一國に當嵌め得るではないか。』[5] また私は、レーニンの注意に從ひ、彼れの定義を 相對的意義に解すればこそ』[6]、その第四、第五の特徴に或る「相對的」意味を與へ、日本といふ一國にそれらを見出さうとしてゐるのだ。(二)更にまた、君がもし、彼れの定義が、世界體系としての資本主義にのみに當嵌まると主張して止まないなら、では、『レーニンのあげた (一)(二)及 (三) の特徴（それは（君）が故意か過失か、奥深く隱匿せられてゐる！）も、世界規模にのみ當嵌め得るもので、一國に當嵌むべからざる尺度だと仰言るのですか?! と反問するだけで澤山だ。[7]』

(3) 猪俣よ、君自身が何をしてゐるかを見よ。君は、日本を帝國主義國であるとなし、それを『證明するのに、やれ、生産の集積がどうの、獨占がどうの、資本の輸出がどうの、金融資本がどうのと、レーニンの擧げた（それも別に述べるが如く錯覺してゐられるが）資本主義最後の段階と

3) 同上 59頁。
4) 同上 59頁。
5) 同上 59頁。
6) 同上 下段。
7) 同上 58—9頁

しての帝國主義の特徴を尺度として測つてゐるではないか。それ以外の尺度で測つたと、(「改造」の論文には示されてないが)仰言るならば、一つそれを示して戴きたい。[8]』

(4) 更にまた、猪俣よ、君が適用不可能を主張しつゝ、君自身が『如何に混亂に陷らざるを得なかつたか。[9]』君によると『帝國主義には世界的規模のもの、東洋規模のもの、一國規模のもの、と三つも基準があることになる。』これでは、君の『仰言る意味が瓢單鯰で捕捉出來ないわけである。』かくして、君は『勇敢にも、自ら、科學の埒外に御自身の理論を弊履の如く放り出[10]』すのだ。また君は、『「單一の資本主義國」が歴史的に存在してゐたかの如く認められてゐる。[11]』全く『五里霧中[12]』ではないか。

(5) だから君は、日露戰爭が帝國主義戰爭だなどゝ途方もないことをいひ、日露戰爭以來日本は帝國主義國だなどと云ふ。だが、單なる侵略の戰爭は帝國主義戰爭ではなく、單に植民地を獲たことによつて帝國主義國となるのではない。ホルトガルを見よ。君の立場からならば、臺灣を獲た日清戰爭をも何故帝國主義戰爭だと謂へないのか。君は、日清戰爭について語ることを恐れてゐる！私(高橋氏)は言つた、日清、日露の兩戰爭は、日本が『獨立國としての鞏固な「國家の統一」を期せんが爲めの努力であつた[13]』と。即ちあれは國民戰爭である。當時の經濟狀態を見よ。どこに金融資本があつたか。しかも君は常に『帝國主義は金融資本の政策である』と『御講義』をしてゐる

8) 同上 54頁。 9) 同上 54頁。 10) 55—6頁。
11) 56頁。 12) 56頁。 13) 62頁。

ではないか。君は自分の講義してゐる意味をも解せずに、『小僧が御經でも讀むやうに、機械の如く論文の再生産をやつて[14]』ゐるのか。

(6) 最後に、君は、『一國の帝國主義については……別箇の定義を要すべきことは餘りに明白である』と言ふ。『その定義を……何でも氏(猪俣)は、いま一生懸命に考へてゐられるか、乃至は已にチヤンと持つてゐられるらしい口吻だ[15]』

二、レーニンの定義と其の適用

(1) レーニンの定義をレーニンは如何に適用したか

私は曰ふ、誠に結構。——私は、高橋氏が斯くも旗皷堂々たる論陣を張りつゝ、如何に不氣味な變態性のはしやぎ方をしてゐられるかを、右において十分に描出し得なかつたことを遺憾とする。が、攻め太鼓の音の高さ、ときの聲の仰々しさは、しば〳〵敵の强さ、味方の弱さに比例する。氏の場合にはそれは、氏が吾々の批判の重點に答ふることを避けんが爲めの詭計であり、避け得ると感違ひした歡喜の表現であり、答へ得ざるを覆はんが爲めの虛勢である。で、右におけるいくつかの論點もまた、皆な、溺るゝ者の摑んだ藁でなければならない。

14) 64頁。
15) 55頁。

我が無產階級を帝國主義戰爭の渦中に投じて帝國主義ブルジョアジーの祭壇に捧げんと欲するプチ・帝國主義者高橋氏は、

『世界全體としての無產階級運動の一環としての日本を研究の對象』[1]とする時、その國の『特殊事情の位地を、全體との關連において、如何に測定するかといふに、その尺度は、謂ふ所の「資本主義最後の段階としての帝國主義」に含意する特徵に之を求める外はないのである』[2]

といふ人聞きのいゝことを言ひ、また、

『いま、私が、日本は果して帝國主義國（資本主義最後の段階といふ言葉によつて特性づけられた所の）（！）であるか否かといふ問題を提出して、（猪俣曰ふ、さういふ馬鹿な問題を提出して！）、その如何をレーニンの與へた「資本主義最後の段階としての帝國主義」の特徵に求めたことは、少しも「當て嵌め得べからざる尺度を當嵌めた」のではない。』[3]

と頑張つてゐる。

では、高橋氏に問はう。その「當嵌め」が馬鹿げた間違ひであるといふことが、私の示した諸理由でまだ解らぬと白ばくれるのなら、當のレーニンは一體どうしてゐたか？ 常に、『世界全體としての無產階級運動の一環としての』日本や伊太利を『研究の對象』としてゐたレーニンは、日本や伊太利が帝國主義國か否かを決するに、彼れの一定義——世界的體系としての帝國主義の一定義に

1) 改造八月號 57頁。
2) 同上。
3) 同上 54頁。

含まれる特徵の有無によつて決定したか？ ——氏よ、彼れは、そんな阿呆な眞似はしなかつたのである。

外のことゝは違ふ。問題は、レーニンの一定義を如何に解釋し適用するかである。高橋氏の「當嵌め」るが如く「當嵌め」てよいか否かを最もよく知つてゐるのは レーニン自らではないか。高橋氏の方法によれば、氏の明言する如く、現在の日本でさへ、「被帝國主義國の仲間」なる「プチ・帝國主義國」であり、世界大戰前の日本は斷じて帝國主義國でないことになる。然るにレーニンは、日露戰爭以來の日本を帝國主義國であるとなし、世界大戰前の日本を帝國主義强國であるとなし、更に日本のみならず伊太利までも帝國主義國となしてゐた。これこそは、今ま問題になつてゐる定義を下したレーニン自身は決して高橋氏の「方法」によらなかつたことを示すものでなくて何んであらう。從つてそれは、高橋氏の「當嵌め」法の出馬羅目を、決定的に證據立てる。

威勢のいゝプチ 帝國主義者は、それとも、レーニンが間違つてゐるといふのか？

それならばなぜ「駁論」においてレーニンの誤謬をハツキリと指摘しないのであるか。レーニンが日本を如何に見てゐたかに關しては、私は特に「レーニンと日本帝國」なる小みだしまで附けた一節を設け、讀み違ひ度くも讀み違ひられぬ明瞭さをもつて示して置いた。[4] さきに私が、『極めて單純なる一事實を指摘したことによつて高橋氏の誤謬はもはや議論の餘地なきものとなつてゐた』

4) 改造六月號、76—7頁。本書、147—149頁。

と言つたのは即ちそれである。

吾々が高橋氏の「方法」の間違ひを指摘したのに對し、氏は何と空うそぶいてゐたかを讀者諸君は記憶されるであらう、曰く、――『まさかこんなクダラないものに、さう迄力瘤を入れる筈がないと再三讀み返して見たが、矢張りクダラない駁論の起し方であることに見違ひはない、』と。何といふ鼻息きの荒らさだ。では問はう、氏が『再三讀み返して見た』際に、右の「レーニンと日本帝國」といふ一節だけは、再三讀み落したとでも言ふのか？　それならば、氏が如何に不氣味な變態性のはしやぎ方をしたからとて不思議はない。――批判に答へ得ずして「駁論」を書きなぐる圖太さは、日和見主義者の心事をさらけ出して遺憾ないではないか。

言ふ迄もなく、レーニンは、世界大戰前の日本が金融資本主義國ではなく、その對外的搾取さへもが未だ典型的な金融資本搾取でなかつたことを熟知してゐた。さればこそ彼れは自らその事實を指摘し、當時の帝國主義日本の金融資本の獨占は何によつて置代へられ又は補充されてゐたかをさへ示してゐるのである。世界的體系としての資本主義は、その全體にわたり、獨占と金融資本の支配の確立、資本輸出の優越、國際的トラストによる世界の分配、强國間の領土的分割の結了、等の特徴が見られる時にのみ、帝國主義の段階にあると言はれる。だが、かゝる世界的體系の構成部分たる個々の資本主義國は、それ自身それらの特徴を備へると否とに拘らず、帝國主義國であり得る。

體系の構成部分が、體系全體の諸特徴を備へ得るかの如く考へることからしてが背理ではないか。

私が、前稿「資本主義日本の帝國主義」において批判の對象とした高橋氏の論文「日本資本主義の帝國主義的地位」は、氏の謂はゆる「左翼戰術」の批判を目的としたもので、次の言葉で始まつてゐた――

『若しも被帝國主義國と帝國主義國との間に無產階級運動の色彩に差がありとするならば、日本の無產階級運動は帝國主義國としての立場に於て進むべきか、將又、被帝國主義國としての立場に於て進むべきか、尠くとも寧ろ被帝國主義國と利害を一にするブチ・帝國主義國として進むべきか』[5]

氏は、獨自の「檢討」によつて、日本が「ブチ・帝國主義國」なることを發見した。そこで、氏は日本無產階級は自身の「解放」の爲めに英米佛と戰爭せよと絶叫し、氏が大嫌ひの「左翼戰術」には誤謬の烙印をベタ〳〵と捺し、『レーニンの精神を失ふものが少くない』と見えを切つた　だが、今頃になつて此の日和見主義者にかつがれた憐むべきレーニンは、十年も昔に、帝國主義强國の烙印を日本に捺してゐたのである。ブチ・帝國主義者よ、今度は「駁論の駁論のそのまた駁論」を工面して、もう一度『レーニンの精神』を論じてはどうか？

5) 太陽四月號 3頁。著書、40頁。

(2) 定義の相對的意義と「相對的意味」

第二點に移らう。

レーニンの定義の中にあげられた五つの特徴が、資本主義世界體系のそれであることは、就中、その第四、第五の特徴を見れば一ト目で知れる。國際トラストによる世界の分配や、强國間の世界分割の結了は、『單一の資本主義國の特徴としては、言葉としても始めから意味をなさない。』 强いてそれらを一國の資本主義に「當欲め」ようとすれば、例へば『日本の資本主義において世界の領土的分割が終結』したりするやうなことになる。——かやうに私は前稿で論じて置いた。更にまた、レーニンは、問題の定義を下すに當り、特に、定義は相對的意義しかないことの注意書きを添えてゐたから、私はそれに傍點を施して讀者諸君及び高橋氏の注意を喚起して置いた。

我が高橋龜吉氏が、たま〳〵此の傍點のあるに乘じて、圖々しくもそれを逆用し、空ラ威張りの抗辯の一節をうま〳〵と書き上げたつもりでゐながら、實は動きのとれぬ泥濘に飛込んでゐる醜態は、日和見主義的惡ジャーナリズムの見本として、誠に珍中の珍なるものである。曰く、——（次の引用文中、括孤の中の言葉も高橋氏のもの）

『猪俣氏は、レーニンが右の五特徴を擧げた場合に、「……一切の定義は總じてたゞ限られた相對的な意義しかないといふことを忘れずに……」（傍點猪俣氏）と云つたことを强調して私に教へられてゐる（私がそれを恰も無視してゐるかの如き口吻を以て）。猪俣氏等の帝國主義世界範疇論の陷つた謬根は、レーニンの右の定義に對する注意を、實は、氏等自身、口で云ひながら實際には全然之を應用するの能力がなかつたことにある。』

『例へばいま、氏（猪俣）等が、私への駁論に於て、輕卒にも討ち取つたと糠喜びされ鬼の首、即ちレーニンの擧げた第四、第五の國際的特徴は、氏等（猪俣等）が口先でのみしきりに主張するやうに、之を「相對的」な意味（!!）にとり、次に示す如く解釋すれば（！）、容易に之を或る一國に當欲め得るではないか。而して、定義の相對性（？？）を强調せられる氏等に於ては、之に對し何等の御異議はない筈である（!!「定義の相對性」の僞造と押賣り）。

第四、「資本家の國際的團結が生れ世界を分割せること」（定義の言葉）、

この相對的意味、『その國（例へば日本）の資本家が國際的團結をなして世界を分割してゐるか否か、その程度如何。……

第五、「資本主義强國間の世界の領土的分割が終結したと見得ること。」（定義の言葉）、

この相對的意味、『資本主義强國間の世界の領土的分割が終結したと云ふことに對し、その國（例へば日本）は如何なる位地を占めてゐるか。即ち、その國は他國の領土を如何に分割

してゐるか否か。……』

此の老獪なジャーナリストのいみじきトリックを、一讀直ちに看破し得る者は、讀者諸君の中にも少ないかも知れぬ。

だが、レーニンが問題の定義を下すに當つて書き添えてゐる注意書きの全文はかうである。

『――どんな定義でも發展の過程にある諸現象のあらゆる關聯を包括し得るものでは決してないから一切の定義は總じてたゞ限られた相對的な意義しかないといふことを忘れずに――』

此の「限られた相對的な意義」を、我がジアーナリストは何とスリ換へたか？『相對的な意味』と！　そして『何等御異存はない筈である』と來た。だが、玆に、「限られた相對的な意義」といふ時の「意義」は、斷じて「言葉の意味」の「意味」ではない。玆での「意義」は、獨逸本には Bedeutung、英本には Value とあるものゝ譯語であつて、「重要」、「價値」、「役立ち」、「用」、をあらはしてゐる。定義は「たゞ限られた相對的な意義しかない」ことを忘れるなといふレーニンの趣旨の一つは、定義は「萬能膏」でないから――我が高橋氏のやうに――何にでもベタ〳〵貼りつけたり、「當欲め」たりしてはいけない、といふのだ。讀者諸君がもし高橋氏のジャーナリズムの發展に興味を有たれるならば、試みに氏に問はれるもよからう、『一切の定義は總じてたゞ限られた相對的な「意味」しかない』とは、いつたい何のことか、と。

1）改造八月號 59頁。

（前に引用した高橋氏の一節を精讀あれ。氏は、論歩を進めるにつれ、「相對的な意義」を「相對的意味」にすり換へるべく、「たゞ……しかない」といふ前後の言葉から巧みに切り離して行く。）

定義の重要、價値、役立ち、用は、絶對的、普遍的でなく、相對的、限定的であり、一定の條件の下においてのみ發揮され得る。一口に「帝國主義」とはいつても、それには雜多の相面があり、諸多の關聯があり、しかもその絶えざる發展と共にその關聯及び相面もまた不斷に變化する。發生し、成熟し、消滅する。帝國主義に關する一の定義は、その一面一相を、特定の關聯に即し、その特定の發展段階において特性づけ得るに過ぎない。だから、「帝國主義の定義」は、それが特性づけんとする相面の異るに從ひ、また如何なる關聯において特性づけるかにより、いち〳〵異らねばならぬ。されば私は言つて置いた――

『レーニンは、高橋氏によつて利用された帝國主義の一定義――五つの特徴を含む――を述べた直ぐその後で、「もし、帝國主義に關して、單にその基底的な、純經濟的な諸概念――それらにのみ今ま述べた定義は局限してある――を問題とするに止めず、資本主義一般に對して資本主義の一定段階が占めるところの歴史的地位や、勞働運動内の二つの根本傾向と帝國主義との關係をも考察に入れるならば、帝國主義は更に違つた定義を下すことが出來、また下さねばならないこと、それは吾々が後段で見る通りである」と言つてゐる。

世界的規模における帝國主義にあつてさへさうであるとしたら、一國の帝國主義について更に別箇の定義を要すべきことは餘りに明白である……』[2]

今ま高橋氏によつて弄ばれてゐるところのレーニンの帝國主義の定義の對象は、世界體系としての帝國主義である。五つの特徴を備へた世界資本主義は、依然として資本主義ではあるが、質的變化を生じた資本主義として、世界資本主義の一定段階を代表する。此の資本主義を、その最も一般的、基本的な關聯において、純經濟的な相面に卽して特性づけることにより、世界資本主義の特殊の段階としての「帝國主義」の意味を明確に示すこと、――それが此の定義の用である。それは極めて重要なことではあるが、畢竟それだけのものである。しかるに、「伊太利の帝國主義」や「日本の帝國主義」は、此の定義が對象とするところの帝國主義そのものではなく、此の本質的、基本的な意味における帝國主義の全畫面のうちにあつて、レーニンの謂ゆはる『國民的差別相及び箇別態』を有するところの、ヨリ特殊具體的な相面である。[3] 加ふるに、「伊太利の帝國主義」や「日本の帝國主夢」は、それ自身もはや純經濟的な概念としては把握され得ぬ性質のものである。「帝國主義」の主體としての伊太利や日本は、國家權力と切り離すこと出來ぬ概念であり、伊太利の帝國主義、日本の帝國主義は、それ自身政治經濟的な概念である。かくて、一國を「帝國主義國」たらしめる諸特徴は、到底、資本主義全般の特定段階としての帝國主義の諸特徴ではあり得ない。もしも我がプチ・帝國主義者の頑張る如く、一の定義に含まれる言葉を「相對的意味」に解釋して、何にでもその定義を「當嵌め」てよいのであつたら、帝國主義の定義は一つあれば澤山といふことになり、レーニンは決して「別な定義」の必要を說きはしなかつたであらう。

2) 改造六月號 74頁。本書 145頁
3) 改造六月號 76頁。本書 148頁參照

(3) 定義を破壞する者

一の定義は、それが特定の關聯において特性づけてゐる特定の對象の特定の相面以外の相面に對しては全く用をなさない。だがしかし、この限られた相對的意義の範圍內において當の相面の特性記述たるところの定義は、その一語、その一句が、おの〳〵明確な意味、特定的な意味をあらはさねばならぬ。かくてこそ定義は定義である。どうにでも取れるやうな、また取つてもよいやうな言葉から成る「定義」は、定義ではない。しかるに我がジヤーナリスト的日和見主義者は、何事をたくらんだか？　そも〳〵『レーニンの擧げた第四、第五の國際的特徴は、氏（猪俣）等が口先でのみしきりに主張するやうに、之を「相對的」な意味にとり、次ぎに示す如く解釋せば、容易に之を或る一國に當嵌め得るではないか』とは、いつたい何事であるか？　此の日和見主義者は、あれほど明確な意味をあらはすレーニンの定義の言葉を、違つた意味に取らうと言ふのだ!!

「當嵌め」てならないものを當嵌めんとする自己を强辯すべく、定義の言葉そのもの〻特定的な意

味を勝手氣儘に解釋し散らすこと、――それが、レーニンの注意書き通りに、定義は限られた相對的意義しかないことを忘れないことだとプチ・帝國主義者は言ふ。――「負け惜しみ」とは、「出駄羅目」とは、「圖太さ」とは、まさに之れを評する爲めにつくられた言葉か。

定義の中の言葉の意味を、少しでも原意と違へてとれば、定義そのものが支離滅裂になる。それは、定義の適用ではなく、その破壞である。そして破壞が彼れの目的である。だから、彼れは、「駁論」においては、レーニンの定義を、一の纏つた意味をあらはす一全體として讀者の前に示すことを避け、レーニンが定義に內包せしめねばならぬと言つて擧げてゐる五つの特徵を、わざとばら〳〵に引用してゐる。[1]

ところで、例へば「資本主義諸强國による世界の領土的分割の終結」は、資本主義世界體系に生じた特徵としてのみ、定義全體にとつての意味を有つのだ。「領土的分割の終結」なる要因は、獨占その他の四要因と相俟つて、例へば領土の再分割を不可避ならしめ、世界戰爭を必然ならしめるが故にこそ、「資本主義最後の段階としての帝國主義」を特徵づける一要因なのだ。

かうした特定の意味あるところ、「强國間の世界分割の終結」なる事柄を、「相對的意味」に解し、日本といふ一國が『他國の領土を如何に分割してゐるか』といふ意味に取れば、本來の意味はいつたいどうなる?! またそも〳〵一國が『他國の領土を如何に分割して』をる時に、其の國は『資本

1) 改造八月號、58頁。

主義最後の段階としての帝國主義』の特徵を備へるといふのか?!

尙ほ後段で詳しく示すやうに、我がプチ・帝國主義者は、世界の領土的分割において我が帝國主義ブルジョアジーの分け前が少ないといふ事實に、彼れの全意識を奪はれてゐたのである。此の先入主をもつてレーニンの定義をうち眺めた彼は、正しくそれを理解し得る筈もなく、また理解するつもりもなかつた。反對に彼れはそれを逆用して日本を半植民地國の仲間に入れ、帝國ブルジョアジーの爲めに戰爭熱を煽つた。そして吾々の批判に逢ふや、「相對的意味」の詭辯を弄して反駁の體を裝ひ、却つてます〳〵日和見主義の尻尾をさらけ出したものである。

(4) 無視か、凝視か?

序でながら、その尻尾の太さを見て置くのも一興であらう。

高橋氏は言つた、『……一切の定義は總じてたゞ限られた相對的な意義しかないといふことを忘れずに』といふレーニンの注意書きのあることを猪俣が『强調』した時、猪俣は高橋氏が『それを恰も無視したかの如き口吻をもつて』書いてゐた、と。――はてな?! それでは、ちつとも無視しなかつた其の高橋氏自身が「太陽」四月號の論文に引用して置いたレーニンの注意書きなるものは、そも〳〵どんなものだつたか? それは、ヒドイ誤譯と一行半ばかり脫譯のある次の如き一句であ

つた――即ち、

『一般に定義の傳統的相對意義を忘るゝことなく』[1]、と。

「なんのことだ」、――此の朦朧とした文句のことなら、――氏はきつと凝視してゐたのであらう。

もう一つ。――高橋氏は、問題の『第四、第五の國際的特徴』の、今は早や古典的なる彼の『相對的意味』を堂々と述べ立てたその後で、かう書いてゐる、

『斯くの如く、私は、レーニンの定義を「相對的意義」に解すればこそ、（しかし猪俣氏の素晴しい語學の造詣に由ると、私がさうしたことは何でも「誤譯」してゐるのださうである?!）私は、私の「太陽」四月號の論文において、レーニンの「第四」の特徴を日本に當嵌める場合には、「それについては、日本の資本家は殆んど、その資本家の國際團結による世界の分割の埒外に取り殘されてゐる」と述べ、（猪俣曰ふ、見よ、日和見主義者の眼がどこについてゐるかを！）、第五に對しては「……（之れは）專ら世界的事實を指摘してゐるのである。この點については、從つてこゝに問題は起らないわけであるが、この小論の立場から問題となる點は、その分割の狀態である。が、これについては第五節で別に述べるつもりである」と明記してゐる』[2]（猪俣曰ふ、だから私は言つたのだ、「最後に笑はせられる者は、最もよく笑ふ」と）

1）太陽四月號 8頁。著書、50頁
2）改造八月號 59頁。

三、「悲喜劇の一幕」

(1) 「玆に讀者のお目に止められんことは」

以上によつて、高橋氏の「方法」の救ふべからざる誤謬と、「駁論」も糞もない「駁論」の正體はいよ〳〵明白である。だが、私は讀者諸君に約束した通り、高橋氏が拾ひあげた論點の一つ〳〵を「虱つぶしにつぶす」べく、尙も論筆を進めるであらう。

高橋氏は言ふ、――

猪俣等は、私が『當嵌め得べからざる尺度を當嵌めた』と言ひ、『その故に私の立場は全部誤謬だ』などと言ふ。『斯の如き氏等のスバラシイ錯覺は、そも〳〵何處から生れたものであるか。私はそれを次で項を改めて檢討するつもりであるが、その前、一寸息拔きに、氏等の云ふ帝國主義世界範疇論が、全然間違つてゐる當然の結果として、氏等の理論が、このため如何に混亂に陷らざるを得なかつたか、その悲喜劇を氏の論文自らをして一幕演ぜしむるであらう』[1]

『帝國主義世界範疇論』の反駁に全力を入れられた高橋氏が、『一寸息拔きに』、私の論文自らをし

1）改造八月號 54頁。

て演ぜしめられたところの、悲喜劇の一幕といふは外でもない、例の『こゝに、讀者の先づお目に止められんことは』の口上をもつて始まるそれである。此の一幕は、三場から成る。

第一に、手品師は、「世界」の帝國主義と「一國」の帝國主義との矛盾撞着を御覽に入れる。此の手品の材料は、私が改造六月號の拙稿においてレーニンの定義の性質に就いて述べた言葉から取つたもので、その一つは同稿六十四頁の次の如き一節の中にある。大きな圏點を附した一句は即ち手品師が拔き出したもの——

『これは、レーニンが帝國主義に與へた定義である。此の定義の對象たる帝國主義が、「一國の帝國主義」ではなく、謂はゞ「世界的規模における帝國主義」であり、その意味の帝國主義があらはす所の一定發展段階の「資本主義」は、當然に、資本主義全般、世界體系としての資本主義であつて、個々の國家組織の枠内にある個々の資本主義であり得ないことは、定義を一讀する者の直ちに看取し得るところである。資本主義をして帝國主義たらしめてゐる諸特徴が、資本主義世界體系の諸特徴であればこそ、國際的トラストによる世界の分配や、强國間の世界分割が、主要特徴として擧げられ得る。實にそれらは、單一の資本主義の特徴としては、言葉としても始めから意味をなさないものではないか。また勿論これらの五特徴は不可分な一綜合としてのみ、帝國主義のエポックの本質をあらはし、そのお〳〵は、相互制約的なると同時に相互補足的なる關係にある。[2]』

もう一つの言葉は、拙稿七五頁の次の如き一節の中にある——

『レーニンは、高橋氏によつて利用された帝國主義の一定義……を述べた直ぐその後で、「……帝國主義は更に違つた定義を下すことが出來、また下さねばならないこと、それは吾々が後段で見る通りである」と言つてゐる。

世界的規模における帝國主義にあつてさへさうであるとしたら、一國の帝國主義について更に別箇の定義を要すべきことは餘りに明白であるが、同時に、資本主義一般の一定段階としての世界的規模における帝國主義があつてこそ、帝國主義國もまたあり得るといふことも、劣らず明白でなければならない。……戰爭があつて始めて交戰國があるので、その反對ではないやうに、帝國主義のエポックがあつて始めて帝國主義國（近代的意味における）がある。[3]』

手品師は先づ此の七十五頁の言葉を引用し、次には前の六十四頁の言葉を引用して二つを組合せる。曰く、

『猪俣氏は眞面目腐つて謂はれる、『世界的規模における帝國主義にあつてさへさうであるとしたら、一國の帝國主義について更に別個の定義を要するべきことは餘りに明白である……』（改造七五頁）。又謂はれる、『資本主義をして帝國主義たらしめてゐる諸特徴が、資本主義世

2) 改造六月號 64頁。本書 133—4頁
3) 改造六月號 74—75頁。本書 145頁

界體系の諸特徴であればこそ、國際的トラストに由る世界分配や、强國間の世界分割が主要特徴として擧げられ得る。實にそれらは單一の資本主義國の特徴としては、言葉としても始めから意味をなさないものではないか』（改造六四頁）（猪俣曰ふ、此の單一の資本主義國といふ言葉も後で手品の材料に供される。讀者諸君は、それが茲て前後の關係上何を意味してゐるか御記憶を乞ふ）

そこで、太夫は一段と聲を張りあげて言ふ――

『こゝに、讀者の先づお目を止められんことは、猪俣氏にあつては、世界規模の帝國主義の外に、一國の帝國主義があるのださうである。而して、氏に由ると、日本が帝國主義國か否かを測るには、その一國の帝國主義の定義に由らねばならないことになるらしい。所で氏は、その舌の乾かない裡に、（!! 七五頁で言つた舌の乾かない裡に、六四頁では）、資本主義をして帝國主義たらしめてゐる諸特徴は世界體系的のものであつて、單一の資本主義國の特徴としては、言葉としても意味をなさないと敎へられる。それで、猪俣氏の頭には矛盾も何もなくて、分かつてゐるらしいが、私には一寸も分らない。皆さん、猪俣氏の仰言る意味が御分りになりますか。[4]』――（拍手喝采鳴りも止まず！）。

此の奇術の種は前に明かして置いた。奇術の目的は、言ふまでもなく、「なるほど分からん」といふ感じと、「矛盾がある」といふ錯覺とを起させることにある。では、どんな矛盾か？　それは、

4）改造八月號 55頁。

一方で帝國主義は世界的なものだと言ひながら、他では帝國主義は一國的なものだと言ふ、即ち、「一國の帝國主義」があるなどゝ言ふ――と、たゞそれだけのこと。では、また、どうしてそれが奇術になるか？　かくして誘起された矛盾の感が錯覺だから。

資本主義世界體系の特殊の發展段階を意味する「帝國主義」と、該體系の構成部分たる英吉利や佛蘭西や日本の「帝國主義」とを區別すべく、前者を「世界的規模の帝國主義」といふ言葉であらはし、後者を「一國の帝國主義」といふ言葉であらはすことが、何で矛盾か？

こんなクダラない手品でも使はなければ、我が日和見主義者は、「駁論」が書けなかつたのだ。また、そんな手品なら、誰れにでも出來る。

例へば、私が奇術師なら、高橋氏の駁論の中から次の如き二句を引抜き、高橋君の聲色を使ふ、――曰く、

「高橋氏は眞面目腐つて謂はれる、――『歷史的には、資本主義そのものが已に國際的な存在であり、時代であり、特徴である』（五六頁）。しかるに氏はまた謂はれる――『云ふ所の資本主義最後の段階としての帝國主義は、之をそのまゝ、日本の資本主義に當嵌めることが出來る』（五二頁）

こゝに讀者のお目に止められんことは、高橋氏にあつては、國際的、世界的の資本主義の外

に、日本の資本主義があるのだそうである。而して氏によると、國際的世界的な資本主義の最後の段階としての帝國主義を、そのまゝ、日本の資本主義に當嵌めることが出來るといふことになるらしい。所で氏は、その舌の乾かないうちに、歴史的には資本主義は國際的存在であり、時代であり、特徴であると敎へられる。それで高橋氏の頭には矛盾も何もなく……等、等よろしく……皆さん、高橋氏の仰言る意味が御分りになりますか。」

(2) 「一國」の帝國主義の捻り出し

第二、――今度の手品は、私の用ひた「一國の帝國主義」といふ言葉を、『猪俣氏の「一國の帝國主義」論』とかいふものに變造し、その「論」において私が、「一國だけで成り立つ帝國主義」といつたやうなものがあるとでも言つたかの如き印象を讀者に與へることにある。手品は、いよいよ佳境に入るのだ。さて、太夫の曰く、

『猪俣氏の「一國の帝國主義」論は、更にすばらしい大發見を含んでゐる。一體、私どもの理解する所に由ると、帝國主義と云ふ概念は、必ずや、搾取してゐる資本主義國と、搾取されてゐる國との尠くとも二ケ國を必要とする。だから、一國の帝國主義だなど云ふことは、生徒と云ふことを考へずして先生といふ概念を作つたり、夫と云ふことを考へることなくして妻と云ふ定義を考へたり、一人の夫婦と云ふが如きことを言つたりするのと同じ誤謬に外ならぬ。然るに、いま、我が猪俣氏の帝國主義論に於ては、一國の帝國主義があるのださうである。(混同してはいけない、猪俣氏の云はれるのは、一國の帝國主義國ではなくして、一國の帝國主義である。その國といふ字の脱字でないことは、氏の論文の前後の意味(改造六月號七五頁上段)から確かである)。[1]』

玆での奇術師の苦心は、看客の注意を「一國」の二字に惹きつけて他の一切を忘れさせる所にある。だから彼れは、いま御目を止められまする「一國の帝國主義」には、何の仕掛けも御座いませんと、わざ〳〵括孤の中で改めて見せ、「氏の論文の前後の意味」(!)までも丁寧に調べた上でのことでありますると濟し返る。彼れは、讀者諸君がまさかに「改造六月號七五頁上段」をひつくり返して見るやうなことは萬あるまいと高を括つてゐる。「人を喰つてゐる」のは手品師の常である。『帝國主義といふ概念は、必ずや搾取してゐる國と、搾取されてゐる國との尠くとも二ケ國を必要とする。』然るに「一國」の帝國主義とは何たる矛盾でござりませう!。

善哉。――それでは、高橋氏それ自身は、日本の帝國主義を如何に扱つてゐたか? 氏は言つた、

『日本の資本主義は、……少くともプチ・帝國主義以上の何物でもない。』『日本の「プチ・帝國主義」たる所以は、……その國の經濟の性質に由來する根本的な素質に由るものである……』[2]

1) 改造八月號 55頁。
2) 太陽四月號 18頁。

玆に高橋氏が問題にしてゐるものこそは、即ち「世界的規模の帝國主義」から區別されるところの、日本といふ「一國の帝國主義」ではないか。それを氏は、「プチ・帝國主義」だと言ふ。では、此の妙チキリンな範疇を、如何にして氏はでつちあげたか。それは、日本が「搾取されてゐる」といふ馬鹿々々しいことを强調せんが爲め、帝國主義日本にとつて至要な意義を有する朝鮮や支那の存在をヒタ隠しに隠すことによつてでつち上げたものである。そして、讀者よ、そのプチ・帝國主義國論を批判した論文において私が昂揚したのは、他の國を搾取する資本主義國としての日本であり、朝鮮や支那の存在であり、そして獨占的搾取權の爭奪者として英米と對立する日本であつたのだ。[3] だが、事態の本質、核心、眞相を見せまいと苦心すること手品師そのものゝ如き男を見よ！

私が批判の對象とした高橋氏の長論文は、「日本資本主義の帝國主義的地位」を論じたものであつたが、その中で、氏は、朝鮮については只だ一言、『尤も以上の計算には朝鮮臺灣等に對する投資を含んでゐない』と述べたに過ぎない。[4] そして支那については、日本の對外投資を述べる際に言及し、日本の「政治借款」は「利益」のないものであることを强調してはゐるが、日本が支那に對して有する産業投資の重要性、利權、特權、並びに經濟的及び政治的支配力に關しては一言も觸れない。そして、各國の「資源の獨占」を比較するのだといつて重要商品の單なる生産高を示した表においては、英帝國のうちに加奈太を入れ、米帝國の中にはメキシコまでを入れながら、日本帝國の

3) 改造六月號 77—81頁。本書 149—159頁。
4) 太陽四月號 16頁。著書 63頁。

分からは、支那はもとより、滿洲や朝鮮までもきれいに除外してゐる。[5]

かやうに、日本の帝國主義における最も重要なる要素、朝鮮と支那を、ことさらに無視してゐた高橋氏が、しやあ〳〵として言ふのである、——『一體、私どもの理解する所に由ると、帝國主義といふ概念は、必ずや搾取してゐる資本主義國と、搾取せられてゐる國との尠くとも二ケ國を必要とする。』と！

そして、奇術師のおしやべりは續く、

『だから、一國の帝國主義だなどと云ふことは、生徒といふことを考へずして先生といふ概念を作つたり、夫といふことを考へることなくして妻といふ定義を考へたり、一人の夫婦と云ふが如きことを言つたりするのと同じ誤謬に外ならぬ。[6]』

だが、かうなつて來ては、誰しも奇術師に反問したくなる。私がもし、「高橋氏は猪俣一人の批判にさへも答へ得ない癖に」と言つたら、氏は、「一人の批判とは何だ、批判といふ概念は、必ずや批判する者と、批判される者との尠くとも二人を必要する」と力味返へるつもりかどうか、と。かうなると、讀者諸君の方からも彌次が飛ぶだらう——、甲『さうだ、太夫！ ゴマ化しちやいけない、「一人の夫婦」だなんて。「一人の夫」と言つちやいけないのか。それとも君は「二人の夫」か?!』乙『さうだ、君は多分、日本が先生で朝鮮が生徒、支那が妻君で日本が亭主だぐらひに考へ

5) 同上 25—26頁。著書80—83頁。
6) 改造八月號 55頁。

てゐるんだらう！」等、等。

天才はしば〳〵常規を逸するといふが、これは、わが高橋氏としてはそれほどの事でもあるまい。「猿も樹から落ちる」の程度か。

いづれにせよ、讀者諸君、「日本の帝國主義」なるものが、他國から切離した日本「一國」において成立するかの如く言つたのは、吾々ではない。それは奇術師の高橋先生である。

(3) 「スバラシイ錯覺」

ところで、高橋氏によると、此の先生と生徒といつたやうな關係を忘れたところに、「左翼理論家諸君」の大混亂の根因がある。さやうな關係をあらはす「關係概念」として帝國主義を把握し得ざる素朴さの故に、彼等は、高橋氏を評し「當欲めてならないものを當欲めた」などとなすやうな『スバラシイ錯覺』に陷つたものである。――といふのは一體何の事か？

氏は曰ふ、

『思ふに、氏（猪俣）其他左翼理論家諸君の「帝國主義世界範疇」論の誤謬の根因は、本來帝國主義なる概念は、種々なる對立關係を豫想して成立するところの關係概念に屬するものなるにも拘らず、氏等は、ナイーヴにも之を單獨に成立する絶對概念と誤謬したところに在る。例へば、若し私が、地球は圓いと云ふ命題に對し、その圓いといふ尺度を直ちに日本に當て欲めんと試み、而して、「日本は圓くないぞ」と云つたとすれば、確かに猪俣氏其他の帝國主義「世界範疇」論のコケ嚇しは御迷論ではなくて、正論であり、斯く云つた高橋は確かに頭がどうかしてゐる。

然るに、猪俣氏其他の左翼理論家諸君に對しては、甚だ御氣の毒に耐へないが、「資本主義最後の段階」といふ言葉に由つて特性づけられた帝國主義と云ふ概念は、左樣な種類の概念ではなくて、例へば、學校と云つたやうな種類に屬するものである。學校といふ定義は、いかにも生徒と教師が一體となつたものに與へられたものであつて、教師や生徒に離れ〳〵に孤立して與へられたものではない。去り乍ら、然らば、學校といふ概念に於いて、如何なる地位のものが教師であり、如何なる地位のものが生徒であるかを測定するには、學校といふ定義に與へられた尺度をもつて測る外に之を知る方法はないのである。いま、私が、日本は果して帝國主義國（資本主義最後の段階と云ふ言葉によつて特性づけられた所の）であるか否かと云ふ問題を提出して、その如何をレーニンの與へた「資本主義最後の段階としての帝國主義」の特徴に求めたことは、少しも「當欲め得べからざる尺度を當欲めた」のではない。[1]』

何と良く喋つたものではないか。

1) 改造八月號 54頁。

だが、高橋氏よ、吾々は、あなたが聰明にも、地球は圓いが日本は圓くない、と言ふのが惡いと申すのではない。圓くない日本が、圓からう筈はないから。では、何がいけないと言ふのか？

地球は圓いが、日本は圓くない、故に日本は「地球」國でない、せい〳〵の所が「プチ・地球」國である、と言ふのが！

高橋先生の例題に敬意を表すべく、圓いといふ特徴の故に一物が「地球」であるのだと假定しよう、――恰も、領土的分割の結了や獨占の支配の確立といふ特徴の故に、資本主義世界體系が「帝國主義」と呼ばれるやうに。帝國主義體系の特定種の一構成部分としての日本は、全體系に生じた領土分割結了や獨占支配確立といふ本質的事態を超越する存在ではあり得ない。と同じやうに、地球の一構成部分としての日本は、地球の圓さを超越することは出來ぬ。だが、だからといつて、地球の圓さは、その一構成部分たる日本の特徴では斷じてない。同様に、全體系における獨占支配確立や領土分割結了が、その一構成部分たる日本に生じてその特徴となることは物理的に不可能である。然るに、もし、到底ある筈のないそれらの特徴が日本に無いといふ理由で、日本は「帝國主義」國でない、しかし「プチ・帝國主義」國である、と言ふ者があれば、それは、圓からう筈のない日本が圓くないといふ理由で、日本は「地球」國でなく、「プチ・地球」國であるといふのと何處が違ふか?!

或はまた、地球は圓い、高橋先生の頭も圓い、地球も、頭も、「絶對概念」である、先生の頭は頗る大きい、だがさすがに地球大ではない、して見れば高橋先生の頭は、「プチ・頭」である、と、かやうに論ずる者があつたらどうか？　先生は、直ちに、そんな「絶對概念」論のコケ嚇しこそは御迷論といふものだ、君等はナイーヴにも、圓いといふ屬性さへあれば何とでも比較してその大小を決定し得るものだと心得てゐる。たとひ兩方ともが絶對概念にもせよ、頭は頭と比較し、地球は他の天體と比較すべきものである。それ〴〵に正しき標準を用ひることなくして、どうして私の頭の本當の大きさを測定し得るものか、と敎へられるでもあらう。そして「絶對概念」の相對性を强調されるであらう――（それを「相對的意味」に解する代りに）。――吾々は贊成する。帝國主義にせよ、帝國主義國にせよ、吾々は曾つてそれらを「絶對概念」として扱つたことはないのだからである。また、さればこそ、吾々は主張した、帝國主義體系の一構成部分としての個々の帝國主義國の特殊性は、全體系の特徴を標準として論定すべきではなく、構成分子それ自體の諸特徴に求めねばならぬ、と、言ひ換れば、一國が帝國主義國か否か、また如何なる帝國主義國であるかの問題は、その國の帝國主義が「資本主義最後の段階としての帝國主義」であるか否かといふやうな大それた問題ではなく、「もつとつゝましやかな、ヨリ特殊的、具體的な」問題である、と、蓋し、「資本主義最後の段階としての帝國主義」とは、正にかの不可分の五特徴の故に、たゞ全體系についてのみ言ひ

得るのであるから。

更にまた高橋氏よ、吾々は、あなたの謂はゆる「學校といふ定義」に從つて「先生の位地と生徒の位地」を決定することが惡るいといふのではない。だが、玆にもし、「學校」に關する『純經濟的な特徴』を示した一定義を拾ひあげ、その特徴の有無によつて直ちに一人の高橋氏が先生であるか否かを決定せんとする粗忽者があれば、それは馬鹿だと言ふのである。玆でもまた高橋先生出題の例題に卽し、假りにいま學校とは、先生が生徒に敎へるといふ關係をあらはした概念であるとすれば、さうした關係において敎へる地位に立たれる高橋氏は先生であり、よく敎へ、多く敎へられるが故に、大先生でもあらう。だがしかし、學校といふ社會的制度物全體としての發展を、その經濟的基礎に卽して考察するならば、例へば學校は今や商業主義（コンマーシャリズム）を特徴とする發展段階に達したと言ふ事も出來よう。社會的制度物としての學校が全體として既に商業主義の段階にあるとすれば、先生達もまた多かれ少なかれ商業主義化さねばならぬ。多かれ少なかれ商業主義化し、また商業主義化さんと力めるのでなければ學校の先生として立てなくなつてゐる所に、時代的特徴がある。だが、學校商業主義のエポックに於ても、先生の商業主義化には遲速があり、深淺があり、異なる方面がある。蓋し、先生として立つ爲めに典型的に商業主義化さねばならぬ人、それほど商業主義化す必要のない人、或る點では商業主義化しても他の點では商業主義化さない人、等、それ〴〵の素質、

境遇、性格等によつていろ〳〵だからである。そこに先生商業主義化の個人的「差別相、個別態」が生ずる。高橋先生も、むろん、商業主義化される。かくてこそ、新時代の先生である。けれども、先生は商業主義化といふ特徴の故に先生であるのではなく、敎へるといふことの故に先生なのだ——假りに先生の敎授が「講義の切賣り」に過ぎないとしても。然るにもし、人あつて、學校の特徴は今や商業主義であるのに高橋先生は餘り商業主義化してをられない、從つて先生は「まだ漸くプチ・先生の段階に達したか達しない程度の先生である」と言つた時、先生が若しナイーヴにもそれは少しも「當欲め得べからざる尺度を當欲めたのではない」から、正にその通りだと申されたら、それこそ先生の「頭は確かにどうかしてゐる」と言ふべきではあるまいか。——そして、高橋氏愛用のレーニンの「尺度」なるものは、レーニン自らの言明により、單に純經濟的な特徴のみをあらはしたものであることは、私が前稿以來繰り返し强調してゐることである。

想ふに、高橋先生がかやうに、絕對概念、關係概念の理論を展開するに至られたのは、先生が吾吾によつて何處を批判されたのかも解らずに「五里霧中」でをられた爲め——ではまさかあるまい。想ふに、それは先生の奇術への序曲としての特別展開であつたのであらう。讀者諸君よ、奇術はまだ終らないのである。

(4) 日本の帝國主義と東洋

第三の場面として御手拍子喝采を願はうとするのは、世界的規模、東洋規模、一國規模の帝國主義の捻り出しである。

『氏（猪俣）によると、日本が帝國主義國であるか否かは、その定義（一國の帝國主義の定義）に由つて測らねばならないわけである。さうかと思ふと、氏はまた、先きにも言つたやうに、帝國主義は世界的規模におけるそれだと主張せられる。更にまた氏は、日本が帝國主義國であるか否かを圖るに、『日本人は日本人らしく、すくなくとも一應は、問題を東洋に限るべきであらう』（改造七八頁）[1] と述べて、東洋と云ふ規模に於て、日本が帝國主義國であるか否かの尺度を求めようとしてゐられる。即ち、猪俣氏によると、帝國主義には、世界規模のもの、東洋規模のもの、一國の規模のもの、と三つも基準があることになる。斯くて、猪俣氏其一派の左翼理論家諸君の偉大は、そのユニックな帝國主義論の故に、二國規模のもの、三國規模のもの……、歐洲規模のもの……と幾十かの帝國主義の概念を自由に製造し出す大發見をなされた所にある。[2]』

玆で奇術師が新しく持出して來たのは、「東洋的規模の帝國主義」である。彼れは、さきに、「一

1) 本書、151頁
2) 改造八月號 55頁

國の帝國主義」といふ言葉のあるを奇貨とし、「一國だけで單獨に成立する帝國主義」なるものを捻り出した。それを「一國規模の帝國主義」と名づけた彼れは、今や、東洋の日本の帝國主義を、ひと先づ、東洋について論ずるの必要を力說した文句のあるに乘じ、その文句の中から、「東洋だけで成立するところの東洋的規模の帝國主義」なるものを飛び出させる。

だが、一國の帝國主義といふ言葉があれば直ちに「一國規模」の帝國主義を認めたことになり、「少くとも一應は問題を東洋に限るべきだ」といふ言葉があれば直ちに「東洋的規模」の帝國主義を認めたことになる、といつた詰らない手品なら、これもまた誰にだつて譯なく出來る。外ならぬ高橋先生それ自身の御引用にかゝるバヴロウィッチの言葉中に、『一等列國の帝國主義』[3] とあるのは、一等列國規模の帝國主義を認めたもの、同じく先生御引用のレーニンが『先進國における帝國主義』[4] と言つてゐるのは卽ち先進國規模の帝國主義を認めたもの、等、等。更に先生御自身の『日本のプチ・帝國主義』[5] は、日本規模の帝國主義であり、『歐米の「帝國主義」的搾取』[6] は、歐米規模の帝國主義的搾取である、等、等、實に際限もなし。

高橋氏は、平然として、『氏（猪俣）は、日本が帝國主義國であるか否かを圖るに、「……すくなくとも一應は問題を東洋に限るべきであらう」（改造七八頁）と述べて、東洋と云ふ規模に於いて日本が帝國主義國であるか否かの尺度を求めようとしてゐられる』と述べてゐる。これはもちろん眞

3) 太陽四月號 18—19頁　4) 同上 5頁　5) 同上 18頁
6) 同上 24頁

赤な嘘である。高橋氏が此の手品の材料を引出した言葉のある「改造七八頁」[7]にあつては、「日本は帝國主義國か否か」が問題とされてゐるのではない。それは既に數頁前に片付いてゐた。從つて問題は進んで、「帝國主義日本は現在如何なる對立關係にあるか」に移り、帝國主義國としての日本は如何に強大であり　その強大さは如何なる帝國主義國との對立にあらはれてゐるか、その對立は特に何を中心として何處に生じてゐるか、――それが論ぜられてゐたのである。私は言つた、

『……「強大國日本」――それはもはや「與へられた事實」である。吾々はたゞ、彼れが如何に強大であるかを知らんとするのみである。

だが、大と小、強と弱は、ノア洪水の大昔から相對的であつた。

高橋氏は、極東の資本主義日本の強弱大小をはかる「尺度」を全世界に求められる。そして一群の重要商品の生産高と、諸國の面積と人口とを記述し比較する事によつて、問題を、商業地理の水準にまで引上げられた。しかし、吾々の問題は、それよりはもつとつゝましやかな、ヨリ具體的な、特殊な、しかもダイナミックなものではなかつたか？　伊太利の小麥や、ドイツの鐵や、フランスの石炭の生産高、米領キューバの面積、佛領モロッコの人口、――そうしたものが、資本主義日本にとつて有する意義を調べねばならぬほどに、此の極東帝國が膨脹したことを吾々は未だ知らずにゐる。「日本人は日本人らしく」、すくなくとも一應は、問題を東洋に限るべきであらう。

が、その東洋が、世界資本主義の、從つて帝國主義の、新らたなる重點とならうとしてゐる。そして重點に近いものゝ力は、たゞその事の故のみで擴大される。假令それがまだ「農業國」であつたとしても。

世界大戰は、英國と米國の地位を顚倒した。戰後米國の不可避的な帝國主義的進出は、太平洋においては、しかし、形勝を占むる日本によつて阻止される。此の對立なくして「太平洋會議」は生れ得なかつた。革命的な印度、革命的な支那が、亞細亞の舊主人を脅かす。が、老帝國の衰亡は、此の大陸の既得權の死守を老帝國に命ずる。彼れは壯帝國を凝視する――形勝を占むる工業日本を。此の對立なくして、日英同盟の破棄はあり得なかつた。資本主義日本の優越は、一方では、依然として戰略的なそれである。

しかるに新しき日本の優越はまた新しき內部的な力に伴はれてゐる……戰後の帝國主義日本は、××××××として、×××の小さき分前を追つてゐるには、もはや餘りに強大すぎる。彼れの爭はんとする所は、亞細亞における覇權である。最も優越した二大強國に對する最も優越した獨占的地位である。けだし、爭はずにはをれないから。

何故、をれないといふか？　(一)英米の抗爭にも拘らず、南洋と支那とにおいて特殊利權を

7) 本書、151頁

獲得し、伸張せしめることは、既得の植民地及び諸利權の維持と共に、新らたなる段階に入れる資本主義日本存立の爲めの絶對的先要條件である。（二）對立のあるところ、かゝる條件は戰ひとられねばならず、戰ひとるの道は常に進攻であつて退守ではない。

では、何故にまたそれが先要條件であるといふか？　まさにその新たなる發展段階において、ヨリ遙かに增大したる規模において展開するところの諸矛盾の故に。[8]』

吾々は、讀者諸君と共に、高橋氏が昂然として斯う言つたことを記臆する――『本來帝國主義なる概念は、種々なる對立關係を豫想して成立するところの關係概念に屬するものなるにも拘らず、氏（猪俣）等は、ナイーヴにも之れを單獨に成立する絶對概念と誤認した』と。そこで問題は、範疇的に二つに一つだ。その帝國主義の種々なる對立關係における日本の地位を檢討するに當り、高橋氏は、吾々のなせるが如く東洋を中心とするか、それともしないか？　帝國主義日本の勞働運動の日和見主義的右翼指導者としての高橋氏は、東洋を直視することを恐れる。何故か？　帝國主義日本の、世界における地位を明かにする爲めに、問題を一應、東洋に限り、注意の焦點を東洋に向けるならば、折角自分がスクリーンの隱にかくしたつもりの朝鮮や支那が、百燭光の眞下に置かれる。そして「生徒」や「妻」として、「先生」や「夫」のそばにかしづいてゐる代りに、紛れもない×××××として、「プチ・帝國主義國」のブルジョアジーの面前に現はれる。――「鶴瓶々々」。

8）改造六月號 73―4頁。本書 151―2頁

(5)　吾々はなぜ東洋に力點を置くか

吾々が特に東洋に重きを置いた事は、高橋氏の認うるが如く、日本の帝國主義を「東洋規模」において檢討し、東洋を世界から切離したことを意味するか？　吾々は、すべてのマルキストと共に、歐洲における帝國主義を認識し、亞米利加における帝國主義を認識し、東洋における帝國主義を認識する。それらはみな、全世界に亘る帝國主義的搾取及び對立の諸關係――その綜合が帝國主義世界體系である――の、歐洲、亞米利加、東洋における特殊の現はれに外ならない。だが、吾々は更に沒落期資本主義の現代における東洋の帝國主義の特殊の重要性を認識する　また、吾々が「東洋の盟主」日本帝國の帝國主義の特質、特殊性の分析究明において、問題を一應、東洋に限つた時に既に、吾々は必然に、英國との對立を說き、米國との對立を說き、勞農ロシアとの對立を說いた。そしてこれらの對立こそは、實に、帝國主義世界における我が日本の地位を明かならしむるものでなくて何か？　英國は西歐の英國として、米國はアメリカの米國として、世界の帝國主義國ではないか。ロシアは東歐＝亞細亞のロシアとして、世界の社會主義國ではないか？　そも〳〵一國の帝國主義的地位とは何か？　それはその國が、世界的に絶えず發展する帝國主義的對立抗爭の全體系の一要素として、一定の時處において入り込んだ特殊具體的な關係に外ならない。「帝國主義の世

界的連鎖の一環」とは、そうした關係における一國を意味する。此の特殊具體的な關係を究明することを外にして、世界におけるその國の帝國主義的地位を明かならしむる方法があらうか。

高橋氏は臆面もなく言つた――、自分は『世界全體としての無產階級的運動の一環としての日本を研究の對象としてゐるのであつて、之を或は東洋だけに切り離したり、或は日本と支那だけに孤立せしめたりして考へてゐるのではない』と。だが、左樣に「切り離したり」、「孤立せしめたり」したのは誰か?! ――見よ、世界無產階級運動の一環としての日本といふ意義深き表現も、一度び右翼日和見主義者の手にかゝれば、日本無產階級運動にとつて最も重要なる對立關係を無視する爲めの口實に利用される。そして全く無產階級的意義のない事柄の方に無產階級の注意を轉向する爲めの口實に利用される。彼れは、全世界において、各帝國が重要商品の生產において占むる割合や、各帝國の面積と人口の大小を比較し、それによつて日本の帝國主義的地位を知れ、――日本が「被帝國主義國」の仲間なることを知れといふのだ。日本を半植民地國級の弱小國に變裝する爲めの道具、――それが彼れの振り廻す「世界標準」なのだ。

いかにも、帝國主義國としての日本は、何等かの意味において、すべての帝國主義國と對立し、またすべての被壓迫民族と對立する。從つて、各國の重要商品の生產高、面積や人口も、日本の無產階級運動にとつて全く無緣であるとはいへぬ。だが、そうしたものが、日本無產階級の戰略及び戰術の決定に對して如何なる特殊の意義があるといふのか? ルール炭田はドイツ無產階級にとつて重要意義がある。だが、日本プロレタリアートにとつてどうか? 伊太利帝國主義の重要要因であるところのトリポリは? ――伊太利無產階級にとつて特殊の重要性があるのは、歐羅巴=亞弗利加における帝國主義であつて、東洋における帝國主義ではない。朝鮮ではない。日本が支那から掘り出す鐵ではない。しかし乍ら若し、帝國主義日本のプロレタリアートが、之等のもの〻特殊の重要性を見逃して戰略戰術を打立てるとしたら、誤謬は必然に致命的である。

帝國主義日本の强さは、東洋における英米との對立にあらはれてゐる。一國の强さは、量でなくて質であり、相手次第だ。絶對的の强さはない。時處を超越した强さはない。例へば日本に三倍する某國の海軍力も、それが悉く東洋に置かれてゐない限り、日本に三倍する强さにはならぬ。却つて日本のそれに劣りもしよう。石炭にしろ、鐵にしろ、國土にしろ、人口にしろ、特殊具體的な對立關係から切り離された單なる數量の比較が、何で强さを現はすものか。「地位」を現はすものか。帝國主義日本の問題は、東洋にかゝるのだ。そして問題は、對立關係と共に絶えず發展する。革命支那をさしはさむ日英米の三大帝國主義國並びに勞農ロシアの對立抗爭は、全資本主義世界の運命を決する力學的要因として發展しつゝあるのだ。

一國の帝國主義的地位を「測る尺度」だの、「世界標準」だのと、――そんな機械的、固定的、靜

的な何物かゞ存在するやうに思つたり、それを、どうかして「當嵌め」得ると思つたりするのは、たゞ形式的にしか思考し得ない日和見主義者流の幻想である。問題は、ずつと「ダイナミック」なものだ　帝國主義的世界體系全體の基本的純經濟的な特徴を示したレーニンの定義は、英國や日本の帝國主義的地位を「測定する」爲めの「世界的尺度」でもなければ、「世界標準」でもない。レーニンは、そんなものとして自分の定義を用ひたことは曾つてなかつた。

吾々は、帝國主義世界と、帝國主義國との關係を、發展する體系とその構成要素との關係として把握する。兩者は、はつきりと區別し得るが、しかし離れ〴〵の者ではない。一の帝國主義國が、一定時において、帝國主義世界のうちに占むる地位は、その國が入り込んだ對立關係の特殊具體的なることとの故に、必然に、特定の地域、――例へば東洋――において、最も尖鋭に顯現される。その東洋における對立關係を究明することは、その國が全世界において占める地位のまさに精髄を掴む所以である。そうした究明を拒否する者は、不可避的に總てを逸する。

(6)　日和見主義者と科學

故意にすべてを逸すべく、帝國主義日本をば全體系の一要素として扱ふことを拒み、その特殊の地位を東洋において見出すことを拒むところの高橋氏は、批判者の所說の此處彼處から片言隻句を捉え來たつて「世界的規模」、「東洋的規模」、「一國規模」の帝國主義をひねり出し、そしていたり顏で述べ立てゝゐる。――

曰く、

『なる程、これでは、その有せられる帝國主義の尺度に幾十、幾百かの異つた種類のものがあるが故に、而して御都合のよい時に、勝手に都合のよい種類の尺度を持ち出されて來るが故に、氏（猪俣）及びその一派の左翼理論家諸君と、「日本が果して帝國主義國なりや否や」と議論して見た所で、諸君の仰言る意味が、瓢單餘で、捕捉出來ないわけである。斯くの如くにして、氏等は勇敢にも、みづから、科學（！）の埒外に御自身の理論を弊履の如く放り出される。[1]』

見よ、「政商的」政治家が「政治の倫理化」を口にし、軍閥的政治家が「肥料の分配の公正」を唱へ、デマコーグがマルクスやレーニンを喋々するやうに、わが奇術師は、機を見て、科學を强調する。彼れの科學とは何か？　たま〳〵帝國主義に關する一つの定義が見つかれば『鬼の首でも取つたやうに喜び』勇み、その一面的な特徴のみを示した定義が全面的な特徴を示すものと早合點し、また示し得るものと盲信し、帝國主義の相面の如何、關聯の如何、體系と構成部分の見さかへもなく、無暗矢駄羅に「當嵌め」得るものと心得、果ては定義の言葉を、『御都合のよい時に』は『相對的意味』に解したのだと空ウソブキ、定義そのものを破壞して恬然たることである。此の

1)　改造八月號　55—6頁

「科學」者の頭では、どなたの『仰言る意味』だつて、『瓢單鯰で捕捉出來ない譯』ではないか。然らば、吾々は如何にして、『科學の埒外に御自身の理論を弊履の如く放り出した』か？ 吾々は、帝國主義を全面的に正しく把握し得んが爲めに、先づ、その各種の面、各種の關聯、體系と構成部分とをはつきりと區別し、彼れと是れとの混同を避けた。しかも吾々は、各種の相面と全體、構成部分と體系とを、相互關係において見ることを忘れない。かくして吾々は、與へられた問題——日本は如何なる帝國主義國か——を解決する爲めに取扱はねばならないところの、帝國主義の特定の相面を、特定の關聯において、しかも全體との相關において、見究めようとする。だから吾々は、一定の相面の特性記述——定義——をば、かゝるものとしてのみ理解し、從つてその適用を正當に限定し、從つてまたそれに含まるゝ言葉の確定的な意味を尊重し得た。かゝる方法が、吾々の理論を弊履の如く科學の埒外に放り出すものと奇術師の眼には見えるといふなら、奇術師はその弊履でも拾ふがよからう。

(7) プチ・帝國主義者と共産黨宣言

最後に、餘興として高橋氏は、「歴史的に存在した單一孤立的な資本主義國」なるものゝ奇觀を御覽に入れようとする。

『尚ついで乍ら、氏（猪俣）に於いては、帝國主義のみが國際的現象（その外に一國の帝國といふ素晴らしい大發見をしてゐられること既述の通りであるが）であつて、資本主義はさうでなく、「單一の資本主義國」（改造六月號六四頁下段）が歴史的に存在してゐたかの如く認められてゐる。しかし乍ら、例へば一八四八年に書かれた有名な共産黨宣言を御覽になつても分るし、其他資本主義に關する「初歩的」（この御言葉は猪俣氏から私に誤り贈られたもの故、いま御返上致す）なものを御覽になり、又は御覽にならずとも御考になれば分るやうに、歴史的には、資本主義そのものが已に國際的な存在であり、時代であり、特徴である。然らざれば、マルクスの有名な「萬國の勞働者結合せよ」はテンデ意味をなさないではないか。斯く、資本主義は單一的孤立的に存在し、帝國主義のみ世界的に存在す、と云ふが如く區別してゐられることも、氏及びその一派の理論家の帝國主義に對する理解が五里霧中にある一因をなしてゐると思はれる。[1]』

此の手品の種明しは全く蛇足である。「單一の資本主義國」なる言葉が拙稿において事實何を意味してゐたかは、前既に引用した一文——（本書二七六頁）——につき、前後の關係を一瞥された讀者諸君の直ちに看取された所であらうからである。この餘興の面白味は、寧ろ、「共産黨宣言」の援用にある。即ち、「萬國の勞働者結合せよ」と暗んじ、此の一句を引いて資本主義の國際性を立

1) 改造八月號 56頁

證する男こそが、日本の無產階級と、英米佛の無產階級とを、十字火の下に相殺戮せしめんとするプチ・帝國主義者なることである。

(8) 一應の要約

論點が多岐に亘つたから、玆で一應、高橋氏の「プチ・帝國主義國」論の「方法」に對する批判として述べた部分の要旨を摘記して置く。

高橋は、如何にして帝國主義日本をプチ・帝國主義國に變裝せしめたかといふに、先づ、資本主義全般の特殊の發展段階としての帝國主義の定義を、一國の資本主義に對しても「當嵌め」得るかの如く履き違ひ、前者の諸特徴が日本の資本主義にあるかないかによつて、日本の資本主義が「最後の段階としての帝國主義」なるか否かを決定しようといふ馬鹿々々しいことを企てた。氏は、日本においては、國內的に、獨占も金融資本も殆ど發達してをらぬ、資本の輸出入においては却つて輸入國であると斷定した。（此の斷定そのものが理論の無理解と事實の歪曲とに基づく妄斷であつたことについては尙ほ後に述べる）。その斷定に基づいて、日本は未だ漸く「プチ・帝國主義」の段階に達したか達しない、といふ奇態な斷案が生じた。ところで、獨占的國際トラストによる世界の分配の開始とか、諸强國間の領土的分割の終結とかいふ特徴になると、いくら誤謬の專門家でも、いきなり之れを日本の資本主義に見出すといふ譯に行きかねる。そこで、それらを全く意味の違つたものと化し、世界市場の分配や、領土的分割や、資源の獨占やにおいて、日本ブルジョアジーの分け前が多いか少ないかの問題に——恐らくは意識的な日和見主義的意圖をもつて——轉化し、その分け前は非常に少ないと斷定した。（これもまた理論の無理解と事實の歪曲とに基づく滅茶苦茶なものであつたことについては後に述べる）。その斷定に基づいて、日本は被搾取國であり、「被獨占國」であり、「被帝國主義國」であるといふ破天荒の斷案が生じた。——これが高橋の「日本資本主義」の帝國主義的地位を「檢討」する方法であつた。

それに對して吾々は、前稿「資本主義日本の帝國主義」において、レーニンの定義の性質を明かにし、定義の中にあげられた五特徴は世界資本主義、世界帝國主義の特徴であつて、日本といふが如き一國の資本主義、帝國主義の特徴ではない、從つて前者の特徴の有無によつて日本が帝國主義國か否かを決定せんとする方法は致命的な誤謬であると批評したのである。しかるに、高橋氏は「駁論」において言つた。——レーニンの定義は「一國の帝國主義」には當嵌まらぬなどと云ふのは、世界帝國主義から切り離された「一國の帝國主義」、「單一孤立の國の帝國主義」といつたやうなものが存在するかの如く考へるからだ。そんなものにならば當嵌まらぬかも知れぬ。しかし、「帝國主義」といふ概念は、『單獨に成立する絕對概念』でなく、例へば『學校といつたやうな』關係概念で

ある。即ち、「學校」は、先生が生徒に教へるといふ關係をあらはすやうに、「帝國主義」は、或る國々が他の國々を搾取するといふ關係をあらはしてゐる。して見れば、學校において如何なる地位のものが先生であり、生徒であるかは、學校に關する定義によつて定まると同じやうに、「帝國主義」において如何なる地位のものが「帝國主義國」（搾取する國）であり、「被帝國主義國」（搾取される國）であるかは、帝國主義に關する定義に從つて決定されねばならぬことは明かだ。かくして日本が帝國主義國か否かを決定するに當つても、「帝國主義」は飽くまでも世界的範疇であるから、世界的標準によつて決すべきであつて、猪俣の如く、問題を『東洋だけに切離したり』するのは間違ひである。また、第四、第五の特徴も、レーニンの注意書き通り、「相對的意味」にとれば立派に當嵌まるではないか、と。

之に對し、私が本論において、前回の批判を擴充しつゝ展開し來たつた批判を要約すると、

（一）レーニンの定義を一國に「當嵌め」ることの誤謬は、レーニン自身が「當嵌め」てゐないことによつて議論の餘地がない。私がそれを指摘して置いたのに氏は何故に答へなかつたか？

（二）第四、第五の特徴を「相對的意味」にとるなどといふのは、注意書きの意味さへも解らないのか？ 解つてゐるのならゴマ化しである。定義の中の言葉を原意と違つた意味にとれば、それは定義の「當嵌め」ではなく、破壞ではないか。

（三）日本なり英國なりの帝國主義を指して一國の帝國主義と呼んだその言葉を捉えて、「一國だけで成立つ帝國主義」に早替りさせたのは、高橋氏の手品である。世界帝國主義に關する定義が一國の帝國主義に「當嵌」まらないのは、前者と後者とが互に獨立し、「單獨に成立するもの」だからではなく、前者は體系全體であるのに後者はその一構成部分に過ぎないからである。全體系の諸特徴は構成要素を制約するが、構成要素それ自體の特徴とはなり得ない。

（四）加ふるにレーニンの一定義の中にあげられてゐる五特徴は、純經濟的な特徴に過ぎない。假りに、「先生」か「生徒」かは、「學校」の定義に從つて決定することが出來るとしても、「學校」に關する純經濟的な諸特徴を示した定義に從つて決定することは出來ない。先生か生徒かは、先生そのもの〻特徴、生徒そのもの〻特徴に從つて決定されねばならぬと同じく、帝國主義國か否かは、帝國主義國そのもの〻特徴によつて決定されねばならぬ。

（五）日本が帝國主義國か否かを決するには、東洋だけに切離して考察せよと言つたと主張したのは、手品を使ふ日和見主義者である。帝國主義國としての日本が現に如何なる帝國主義的對立關係に入込んでゐるかを究明する爲めには、東洋を中心として考察せねばならぬ。それは、日本の特殊具體的な對立關係の精髓を掴む所以であり、從つて、世界における日本の帝國主義的地位を明かにする所以である。もしもその特殊具體的なものを逸するならば總てを逸する。商業地理か何かの

やうに、世界各國の面積や人口や商品の生産高を比較することによつて、日本を被帝國主義國の仲間に仕立て上げることは、日本の帝國主義的地位の究明とは似てもつかない遊戯であり、悪戯であり、詐欺である。

四、帝國主義國とは何か

(1) 高橋氏の最後の切り札

だがしかし、高橋氏にはまだ最後の切札がある、――曰く、そんなら、猪俣は何をもつて帝國主義國の特徴となすか？　猪俣自身は現に日本における獨占や金融資本や資本輸出をあげて日本が帝國主義國なることを立證せんとしてゐるではないか？　と。――即ち、

猪俣は、一國の帝國主義には別な定義を下さねばならないといふ。『而して、その定義を、何でも猪俣氏は、いま一生懸命に考へてゐられるか、乃至は已にチヤンと持つてゐられるらしい口吻だ。[1]』

『現に猪俣氏及び左翼理論家諸君は、日本が帝國主義國であることを旺んに主張せられてゐる。そこで氏等に御尋ねするが、一體日本が帝國主義國であるか否かと云ふことは、氏等は如

1) 改造八月號 55頁

何なる尺度、乃至は準繩に照して、左樣に御判斷なさるのであるか。その尺度を御示し願ひ度い。

氏は、「改造六月號」に於て、レーニンの云ふ帝國主義は世界規模にのみ適用し得る尺度であつて、一國に適用し得る尺度ではないと云はれ乍ら、他方に於て切りに苦しい言ひわけをなし、汗みどろになり乍ら(!)、しかし結局に於て、日本が帝國主義國であることを證明するには(!!)、やれ生産の集積がどうの、獨占がどうの、資本の輸出がどうの、金融資本がどうのと、レーニンの擧げた（それも別に述べるが如く錯覺(!!)してゐられるが）資本主義最後の段階としての帝國主義の特徴を尺度にして測つてゐられるではないか。それ以外の尺度で測つたと、（「改造」の論文では示されてゐないが）仰言るならば、一つそれを示して頂き度い。[2]』

見よ、何といふ卑怯な「駁論」の仕方であるか。私は「改造」六月號の論文で奇術を演じてゐたのではない。もし私がそれほど「苦しい言ひわけをなし、汗みどろに」なつてゐたといふのなら、何故その「言ひ譯」の部分をせめては要點なりと引用し、その「苦しい」所をハツキリと讀者に示さないのであるか。悪口は、それからでも遅くはあるまい。また、呉服屋の手代もどきに、『その尺度を御示し願ひ度い』と、變に腰を低くして詰め寄せるほど、それほど「尺度」が気になるなら、『――（改造の論文には示されてゐないが）――』など、括弧の中で

2) 同上 53―54頁

しらばくれる代りに、讀んだが解らないなら解らない、解かつたが間違つてゐるなら間違つてゐると、何故はつきりと言はないのであるか。

私は、高橋氏の「駁論」と同月に出た「社會科學」八月號の拙稿において、既に、次のやうに述べて置いた。

『帝國主義國とは、國內における獨占と金融資本の支配が確立し、資本輸出が優れた重要性を有する國であると言つたのでは、定義にもならない。さうした特性記述は、たか〳〵、その國の帝國主義の經濟的基礎を示さんとしてゐるに過ぎない。帝國主義國とは、帝國主義の世界體系の構成部分として、それ〴〵の範圍及び程度において多かれ少なかれ獨占を享有しつゝ、自己の獨占的地位の維持と擴大との爲めに戰爭を賭して抗爭せざるを得ないところの、また抗爭する力あるところの、資本主義國の謂ひである。で、もちろん、一國は單に植民地を有するが故に帝國主義國なのではない。單に陸海軍を有するが故に、また單に戰爭するが故に、帝國主義國なのではない。そしていま特性づけたやうな資本主義國によつての抗爭、戰備、××、併合が、謂ゆる「侵略主義」、「軍國主義」以外以上のものであるのは多言を俟つまい。[3]』

そしてこれは、六月號改造の拙稿において「汗みどろの苦しい言ひ譯け」とかをした部分——『四、「日本は帝國主義國でない」か？』[4]——において述べたことを要約したものに過ぎない。

3) 「社會科學」理論闘爭號 427—428頁。本書 206頁
4) 同上 74—77頁。本書 206頁

我が日本は、日露戰爭によつて、帝國主義國としての自己を決定的に立證した。（一）近代的意味における帝國主義國が生ずる爲めには、先づ、一體系としての帝國主義が成立してをらねばならぬ。だから、私は、日本といふ『新興資本主義國を帝國主義國たらしむべき一切の條件』の第一として、『全體としての帝國主義のエポックの成立を前提し』、と述べてゐる。[5] 更に、『帝國主義のエポックがあつて始めて帝國主義國（近代的意味における）がある』[6]とも述べた。

（二）此のエポックにおいて帝國主義國たり得るものは、言ふまでもなく、資本主義國でなければならぬ。だから私は言つた、『日清戰爭當時の日本において既に支配的な生產樣式となりつゝあつた資本主義は、……日露戰爭時代までにかなりに高度の發達段階に達してゐた。かゝる發達なくしてあの近代的戰爭の遂行は不可能である』[7]と。

（三）帝國主義國は、帝國主義體系の一構成部分として、侵略政策を遂行する資本主義國である。だが、帝國主義體系の特殊の經濟的基礎は獨占である。獨占こそが、此のエポックを前のエポックと區別せしむる「特殊の差異」である。從つて「現代的」帝國主義國の侵略政策は、獨占の侵略政策であらねばならぬ。獨占の侵略政策とは何か？ 獨占的地位を維持し擴大する爲めに戰爭を賭して爭ふことである。從つて帝國主義國は、それ〴〵の範圍及び程度において獨占的地位を有してゐねばならぬ。そして日本にあつてはそれが、レーニンの指摘してゐる通り、主として兵力の獨占が支

5) 改造六月號 77—8頁。本書 149頁
6) 同 75頁。本書 145頁
7) 改造六月號 77頁。本書 149頁

那等の外國民を××する特殊便宜の獨占であつたことを私は明かにして置いた。[8] 更に私は、資本主義日本が、日露戰爭によつて爭奪した所の植民地、朝鮮、滿洲等は、古典的な「移民」の爲めの新領土ではなく、我が資本の爲めの獨占的市場、獨占的放資域であつたことを指摘して置いた。[9]

（四）高橋氏は、氏の前稿において『日本はこれまで、英國の如き帝國主義國たらんと希望して、その目的の爲めに全力を擧げた……しかし乍ら、それは要するに一個の希望であつてその爲めに日本が「帝國主義國」に現實になつたわけではない』と、典型的な小ブルジョア的辯解を試みてゐた。だから私は反問して、我が資本主義日本は、單に希望の所有者であつたか、否な、日露戰爭の勝利によつて日本は、帝國主義國としての自己を現實に立證しはしなかつたか、と言つた。[10] 蓋し、帝國主義國は、獨占的地位を爭ふ實力を有たねばならぬからである。[11]

（五）最後に、帝國主義國の特徴は、獨占的地位の維持擴大の爲めに爭はずにはいられない所にある。此の必然的な促迫は、當然に、外部からの刺激と內部の衝動力との合成物である。兩者のいづれが優越するかは、その時々の具體的な情勢によつて定まる。日露戰爭當時の帝國主義日本にあつては、外からの刺激が勝つてゐた。東洋における帝國主義的國際對立が、如何に此の新興資本主義國を帝國主義體系の渦卷きへ捲込み、帝國主義政策——獨占の侵略政策——の遂行を必然ならしめたかの一條は、周知の歷史的事件である。だが、かゝる政策への轉向は、それ相應な內部的衝動力

8) 改造六月號 76、77—8頁。本書 147頁。149—153頁
9) 改造六月號 77、71—2頁。本書 149頁。137—140頁
10) 改造六月號 77頁。本書 149頁
11) 改造六月號 77頁。71—2頁。本書 149頁。137—140頁

を伴はずして生ずるものでない。だから私は明記して置いた——『當時のわが資本主義は尙ほ半封建的な文武の國家官僚の指導に俟つ所多かつたに加へて、資本主義それ自身が既に掠奪的である』[12]と。また、『紡績業の發達や鐵道敷設哩數の增加やの速度を見ても、日露戰爭後の十年は、それに先立つ十年に比し 緩漫になつてゐる』ほどに、當時までに既に、資本主義の國內的發展は一定の限界に達し、對外的膨脹が要求されてゐたことを。[13] だが、世界大戰後の日本の帝國主義は、格段に尖銳化した國際對立のうちに見出されると同時に、また遙かに强大な『內部的な力に伴はれてゐる』。今や帝國主義日本の『爭はんとする所は、亞細亞における覇權である。最も優越した二大强國に對する最も優越した獨占的地位である。けだし爭はずにはをれないから』[14]『かくしてこの爭覇が、わが資本主義存立の絕對的先要條件となつてゐること——そこにこそ現段階における資本主義日本の帝國主義の特質は見出されねばならない』。[15] 此の現段階の特質の究明こそが、あの論文の主題であつたのである。そして日露戰爭以來の我國の帝國主義が、今や入込める新しき段階の特質を見究める爲にこそ、他の諸相と共に、集積、獨占、金融資本、資本輸出の現狀をも檢討し、高橋氏の虛構のかず〳〵を摘發したのではなかつたか。

(2) 全體の特徴と部分の特徴

12) 改造六月號 77頁。本書 149頁
13) 同上
14) 改造六月號 78頁。本書 152—3頁
15) 改造 80頁。本書 157頁

既に繰返し言つたやうに、帝國主義世界體系の構成部分たる個々の資本主義國が帝國主義國であるか否かは、全體系の純經濟的諸特徴がその國にあるか否かによつて定まるのではなく、全體系に體現される本質的諸關係に於て其の國が如何なる地位に立つかによつて定まる。我が高橋氏は、『本來帝國主義なる概念は、種々の對立關係を豫想する』と言ひ、『必ずや搾取する國と搾取せられる國との尠くとも二ケ國を必要とする』と言つた。それは氏が、吾々の批判に面して認めざるを得なくなつたところの眞理の微光である。だが、日和見主義的志向に滿てる氏は、眞理の全面を正視することを恐れる。

レーニンのあげた五特徴を經濟的特徴とするところの世界帝國主義は、如何なる關係を體現するか？　體系の構成部分たる諸多の「國民經濟」に卽して見る限り、すくなくともそれは、若干の資本主義國の資本と、自餘の諸民族との間に成り立つところの搾取＝被搾取の關係であり、支配＝隷屬＝反抗の關係である。更に、搾取し支配する資本相互間に成り立つところの對立＝抗爭の關係である。だが、さう言つただけでは未だ、帝國主義關係の特殊の特質をあらはさない。帝國主義の段階は、「獨占の段階」である。從つて、謂ふところの搾取は、獨占的搾取であり、支配は、獨占の支配である。對立は、獨占の對立であり、抗爭は、獨占を手段とし、獨占の爲めに行はれる。そして此の本質的な關係の故に、また必然に、當の鬪爭における決定的手段、不可缺手段は、武力であり、戰爭である。

では、諸多の「國民經濟」間に成り立つところの此の特殊の搾取、支配、對立、抗爭の諸關係において、如何なる地位に立つものが帝國主義國であるか？

帝國主義國は、（一）他國民に對して獨占的搾取を行ふ。（二）對外的意味において多かれ少なかれ獨占的地位を有する。（三）それを手段として更に獨占的地位を擴大せんとする。（四）從つて、一の帝國主義國は、必然に、自己の搾取し支配せんとする異民族と對立すると同時に、他の帝國主義諸國と對立し、抗爭する。（五）かゝる對立抗爭において自己の目的を遂げんが爲めに强大なる陸海軍を有する。

これらは、帝國主義國の特徴として最も基本的なものである。私は、全體系の特徴は、その構成要素を制約するといつた。右にあつては卽ち、個々の國の帝國主義は、全體系を特徴づけるところの獨占によつて制約されてゐる。レーニンが言つた通り、「資本主義最後の段階としての帝國主義」の基本的經濟的特徴は、一言にして言へば獨占である。だが、彼れは、謂ふところの「獨占の特徴」を更に敷衍して次の如き諸特徴に要約した。

（一）全體系に見られる重要現象として、『相互の間に世界を分けるところの國際的、獨占的資本家諸團體が成立し、且つ資本主義强國間の、世界の領土的分割が終結してゐる』。しかるに、個々

の帝國主義國の資本は、著しく異る諸條件の下に、著しく異る發展力を有つてゐる。生産力と市場、生産とその原料等の間の矛盾は堪え難き苦痛となる。かくして帝國主義諸國にとつては、世界を再分割する爲めの闘爭は不可避的であり、軍備の競爭的擴張は必然的であり、そのバランスの變動を契機として爆發する世界戰爭は運命的である。

（二）全體系において、『商品輸出と區別される資本輸出が、特に重要な意義を有つ』。資本輸出は昔からあつた。海外放資の安全が或る程度まで保證されるや否や、資本は、國内よりも高率の利潤が得られる限り、外國に向つて流れ去つた。しかるに、帝國主義の時代になると、資本は進んで、外國――主として農業國乃至半農業國等――において、高利潤を獲得する機會を、積極的、能働的につくり出す。外交は常にその手段として仕へる。資本輸出は今や、政治的意義をもち、獨占的搾取、資源獨占、異民族支配、領土併合を目指すものとなる。かゝる放資域の爭奪は、常態的な現象となり、從つて、しば〳〵、當面の利潤計算よりも、放資域の先取を目的とし、或は他國の先取、獨占を妨害することを目的として行はれる。かくして資本輸出は全體系において『特に重要な意義』をもち、從つて個々の國の帝國主義は此の事態に制約され、各國は否應なしに資本を輸出する。即ち、帝國主義國が行ふ資本輸出は、特殊の意義ある資本輸出である。例へば日本は、明治三十一年までに京仁、京釜兩鐵道を敷設する爲めに朝鮮へ資本を輸出した。あれは日本が實行せる帝國主義的資本輸出の始まりであり、爾來着々として朝鮮及び支那に向つて實行し來たつた。かやうな特殊の意義ある資本の輸出入關係に即して云へば、帝國主義國はもちろん資本を輸出する地位に立つ。しかし、一國が帝國主義的資本輸出を行ふといふことは、決してその國が謂はゆる「債權國」なることを意味するのではない。獨逸も米國も日本も、一方では帝國主義的資本輸出を行ひながら、他方では資本を輸入し、外國に對する債權と債務の單なる數字を比較すれば「債務國」であつた。『資本輸出が特に重要な意義を有つ』とレーニンが言つてゐるのは、帝國主義の全體系の特徴として言つてゐるのである。一國において『資本輸出が優れた重要性を得る』時、即ち一國が立派な債權國となる時に初めて、その國は帝國主義國の一資格を備へるといつてゐるのでは決してない。

（三）帝國主義體系の全體において『獨占と金融資本の支配が確立されてゐる』。といふ意味は、諸多の『國民經濟』間の搾取＝被搾取、支配＝隷屬、對立＝抗爭の關係において獨占的資本が支配力を有し、就中その典型的なものとして金融資本が支配力を有し、全體としてかゝる支配力はもはや動かすべからざるものと成つてゐることを指す。此の事態もまた、もちろん、個々の國の帝國主義を制約する。苟も、獨占的地位を爭奪するほどの者は、對外的には、今や、自己の資本を金融資本として作用せしめねばならぬ。例へば日本が、京仁、京釜兩鐵道を敷設する爲めに朝鮮に投じた

資本は、その形態及び機能において、商業資本でも、貨幣資本でも、産業資本でもなくて、金融資本であつた。『金融資本は特に動的な伸縮自在な資本である』（レーニン）。だが、もちろん、各國資本主義の發達に遲速があり、特異性がある以上、國内における獨占及び金融資本の發達は、程度、形態、様相を異にする。從つてそれらの對外的支配力も國によつて異ならねばならぬ。金融資本の對外的支配力は、しば〳〵他種の支配力によつて補はれる。世界大戰前までの日本においては、國家獨占が優越し、典型的な金融資本の發達は遲れてゐた。レーニンが、日本の帝國主義的關係にあつては金融資本の獨占が兵力の獨占その他によつて補はれてゐたことを指摘したことは前既に述べた。「獨占と金融資本の支配の確立」は帝國主義の全體系の特徴である。それが、一國内に生ずることによつて、その國が帝國主義國となるのではない。

(3) 帝國主義のエポックは如何にして成立したか

形式的、機械的にしか思考し得ない者は二つの誤謬に陷り易い。一つは、レーニンが帝國主義の特徴としてあげた不可分の五特徴のうち、「獨占と金融資本の支配の確立」、「資本輸出の優れた重要性」だけを切り離し、それを帝國主義國の特徴と錯覺することである。かゝる錯覺者は、かう考へる、――たとひそれらが「全體系」の特徴であるにもせよ、しかしいづれかの國において獨占と金融資本と資本輸出とが發達し、かゝる國が先づ帝國主義國として現はれ、そこで初めて帝國主義の體系も生ずるのではないか、と。

これは、帝國主義を特殊の對立＝鬪爭の體系として把握し得ざる者の妄想である。體系としての帝國主義と、その要素としての帝國主義國との關係は、私が前稿において指摘した通り、戰爭と交戰國との關係に似てゐる。戰爭があつて交戰國があるのであつて、その逆ではない。と同じやうに、獨占の爲めの對立鬪爭が成り立つて始めて、その對立者、鬪爭者たる帝國主義國があるのである。十九世紀の中葉までは、英吉利一國が、工業に於て、市場に於て、植民地領有に於て、世界的な獨占を享有してゐた。だが、此の時代の獨占や資本輸出や植民地搾取や侵略政策は、體系としての帝國主義の成立を意味さなかつた。英國と對立抗爭する資本主義國がなかつたからである。從て英國は未だ近代的意味の帝國主義國ではなかつた。又たもし、假りに此の事態が繼續し、その基礎に於て英吉利國内に資本集積が進み、獨占と金融資本が成立したとしても、それはレーニンが特性づけた意味における「帝國主義」の成立を意味さない。寧ろ、英吉利一國が全世界を搾取し支配するところの「超帝國主義」の成立を意味する。帝國主義は、獨佛の擡頭によつて先づ英國の産業獨占が破れ、植民地獨占が破れ、獨占的地位を目指す對立抗爭關係が成立すると共に成立した。かくして生じた對立者、抗爭者が帝國主義國である。だが、國内における獨占と金融資本の發達は、唯一の

資本輸出國であつた大英國よりも獨逸の方に早く生じた。それらは、市場獨占と植民地獨占とにおいて尙ほ優越した先進の英吉利と抗爭する後進獨逸の資本家的鬪爭の武器として必然に發達したものである。英國もやがて同じ武器を有つに至つた。帝國主義は、その成熟過程において、佛蘭西、米國、露西亞、日本、伊太利をも獨占的地位の爭奪者と化し、帝國主義國たらしめた。論理的にも、歷史的にも、一國內における獨占、金融資本、資本輸出の發達によつてその國が帝國主義國であるのではなく、帝國主義體系に先んじ又は獨立して一國が帝國主義國であるのではない。

(4) 理論の一般的抽象性と現實の具體的特殊性

形式的な頭腦が陷り易いもう一つの誤謬は、――最も初等的な誤謬は、金融資本と帝國主義との本質的な關係を究明すべく、その最も典型的な發展を一般的抽象的に規定せんとしたる理論(テオリー)を讀み、その理論において述べられてある通りの發展が、特殊具體的な發達を遂げる個々の國の資本主義にも生じ得るかの如く錯覺することである。此の誤謬も、前の誤謬と共に、我が誤謬の妙手高橋氏が陷らずにゐる筈はない。卽ち氏は曰ふ――

『先づ猪俣氏自身に、氏の日頃云はれる(!)帝國主義が如何なる意味のものであるかを語らしめよう。(讀者よ、猪俣が特定の關聯に卽し、特定の相面について論じた「帝國主義」ではなく、たゞ漠然と「日頃云はれる帝國主義」である!)。社會問題講座第十卷「帝國主義論」(において猪俣は云つた)――「現代の帝國主義は、一口に言へば「金融資本」の政策として理解せられる。金融資本の政策とは云つても、金融資本が追求する諸政策の一つ、乃至は偶然的なそれの意味ではなくして、金融資本が金融資本である限り、追求せずにはをられない政策であり、同時にまた金融資本にとつて唯一可能なる政策の意味である」。氏は又た、去る四月の「社會科學」における「帝國主義の理論と沒落の過程」なる氏の長論文において云はれる、「領土的膨脹の爲めの戰爭――それは昔からあつた。が、今やそれが、かつては平和主義の體現をもつて任じさへしたブルジョア的秩序の、發展乃至存續の爲めの不可缺手段となつてゐること、そのことに特殊の意義が見出されねばならぬ。」(同書三八頁)と。[1]』

右の、「現代の帝國主義は……金融資本の政策として理解せられる。」といふ一句を冒頭とした私の小論は、「社會問題講座」の爲めに帝國主義の理論一般を出來るだけ平易に述べようと試みたもので、該論文において究明せんとしたのは、政治=經濟的な範疇としての帝國主義の一般的本質的根本的な特質である。個々の國の帝國主義の特殊の特質、個々の國をそれ〴〵に帝國主義國たらしめる諸特徵、――さうしたものを問題にしたのではない。問題は最も單純化され、抽象化されてゐる。從つて、それにおいて、簡單に、帝國主義は金融資本の必然的な政策である言ふ時、それはた

1) 改造八月號 61頁

が、最も典型的なものに就て語られてゐるに過ぎない。だが、吾々は、典型を學び知らねばならぬ。かゝるものゝ分析によつてのみ、事態の本質は把握され得るからである。また、苟も帝國主義國にして其の資本を對外的に金融資本として作用せしめぬものはないことは既に述べた。

また、他の一文、「帝國主義の理論と沒落の過程[2]」は、資本の擴張再生産の法則であるところの、內在矛盾展開の觀點から、帝國主義の必然性を理論づけようとしたもので、此の問題もまた當然に、最も抽象的な水準において扱はれてゐた。從つて例へば、それにおいて「戰爭によつてのみ存續發展し得るブルジョア的秩序」と言ふ時、それはブルジョア的秩序一般を指してをり、特定的に、日本のそれや、獨逸のそれを指してゐるのではない。そしてそのブルジョア的秩序とは、就中、獨占主義の搾取、侵略、支配、隷屬の帝國主義體系に體現されるブルジョア的秩序を意味してをる。

しかるに高橋氏は、私の二論文から右の數行を引用し　それを指して言ふのだ——

『いま、斯の如き意味の「帝國主義論」——(とはいつたい何のことだ、猪俣)——に於て、日本が(!)果して帝國主義國の地位を占むるか否かを檢討する(!)に當つては、第一にその國の資本主義が非常に高度な生産の集積をなし、その上に獨占が生れ、金融資本が成立する——(レーニンがあげた全體系の二特徵が成立する)——迄に發展してゐるか否か、而して、斯

2) 本書に收むる第二の論文。

の如き資本主義の發展に隨伴する矛盾——利潤率の低下に迫られて、之れを克服するには、その獨占的地域の膨脹を必至とし、そのためには帝國主義戰爭をやる以外にその金融資本の發展乃至存續を圖る途はない事情に迫られてゐるか、否かを調べる必要がある。(とあなたが履違へただけのこと、猪俣)。而して此の點に關する日本の現在の地位については、私は寧ろ(?)否定的であり(卽ちブチ・帝國主義國以上でないと云ふ言葉を用ひてゐる)、猪俣氏其他の左翼理論家諸君は全然肯定的(!)である。』[3](よくそんな出駄羅目が平氣で言へたものである。猪俣)

こんな馬鹿々々しい履違ひは何を語るか？　理論を讀みこなす能力なきを語る。そして、かゝる履違ひの見地から、日本の帝國主義的地位とやらを「檢討」される高橋氏が、日本帝國主義の現段階に關する吾々の『實證』をば、『羊の群を兵隊と錯覺して勇敢にも之に突擊するドン・キホーテそのものである[4]』と御高評あるのである。

五、高橋氏の反問(!)

(1)「一國に當嵌めてならぬか」

3) 同上 61頁
4) 同上 61頁

レーニンは、帝國主義の定義を下すに當り、『次の如き五つの、その最重要な特徴を包含するやうな、帝國主義の定義を工夫しなくてはならない』と言つて、獨占の成立以下の五つの特徴を列擧してゐる。高橋氏は、定義そのものを引用する代りに、特にその五特徴をばら〳〵に引用して斯う言つてゐる。

『猪俣氏によると、右の五特徴の中、(四)及(五)は『資本主義世界體系の特徴』であつて、『單一の資本主義國の特徴としては、言葉としても初めから意味をなさない』ものださうである。若しも、之を高橋の云ふが如く日本に當嵌めようとすれば、『日本の資本主義に於て世界の領土的分割が終結したりするやうな』荒唐無稽なことに、ならざるを得ないではないかと、鼻高々と勇敢にも(但し盲目蛇に怖ぢざるが如き)嘲笑せられることになるのださうである。それ故に、氏等左翼理論家諸君の「明敏」なる頭腦によると、レーニンの云ふ帝國主義の五特徴は[1]「世界規模」にのみ對するもので或る一國の尺度となり得るものでない、といふが如き素晴しい結論になるのださうである。が、氏等の糠喜びが餘りにも度外れであるの故に、私としては洵に御氣の毒で申上げ悪いことであるが、しかし、斯樣な論理の運び方は、卒直に申上げると、全然間違つてゐるのである。而してその間違つてゐることを證明するには、大した勞を必要とせない。唯だ一言、「然らば、(レーニンが帝國主義に與へた特徴は世界規模のそれにのみ當嵌め得るものだと主張せられるならば)、レーニンの擧げた、(一)、(二)、及(三)の特徴(それは氏等が故意か過失か、奥深く隱匿せられてゐる!)も世界規模にのみ當嵌め得るもので、一國に當嵌むべからざる尺度だと仰言るのですか」?!、と反問するだけで澤山だ。[2]』

泥沼に陷沒した高橋氏には、それで「澤山」でもあらう。だが、それは混亂と負惜しみ以外の何物であるといふのか?

問題は、一全體としての定義に關するのだ。定義の中に包含された個々の「特徴」に關するのではない。レーニンの定義は、世界的體系として資本主義について下されてゐるものであるといふこと——そのことは、第四、第五の特徴を一見すれば明白であると吾々は主張する。從つて、その定義に從つて或る一國の資本主義が「帝國主義の段階」にあるか否かを決定しようとするのは全然無意味であると吾々は主張する。五つの特徴は、世界資本主義を帝國主義たらしめてゐる諸特徴として、不可分のものである。私が前稿で明記して置いたやうに、それらの五特徴は『不可分な一綜合としてのみ、帝國主義のエポックの本質をあらはし、その〳〵は、相互制約的なると同時に相互補足的なる關係にある。[3]』

例へば、——ホンの此の場限りの比喩に過ぎないが——、「コップは、ガラス製の圓筒で飲料物を飲む爲のものである」といふ定義は、コップといふ特定の對象について下されたもので、一物を

1) 原文には主特徴とあるが、五特徴の誤植であらう。

2) 改造八月號 58—9頁

3) 改造六月號 64頁。本書 124頁。

コップたらしめてゐる諸特徴として此の定義に含まれてゐる三つの特徴は、前記の意味において不可分のものである。世は廣しと雖も、コップの定義を「尺度」として一物がメートル・グラスであるか否かを決定しようとしたり、乃至はまたコップの定義をインキ瓶や水呑柄杓に「當欽め」ようとしたりする馬鹿はあるまい。たとひ、それらの物の間に、共通乃至は類似の特徴があるにしても——。

だが、混亂、負惜み、滅茶苦茶、等、等の諸特徴を特徴とする所の我が高橋氏は、斯う吾々に「反問」(!)してゐるのだ。——レーニンの定義は世界體系としての資本主義について下されたものだと君等は言ふが、しかしそれだからと言つて其の定義は一國の資本主義に當欽めてならぬといふことになるのか? 君等は、獨占や、金融資本や、資本輸出等の特徴も、『世界規模にのみ當欽め得るもので、一國に當欽むべからざる尺度だと仰言るのですか?!』 そして、さう『反問するだけで澤山だ』と。

見よ、此の反問が、何を意味するかを。定義と其の對象との關係の問題——眞の問題——を泥足で蹴飛ばした氏は、斯う言つて喰つてかゝられたのである。『君等はそれを、コップについて下された定義だといふが、しかしそれだからと言つて其の定義はインキ瓶に當欽めてならぬといふことになるのか? 君等は、「ガラス製」や「圓筒」といふ特徴も、コップにのみ當欽め得るもので、インキ瓶には當欽むべからざる尺度だと仰言るのですか?!』。何と「素晴らしい」御反問ではないか。

不可分の一綜合として、世界的規模の帝國主義の特質をあらはしてゐる諸特徴を、『一國に當欽』めようとする高橋氏よ、あなたは、コップの諸特徴をインキ瓶やメートル・グラスに當欽めようとしてゐるのだ。さういふ飛んでもない「尺度」をもつて、或る一國を檢討し、その國はプチ・帝國主義國である、被帝國主義國の仲間であると主張する高橋氏よ、あなたは、メートル・グラスを取りあげて之れは不格恰なプチ・コップであると斷定し、インキ瓶を取りあげて之れは不便極まるコップであつてコップといふよりは寧ろ非コップの仲間に入るものであると論じてゐるのだ。

一物は、單に、「ガラス製」であり、「圓筒である」ことのみによつてコップであるのではない。それらの特徴は、「飲料物を飲む爲のものである」といふ他の特徴から切り離してしまへば、もはや一物をコップたらしめる特殊の特徴では無くなる。『經濟生活にとつて決定的な諸獨占をつくり出す程に、それほど高度の發展段階に達してゐる所の、生産及び資本の集積』や、金融資本や、資本輸出は、それ自身、それだけで、資本主義全般の特殊の發展段階としての帝國主義の特殊の特徴なのではない。まして、個々の資本主義國を帝國主義國たらしめる特殊の特徴ではない。他の諸特徴と不可分の一綜合として、特定の對象の特質を形づくつてゐる二三の特徴を、他から切離し、異なる對象に「當欽」めることによつて、高橋氏はそも〳〵何を發見しようといふのであるか?!

特定の對象について下された定義を、強いて異なる對象に適用せんとした高橋氏よ、だからあなたは、コップの特徴の或るものを『相對的意味』に解してコップの特徴ではないものに變じ、コップの定義そのものを破壞せねばならなかつたのだ。コップの定義を強いてメートル・グラスやインキ瓶に當嵌めようとして見よ、コップの定義が含むところの、コップの特徴の一つなる『飲料物を飲む爲めのもの』をそのまゝにして置くことは出來ない。だが、「尺度」そのものをこわしておいて、何が『當嵌め』であるのか?! (斷つて置くが、以上の比喩は、勿論、茲での論證のみに限られた目的にしか役立たない。帝國主義體系と帝國主義國との關係は、特徴の類似といふことの外に尙ほ全體と部分といふ關係をも併せ有する。だがその關係に即しての批判は前段で盡されてゐる。)

(2) 「當嵌めてゐるではないか」

コップの諸特徴を「尺度」としてインキ瓶の特質を見ようとする理論的曲藝は、暫くの間、プチ・帝國主義者の「獨占」として置いてよい。

吾々は、インキ瓶にはインキ瓶の定義があるやうに、個々の國の帝國主義、もしくは帝國主義國には別箇の定義があり、それに從つて日本が帝國主義國か否か、また如何なる帝國主義國であるかを論定すべきであると主張した。そして、帝國主義國とは、一口に言へば、帝國主義の世界體系の一構成部分として、獨占的地位を爭奪する資本主義國であると言つた。私の前稿「資本主義日本の帝國主義」において、私が高橋氏のプチ・帝國主義國論を批判しつゝ日本帝國主義の現段階の特質を究明したのは、專ら此の立場からであつた。

日本は帝國主義國である。だが、帝國主義國として獨占的地位を爭ふものである以上、少くとも二つの點が明かにされない限り、帝國主義日本現在の特殊の特質は究明されない。(一) 何故に獨占的地位を爭奪せずにはをれないか? (二) 爭奪する力は何から生じ、如何なる力か? (但し兩者は相關的である。) 一國の、獨占的地位の爭奪を必然ならしむるものは、その國が陷つてゐる特殊の資本主義的矛盾對立である。だから、私は、我國の資本主義が今や如何なる矛盾を內包するに至つたかを調べた。一國の資本主義における高度の資本集積、獨占と金融資本の成立、資本輸出への促迫、——それらは、他の諸事態と共に一國資本主義の發展と共に展開する諸矛盾が如何なるものとなつたかを敎へる。更にまた、それらは、獨占的地位爭奪におけるその國の力が如何なるものとなつたかを敎へる。だから、私は、日本におけるそれらの狀態を調べた。

私が調べたのは、特定のインキ瓶の特殊の特質である。だが、曲藝師の意識には、私がそれを調べたことが、コップの定義をインキ瓶に當嵌めたもの丶如くに映ずる。讀者諸君は、玆で再び、今は早や古典的なる高橋氏の一節を想起されてよからう。

『氏（猪俣）は、「改造」六月號に於て、レーニンの云ふ帝國主義は、世界規模にのみ適用し得る尺度であつて、一國に適用し得る尺度ではないと云はれながら、他方に於て切りに苦しい言ひわけをなし、汗みどろになり乍ら、しかし、結局に於て、日本が帝國主義國であることを證明するには、やれ、生産の集積がどうの、獨占がどうの、資本の輸出がどうの、金融資本がどうのと、レーニンの擧げた（それも別に述べる如く錯覺してをられるが）資本主義最後の段階としての帝國主義の特徴を尺度にして測つてゐられるではないか。[1]』

見よ、特定のインキ瓶を指して、これはガラス製で、圓筒型だと述べることが、コップの特徴を尺度にして一物がインキ瓶であることを證明したことになるといふのだ！　だが、私は、さうした履違ひなり認問なりの餘地なからしめる爲めに、改造六月號の拙文に次の如く特筆明記して置いたのである。

『以上及び以下において明かにするところの、集積、獨占、金融資本等に關する我國の現狀は、それ自身直ちに帝國主義國としての日本の全特徴を示すものではない。示すかの如き見解を強いんとする高橋氏の誤謬こそは、私の反覆强調したところである。だが、それらの現狀の闡明は、日露戰爭以來の日本帝國主義の經濟的基礎に生じたところの最近の變化――しかも異常な變化と、從つてまた日本帝國主義そのものに生じた最近の變質の實相とを明かならしめる

1）改造八月號 54頁

に役立つであらう。詳しくは後段――』[2]

六、高橋氏は如何に屈服したか

(1) 氏の「駁論」の「實證的」部分の正體

私は、前稿「資本主義日本の帝國主義」において、我國における生産及び資本の集積、獨占、金融資本、及び資本輸出の現狀を述べる爲めに比較的多くの頁を費した。その理由の一つは、それらの狀態に關する高橋氏の論述が悉く虛構であつたからであり、虛構を摘發して眞相を明かにする必要があつたからである。高橋氏は、氏の駁論を二部に分かち、一半を方法に關する部分、一半を『實證』[1]に關する部分となし、後者は之を『左翼一派の駁論は何を曝露したか』と題して八月號『太陽』に發表された。太陽の論文は、即ち、我國の資本主義における集積、獨占、金融資本、資本輸出に關する事實を扱ふべき筈のものであり、氏の曩きに述べたる諸事實が虛構にあらざる所以を明かにして吾々の批判に答ふべき筈のものである。然るに、高橋氏は、その太陽の論文において、殆ど事實を扱つてをらない。氏は、事實を扱ふことが出來なかつたのである。何故か？　言ふまでもなく、吾々の批判が悉く正しかつたからであり、從つて氏はもはや事實をもつて爭ふことが出來ず、

1）改造八月號 51頁。太陽八月號 5頁
2）改造六月號 67頁。本書 129—30頁

事實に卽して吾々に答ふることは遂に不可能だつたからである。かくて、氏が、氏の駁論の『實證的』部分であると誇稱したものが、少しも實證的でないことは、事實によつて實證されてゐる。更にまた、僅かに事實を扱つた部分は、虛構に重ねるに虛構をもつてしたに過ぎない。

(2) 生産の集積に關する虛構

かくて、泥沼に陷沒したプチ・帝國主義者の眞面目は、彼れの「實證」によつて最も如實にうかがはれる。

先づ、生産及び資本の集積を見よう。

高橋氏は、曩きには、『我が生産の集積……は、なるほど過去に比せば著しく進んでゐるが、しかし、之を英米獨等のそれに比較すれば殆ど云ふに足らないと云つてよい』[1] と斷定してゐた。そして資本の集積は全く之を隱匿してゐた。

私は、前稿「資本主義日本の帝國主義」において、我國における生産及び資本の集積を、英獨のそれと比較し、『殆んど云ふに足らない』と稱してゐる高橋氏の虛構をあばいた。[2]

しかるに高橋氏は、太陽所載の「實證的」駁論において、資本の集積には一言も觸れ得なかつた。卽ち、氏は、我國における資本の集積は、英獨のそれに比して決して「言ふに足らない」もの

1) 太陽四月號 10頁 著書 53—4頁
2) 改造六月號 66—7頁。本書 127—30頁

ではないことを承認するの餘儀なきに至つたものである。だが、誤謬や虛構を自認することは、泥沼のプチ・帝國主義者の能くし得る所ではない。彼れのなし得た精一杯は、生産集積の問題の只だの一斷面を捉えて試みた虛構の累積である。彼れが拾ひあげて仰々しく振りかざしたのは、私が過小工場勞働者の數に就て述べた次の如き言葉である。たゞ、それだけである。卽ち氏は曰ふ——

『猪俣氏は極めて大膽に、如何にも大確信あるかの如く斷言せられる、「高橋氏は、日本には五人以下の小工場が多いと言はれる。（私の原句は、「日本現時の生産に於ては、常時五人以下の職工を使用する部面が尙ほ尠からずある」とあるを猪俣氏が斯く要約せられたものである。）いかにもさうした工場の數は多い。しかし一工場の勞働者數が五人以下といふ少數である以上、かゝる過小工場勞働者の總數は知れたもので、之れを加算しても前揭の百分比に幾何の變化を生じないことは、必要あれば私の何時でも立證し得る所である」と。だが、氏は、私を反駁するに最も有効なるべき（！）その立證を「必要あれば私の何時でも立證し得る所である」と見榮を切られただけで、そのまゝ、そつと逃げられてゐる。然るに、いま大正九年の國勢調査に基き概算すると、氏が我が勞働者（——讀者よ、此の「勞働者」が高橋氏の手品の種になるのだ——）の六〇%は百人以上を使用する工場にあると示され、五人以下のそれを入れるも「幾何の變化も生じない」と斷言される、その百分比は、五人以上の工場以外の者までも加算すると、實にそ

の半數の三〇%一四（!!）となるものである――（詳しくは八月の太陽誌上で示す）[3]』

では、その六〇%と、三〇%との「素晴しい」狂ひを、高橋氏は如何なる手續きによつて算出して太陽誌上で示してゐるか？

高橋氏は曰ふ、――『いま私は、猪俣氏の立證をペンペンと待つわけに行かない。……そこで、私は先づ私の調査によつて、五人以下の工場までも算入された我國の生産集積狀態を玆にお目にかける。』だが、『日本の工場統計に於ては、工業全體に從事する勞働者數が分つてゐない。……現在の日本の統計に由つて、日本の工業勞働者總計を知るには、大正九年の國勢調査を基礎として、內閣統計局の概算した「抽出法に依る第一回國勢調査結果の概觀」に由る外に資料が無い。……而して、右の調査に由ると、工業勞務者（――讀者よ、勞務者である！）の總數は三百六十三萬人である。いま、この數を以て、不完全ながら、（――讀者よ、此の「不完全ながら」にゴマ化され給ふな）、我國全體の工業勞働者數（――見よ、今度は、勞働者だ！）と見做』さうと言ふのである。

かくして高橋氏は先づ、三百六十三萬人の工業勞働者なるものを創作した。何を工業勞働者と呼ぶかは、高橋氏の勝手でもあらう。だが、讀者諸君よ、私が問題にしたのは、工場勞働者であつた。吾々の言ふ工場勞働者とは賃銀勞働者のことであり、六〇%といふ百分比は、さうした工場勞働者のみについての百分比であつた　五人以上を使用する工場にある勞働者總數の六〇%は、使用

3）改造八月號 61―2頁

職工百人以上の大工場にある。『いかにも（五人以下を雇ふ過小）工場の數は多い。しかし……かゝる過小工場勞働者の總數は知れたもので、之れを加算しても前掲の百分比に幾何の變化も生じない』と述べてゐることによつて、私が何を問題にしてゐたかは、此上もなく明瞭ではないか。

しかるに、六〇%の百分比を三〇%に訂正して猪俣に一泡吹かせようとたくらんだ高橋氏は、先づ、三百六十三萬人の工業勞働者を持出して來た。では、大正十二年において職工五人以上を使用する工場にある勞働者の總數は何程であつたか？　「工場總計」によると、約百八十萬人である。高橋氏は今や、此の百八十萬人を、「三百六十三萬人」から引去つた殘りの百八十萬人ほどを、使用職工五人以下の工場にあらしめようとするのだ。なるほど、我國の工場勞働者總數の約半分が過小工場にあるといふのが本當なら、問題の六〇%が高橋氏の望み通り三〇%に減少することに何の不思議もない。不思議は、四人乃至一人といふ少數を雇ふ過小工場に勞働する賃銀勞働者の總數が百八十萬人といふ驚嘆すべき多數にのぼることである。手品師は、常に、不思議を觀せる。

大正十二年において、使用職工五人以上の工場の總數は五萬に足らなかつた。然るに、もし高橋氏が主張する如く、使用職工四人、三人、二人乃至一人といふ過小工場にある工場勞働者の數がすべて百八十萬人もあるのだとすると、一工場平均三人平均と見ても、日本には約六十萬の過小工場があることゝなる。だが、讀者諸君、そんな馬鹿な話があらうか。

手品の種は、「三百六十三萬人の工業勞「働」者」である。此の三百六十三萬人は、高橋氏自身が書いてゐる通り、「抽出方法に依る第一回國勢調査結果の概觀」に於て工業勞「務」者として計上されてゐる數字である。だが、玆に工業勞「務」者なるものは、もちろん、工場勞働者、賃銀勞働者のみではないのだ。その數字の中には、多數の手工業的雇主（例へば謂はゆる親方）が入つてをり、親父を助けて仕事する更に多數の女房子供や徒弟が入つてゐる。更にまた、手機、綿くり、等、等をやる家內工業者の大群が入つてゐる。おそらくはまた、いかけやさん、とぎやさん、はいれやさんも入つてゐる。わが親愛な高橋氏は、これらすべてを、工場賃銀勞働者と一緒にして之れを工業勞働者と名づけ、總數三百六十三萬人を計上し、さて、見給へ、使用職工百人以上の工場にある勞働者は、總數の六〇%どころか、たつた三〇%ではないかと呼號する。そして、總數の六〇%が大工場にあるなどと言ふのは、『生產集積狀態に對するドンキホーテ的認識』[4]だと『見榮を切る。』

高橋氏の圖太さは、それだけでない。獨立手工業者とその子女や徒弟、家內工業者やいかけやさんの類ひが大部分を占める百八十萬人の「勞働者」――統計局の報告にあつては「勞務者」――を、高橋氏は惡るがれもせずに賃銀勞働者として扱つてゐるのだ。如何にして？

氏は、日本を米國と比較すべく、米國の工業勞働者總數として、九百九萬六千人といふ數字をとる。此の九百餘萬人の勞働者は、一人殘らず Wage Earner[5] である。賃銀勞働者である。しかるに

4）太陽八月號 5頁
5）太陽八月號 8頁。9頁

高橋氏は、日本の數字を、此の『米國（の數字）と同じ基礎にするため』[6]だと言つて、例の工業勞「務」者三百六十三萬人をとる!! そして、此の全然異なる比較の基礎の上に立つて氏は揚言するのだ、――『いま若し、百人以上全部を合計すると、（註、使用勞働者百人以上の工場にある勞働者の總數を見ると、それは）、米國においては全體の實に七割〇九厘（七〇%餘）の大多數を占めるに對し、日本はその半數にも足らぬ三割〇四厘（三〇%餘）に過ぎない！ 無論、右は一の概數、一の大勢觀に過ぎないが、之れに由つてその大體の位地（！）を伺ふに充分であらう。』[7] 讀者諸君、まことに『充分』ではないか、――高橋氏の虛構の『位地を伺ふ』のには。

野呂氏及び私が、高橋氏の『集積の隱匿』を批判するに當つて問題にしたのは工場賃銀勞働者の集中狀態であつた。別言すれば、米國の九百萬人といふ數字にあらはれてゐる賃銀勞働者、それと同種の賃銀勞働者の我國における總數のうち、大工場や巨大工場に集中されてゐる者の割合はどれほどか、――それを問題にしたのである。同種のものを比較しなければ比較にならない。

Wage Earner（賃銀勞働者）は、言ふまでもなく、手工業者や徒弟や家內工業者ではない。かゝる者は皆な、三百六十三萬人の工業勞「務」者のうちから引去られねばならぬ。日本には、かゝる勞「務」者が非常に多い。眞綿をつくる「工業戶數」だけでも二十五萬戶を算する。その大部分では家內工業として行はれてゐる。機を織る戶數は二十六萬七千戶餘と算せられる。その過半においては

6）同上 8頁
7）太陽八月號 4頁

家内工業として行はれてゐる。更に、疊表をつくる戸數が八萬七千餘、和紙が三萬四千戸餘、――これらの大部分にあつては、家内工業乃至は手工業として行はれてゐる。以上の合計だけでも、六十四萬戸ほどになる。そのうちの五十萬戸をとり、一戸平均二人の勞「務」者があると見れば百萬人、三人と見れば百五十萬人の家内工業乃至手工業的勞務者があることになる。その他、數十種の家内工業及び手工業に從事者はどれ程であるか、正確なことはわからないが、驚くべき多數にのぼることは疑ひない。

問題は、かうであつた。――工業勞「務」者總數三百六十萬人のうち、約百七十萬人は、使用職工五人以上の工場にある賃銀勞働者と見て大過ない。殘る二百萬人ほどのうち、どれほどが賃銀勞働者であり、どれほどが賃銀勞働者でないか？　家内工業者及び手工業者の數に關する右の觀察から推すと、かゝる勞務者は百五六十萬人を下らないと見られる。之れに加ふるにまた、いかけやさん、とぎやさんの類ひがある。

すると、四人乃至一人の賃銀勞働者を雇傭する過小工場にある工場賃銀勞働者の總數は、二三十萬人に過ぎないといふことになる。此の概算數は、他の方面からの推定によつて、大した間違ひはないことが知れる。いま、過小工場にある賃銀勞働者を一工場平均三人と見るならば、過小工場の總數は十萬乃至十二三萬になる。過小工場即ち雇傭職工四人乃至一人の工場の總數をその邊に推算することは、過大に過ぎても決して過少ではない。何故なら、雇傭職工五人以上の工場の總數は、四萬七千で、うち五人乃至九人の小工場の總數は二萬三千に過ぎないのだから。――周知の如く、賃銀勞働者を雇ふ工場としては、四人以下といふやうな過小な工場は、機業の場合の外にすれば、概して「引合はない」とされてゐる。

では、過小工場にある賃銀勞働者の總數を二十萬乃至三十萬と見積る時は、之れを加算した賃銀勞働者總數二百萬人乃至二百十萬人のうち、大工場にある者の割合はどれほどになるか？

（大正十二年）

		雇傭勞働者五百人以上の工場の者	雇傭勞働者百人以上の工場の者	雇傭勞働者五十人以上の工場の者
在工場賃銀勞働者總數	二、〇〇〇千人	六八五千人	一、〇五三	一、二二一
百分比		三四％	五二％	六一％

今や、過小工場勞働者を除いた場合の百分比が、かゝる勞働者を加へた爲めに『幾何の變化』を來たせるかを知ることが出來る。

	五百人以上	百人以上	五十人以上
除いた場合（即ち私が前稿に示したもの）	三八％	六〇％	七〇％
加へた場合	三四％	五二％	六一％

だから私は、前稿において言つたのである、――『幾何の變化も生じない』と。

だが、右は大正十二年の數字であつて、その後の五年間における集中は、更に著しく進んでゐることはもちろんである。最近一二年間の急速なる集中化は周知のことである。過ぐる大正十年、十一年、十二年の三年間においてさへも、次の如くに進んでゐた。

	十年	十一年	十二年
大工場（百人以上）に在る勞働者の百分比（過小工場を除く）	五四％	五九％	六〇％

が、また、最近における工場勞働者の集中狀態と雖も、まだ米國のそれに及ばないことは言ふまでもない。米國は、周知の理由によつて、かゝる集中が寧ろ異例的に進んでゐる國である。それと日本とを比較するのは無意味に近い。だから、私は、戰前のドイツと比較しておいた。けだし、問題は、勞働者の集中を一般的に論定することにあつたのではなく、我國における生産の集積は獨占を生ぜしめる程度にまで進んでゐるか否かを知る指標の一として工場勞働者の集中狀態を調べることにあつたのである。先進國との比較も、此の目的に卽してなされねばならぬ。そして、十分に獨占の發達してゐた戰前のドイツにあつては、雇傭勞働者五十人以上の工場にある勞働者の割合は、大正十二年の日本におけるそれよりも寧ろ少なかつたのである。

もちろん、工場生産の集積狀態は、一般に、工場勞働者の集中狀態が示すよりも更に甚しい割合になつてゐる。大工場は大工場ほど、勞働者一人當りの生産が多くなるから。また、もちろん、資本の集積は、一般的に、生産の集積よりも更に甚しく、資本の支配の集中は、資本の集中よりも更に甚しい。獨占の基礎としての集積乃至集中は、從つて、資本のそれに最もよく現はれる。然るに、その資本の集積乃至集中こそは、實に、高橋氏の「駁論」が遂に一言も觸れ得なかつたところではないか。

(3) 獨占、金融資本、資本輸出について

我國において發展せる獨占、金融資本、及び資本輸出の狀態なりとして高橋氏が曩きに述べたる諸事實及び諸斷定は、吾々が批判し指摘した通り、悉く虛構であつたこと、――それは今や、氏の「駁論」によつて、確定的に立證された。

氏は、獨占に關しては、生産の集積についてと同樣、英米獨に比すれば殆んど云ふに足らないといふ意見であつた。[1] そして、それは、言ふまでもなく、何一つ事實の基礎を有せざる獨斷に過ぎなかつた。

吾々はそれに對して、(一) 獨占的地位を有する二樣の大資本が、我國の經濟生活にとつて決定

1) 太陽四月號 10頁。著書 53―4頁

的意義を有ち來り、(二) 重要産業の各部門においても、競爭の自由ではなしに、競爭の制限乃至廢止が、原則として要求され、承認されてゐること、かくして獨占の支配が成立しつゝあることを、具體的事實をもつて示して置いた。[2]

しかるに、高橋氏は、「駁論」の「實證的」部分において、吾々の下せる斷案を事實に基いて批判する代りに、如何に憐れな辯解をしたか。曰く、氏は曩きに『或る點まで獨占化、集積の行はれてゐるといふことを少しも否定せんとするものでない』と述べておいたと。では、いつたい、如何なる點までそれが行はれてゐるといふのか？　氏はまた、薄茂人氏が我國の『カルテル』の弱點に就いて述べた一節を引用して空ラ威張りの材料に使つてゐる。では、それらの弱點だけが、何故に、我國資本主義がその特殊事情の下に獨占の段階に入込めることの反證になるといふのか？

金融資本に就ては、氏は曩に、『銀行資本が産業資本化した高は、(それは大體に銀行の株券所有高以外にはない筈である)、總計約百十三億の內、三億圓餘にして、即ち百圓につき僅々約三圓の割合にしかなつてゐない!!』[3] といふ、破天荒な意見であつた。

吾々は、それに對し、我國において特殊の發達を遂げつゝある金融資本の諸形態を明かにし、『世界資本主義の一環としての日本資本主義の特殊の發展過程における、現下の全事態の分析において、その本質に即して金融資本を見るか、それともブルジョアジーと共にたゞ現象の表層に彷徨

2) 改造六月號 69—71頁。本書 134—7頁
3) 太陽四月號 12頁。著書 57—8頁

するか——二者擇一の自由(と云つて置く)』[4] を、高橋氏に與へて置いた。

しかるに今や氏の「實證的」駁論を讀む時、誰れが此の問題に關する「實證的」な何物かをそれに見出し得るといふのか！

最後に資本輸出については、氏は曩きには、『我國は資本輸出國どころか、逆にその輸入國である』と斷定し、レーニンが明治時代の日本について述べてゐる言葉の一節を引用し、『少くとも日本が今日(！)、資本の輸出國でなく逆に輸入國であることは、レーニン自ら之を明言してゐる』といふ、正氣の沙汰でないことを口走つてゐた。吾々はそれに對し、吾々にとつての問題は、『わが日本の帝國主義の觀點からの資本輸出』であり、從つて、氏が植民地への資本輸出を、殆ど無視せんとしてゐることの救ふべからざる誤謬を指摘し、[5] 且つ戰後恐慌以來展開せる深大なる諸矛盾の故に、今や如何に資本輸出への促迫が强まり、如何にそれが、氏の主張と正反對に、日本帝國主義の新段階における重要要因となりつゝあるかを强調して置いた。[6] そして、これらの批判に對してもまた高橋氏は正に沈默そのものの姿である。

しからば、高橋氏は、何を長々と實證的(！)に駁論せんとしたのであつたか？　猪俣は『帝國主義的獨占』を知らず、『帝國主義の特徵としての金融資本』を知らず、そしてまた帝國主義的資本輸出を知らない、——たゞそれだけを、漫罵と共に述べ立てたまで。

4) 改造六月號 69頁。本書 130—4頁
5) 改造六月號 71—2頁。本書 137—40頁
6) 同上 80頁。本書 156—7頁

では、氏の謂はゆる「帝國主義的獨占」とは何か。世界的體系としての帝國主義の特徴としての獨占のことである！　氏は、かゝる獨占についてレーニンが數へた四つの特質を麗々と並べ、さうした四特徴を具備した獨占が日本にはないと叫んでゐる。――もしもそんな獨占が何處かの一國に見付かつたらお慰み、――氏よ、『一つお示しを願ひ度い。』

氏が、「帝國主義の特徴としての金融資本」といひ、「帝國主義的資本輸出」といふ時の「帝國主義」もまたもちろん世界的體系としての帝國主義である。その意味の帝國主義を特徴づける金融資本や資本輸出は、すくなくとも、典型的な金融資本であり、資本輸出である。そうしたもの〻有無によつて、一國が帝國主義國か否かが定まるのでないことは、繰り返し述べた。更にまた、極めて特殊の發達をなせる資本主義日本において、典型的な金融資本や資本輸出があるかないかといふやうな事は、餘程の閑人でなければ初めから問題にしない事である。日本帝國主義の現段階の分析究明にあつては、如何なる資本輸出があり、如何なる金融資本が發展しつゝあるか、――その具體的特殊性のみが問題となる。日本には典型的な金融資本がないではないか、といふ高橋氏の反問は、眞の爭點の回避としての外には爪垢ほどの意義もない。高橋氏が、レーニンの小冊子一冊をさへ讀みこなし得ないことは、氏の「駁論」の馬鹿々々しさによつて、遺憾ながら遂に「實證」されてしまつた。

更に、吾々は氏に問ふであらう。――氏よ、これこそはあなたが答へねばならぬ問題のアルファでもありオメガでもある――、我が日本には典型的な金融資本や資本輸出がないといふことによつて、何故に日本は「プチ・帝國主義國」であり、「被帝國主義國」の仲間であらねばならぬのか?!だが、これに對しては、氏は「逆立しても」答へることは出來ない。何故といつて、「プチ・帝國主義國」とは、それ自身、一箇のノンセンスであるのだから。私は、いよ〳〵、此の奇怪極まる一範疇を批判しつくすべき機會に達した。だが、それに先立つて、一應、氏の日露戰爭論に敬意を表するであらう。

七、日露戰爭の問題

(1)　それは帝國主義戰爭であつた

日露戰爭が帝國主義戰爭であるといふのは、私の創見でも何でもない。それはレーニンが明白に言つてゐることである。しかし私がその見解をとるのは、レーニンがさう言つてゐるからではない。レーニンの見解が正しいからである。それはまた、誰もが認てゐることである。帝國主義戰爭とは、手短かに言へば、帝國主義のエポックにおいて資本の獨占的搾取の爲めに戰ふ資本主義國の

戰爭に外ならない。從つて、日露戰爭以前のボーア戰爭、米西戰爭もまた帝國主義戰爭である。帝國主義のエポックにあつては、資本の獨占的搾取の爲めの戰爭が、『ブルジョア的秩序の存續乃至發展の爲めの不可缺手段となる。』此の事態の根柢に作用しつゝある力は何か、——その力を、最も純粹な姿において認證し得んが爲め、暫く一切の要素を度外視し、考察の範圍を資本制生產の最も本質的な發展傾向と、それに伴ふ內在矛盾の展開とに局限したる理論的研究は、私が「帝國主義の理論と沒落の過程」[1]において展開したところのものである。

それはとにかく、レーニンは言つた、

『帝國主義は、資本主義の最高段階として、亞米利加と歐羅巴とにおいて、また次いで亞細亞においても、一八八九年から一九一四年に到る間に、十分に成熟するに至つた。米西戰爭（一八九八年）、ボーア戰爭（一九〇〇——一九〇二年）、日露戰爭（一九〇四——一九〇五年）、及び歐羅巴における一九〇〇年の恐慌、これらが、世界歷史の新時代の最重要な歷史的道標である。』[2]

また、

『十九世紀の後三分の一は、新しき帝國主義のエポックへの過渡をなした。今や、獨占の用益者は、一個の强大國の金融資本ではなく、二三の極く少數の强大國の金融資本である。（日本とロシアにおいては、近代的金融資本の獨占は、兵力の獨占や尨大な領土の獨占や又た支那等の外國民を掠奪する特殊便宜の獨占によつて、一部分は補充され、一部分は置代へられてゐる。[3]）』

1) 即ち本書の第二の論文
2) レーニン選集 327頁

だが、高橋氏によると、日露戰爭は「國民戰爭」であつて決して帝國主義戰爭ではない。如何なる理由によつてか？　氏は曰ふ——

『いかにも、日本は朝鮮、臺灣、南滿洲、といつた植民地を有してゐる。が、この××は必ずしも（？）、今日左翼の云ふ所の「帝國主義」（？）を意味しない。何となれば（猪俣氏等と共にレーニンの帝國主義を祖述してゐる）パヴロウキツチ氏は、「ヨーロッパにおける資本主義發達の最初の段階は、國民戰爭を以てその特徵とした。國民的大國家——生產力が更に發達し、資本主義が益々生長するために充分な廣さと餘裕とを與へ得る丈けの輪廓を有する巨大な國家形態——の形成こそ、この國民戰爭の目的であり、結果であつた」と謂ひ、而して夫のアルサス、ローレンを獨逸が獲つた普佛戰爭（一八七一年）もその國民戰爭であるとしてゐる。』で、パヴロウキツチが一八七一年の普佛戰爭について言つてゐることが、どうして一九〇五年の日露戰爭に「當嵌」まるのか、その理由は、賢明なる高橋氏からは全く聞くことが出來ない。が、とにかくパヴロウキツチの言つてゐること自體は、「祖述者」だけに間違つてはゐない。しかしレー

3) レーニン選集 336頁

ニンによれば、その普佛戰爭を最後として國民戰爭の時代は終り、爾後の三十年間は帝國主義の時代への過渡をなし、十九世紀末——二十世紀初頭からは帝國主義と帝國主義戰爭の時代が始まる。だが、高橋先生はそんなことにはお構ひなく、いきなり自分の意見の開陳に移られる、實に、創意者の權威と獨斷とをもつて——。(その點では、氏の「駁論」においても、その前の論文における と全く同樣である。)

『然るに、日本の日清、日露(一九〇五年)、兩戰爭、並びに之につぐ朝鮮の併合(一九一〇年)等は、全く、日本自身の獨立のため(!)の戰爭であり、日本國家が、當時に於ける歐米の併合(!)から免かれて、獨立國(!)としての鞏固な「國家統一」(!)を期せんが爲めの努力であつた。……要するに、日露戰爭までに於ける日本の領土的侵略は、ビスマルクがアルサス、ローレンを佛蘭西から奪取したと同じ意味に於ける「國家統一運動」であつて、今日云ふ所の帝國主義運動(!)の範疇に入るべきものではない。[4]』(尙ほ、高橋氏は、此の引用文では『……努力であつた。……要するに、』といふ風に、氏が曩きに言つたことの中途を除いて自ら引用してゐるが、その除かれた部分には、もと、次の如き卓見が述べられてあつたものである——『否、歐洲戰爭中に於ける日本のシベリヤ出征すらも、この立場から云へば、帝國主義的色彩よりも、寧ろ、露國の復讐戰(!)に備へんとした(それは見當外れではあつたけれども)國家統一的色彩(!)の方が大であつたと言ひ得る。[5]』)

4) 改造八月號、62頁。

即ち、高橋氏によれば、或る不明な理由によつて、一九〇五年の日露戰爭は日本の獨立の爲め、國家の統一を期せんが爲めの戰爭であり、最も典型的な帝國主義戰爭であるところの世界大戰に際して日本がシベリヤに出征したことは、「見當外れの」國家統一運動の現はれであるといふ。ではもちろん、あの有名な二十一ケ條の對支要求なども、支那の復讐戰に備へんとした見當外づれの國家統一政策であるのでもあらう。吾々「祖述者」は、論理と事實とを全く超越したドンキホーテ式、否な天才的な高橋氏の頭には到底抗することは出來ない。吾々はたか〳〵、「國家の獨立」、「國家の統一」なる觀念を、高橋氏に倣つて例の「相對的意味」に解することにでも依り、辛うじて氏の卓說の一端をうかゞひ得るのみである。

閑話休題、改めて言ふまでもなく日露戰爭は、如何なる意味においても「國民戰爭」ではない。理由は——

(一) 一八七一年の普佛戰爭は、マルクスの謂はゆる「國民的統一」を實現するに役立つた。(祖述者でない高橋氏は、それを「國家の統一」ともぢつてゐる)。如何なる點で役立つたか? フランスに對する勝利は、プロシアに、獨逸聯邦の盟主として一箇の近代的國民國家(ナショナルステート)、——統一的な資本主義國家——建設の「覇業」を遂行せしむる機會を供したからである。そして新國家の成立は、「國

5) 太陽四月號 7頁。著書 48頁

民的統一」の實現を意味した。それまで封建的な諸王候の支配下に分裂してゐた同一民族が、今や一個の主權の下に統一されるに至つたのだから。「國民的統一」とは卽ちそれであつて、アルサス・ローレンの併合のことではない。後者は、朝鮮の併合と共に、高橋氏のプチ・帝國主義者的イデオロギーにおいてのみ、「國家の統一」を意味し得る。

（二）日本の「國民的統一」は、西南戰爭以後、完全に實現されてゐた。日露戰爭は、國民的統一の三十年後に起つた。

（三）日露戰爭當時の日本は、あらゆる意味において政治的獨立を有する國家であつた。「不平等條約」さへが、日淸戰爭後撤廢されてゐた。

（四）日本の資本主義的發展は、日露戰爭前に既に、生產力に對して國內市場が狹隘となる段階に對し、國內の資本主義的發達は、資本の海外發展に依存し始めてゐた。

（五）明治三十八年までに、日本の半官的金融資本は朝鮮における鐵道——京仁、京釜、京義、馬山浦の四大幹線を敷設してゐた。

（六）それまでに日本は、亞細亞において、兵力における獨占的地位を確立してゐた。

（七）日露戰爭における爭奪の的たりし朝鮮、南滿洲、等は、資本の獨占的搾取域として爭奪された。同時にそれらは、支那への進出の足だまりとしての軍事上及び經濟上の重要性の故に爭奪された。更にまた直接の競鬪者たるロシアの、亞細亞における帝國主義的地位に、徹底的打擊を加へんが爲めに爭はれた。

（八）國內政治的には、日露戰爭前後において既に、プロレタリア運動と、ブルジョア民主主義運動とが擡頭し生長すべきほどの段階にまで、我國の資本主義は發達してゐた。だが、それらの運動への傾向は、恰も當時において決定的なものとなつたところの帝國主義への傾向と交流し、そこにブルジョアジーの反動化が生じ、無產階級運動の彈壓が奏効した。（序でながら、現今の反動的傾向は、新らたなる經濟的基礎と、新らたなる國際的對立の基礎の上における、新らたなる帝國主義的反動である。注意すべきは、現下のブルジョアジーは、反動化しながらも、一面では無產階級其他に對し、政治上經濟上に、やゝ顯著なる「讓步」をし乍らも、尙ほ十分に支配し得るだけの實力を獲得してゐること之れである）。

かくして、日露戰爭は、國民戰爭ではなく、帝國主義戰爭である。だが、——これも又た改めて言ふ迄もないことだが——日露戰爭は、それに先立つボーア戰爭や米西戰爭と共に、未だ決して典型的な帝國主義戰爭ではなかつた。帝國主義の時代は既に成立してはゐたが、あの戰爭は、交戰國が僅か二ケ國に過ぎず、そのいづれもが金融資本主義國でなく、加ふるに帝國主義的支配の中心に起つたものではなかつた。だが、それは東洋における帝國主義を成熟に導き入れたものとして、他

の二戰爭と共に世界帝國主義の成熟過程における『最重要な歴史的道標』をなした。十分に成熟した帝國主義の段階にのみ起り得る典型的な帝國主義戰爭を、資本主義世界は一九一七年に迎へた。

因に、高橋氏はかうも言つてゐる、

『氏(猪俣)は先づ、『藪蛇の恐れでもあるかのやうに』(此の言も、氏(猪俣)が私に見當違ひにも下さつたものであるから、いま氏の必要に際して返上致す)、日清戰爭が果して帝國主義戰爭であつたか否かに對して、(而して××が帝國主義戰爭の獲物であつたか否かに對して)、沈默を守られる。[6]』

だが、私は既に、氏の駁論と同月に出た「社會科學」八月號の拙稿において言つてゐた——

『一九〇五年の日露戰爭を、一八九五年の日清戰爭と比較せよ。一八九五年にあつては、歐羅巴においてさへも帝國主義は未だ十分に成熟してはゐなかつた。當時の日本は、「不平等條約」の桎梏から解放されて國内の資本主義的發達を促進すべき立場にあつた。かくて日清戰爭は、既に帝國主義を萠芽的、志向的に包藏した戰爭であつたとは言へ、尙ほ——もちろん特殊の意味においてゞはあるが——「國民戰爭」に類する役割をもつとめた。[7]』

そして日清戰爭が、すでに、帝國主義を志向的、萠芽的に包藏した戰爭であつたことを示すものとしては、例へば、日本は早くも明治二十七年において朝鮮の脊髓ともいふべき京仁、京釜兩鐵道

6) 改造八月號 61頁
7) 本書 194—5頁

の敷設權を獲得した事實を指摘することが出來る。

(2) 「經濟的バック」

しかし、高橋氏にはまだいろ〳〵言ひ分がある。氏が、日露戰爭は「國家の統一」の爲め國民戰爭であると言はれるのに、

『然るに、氏(猪俣)に由ると、例の曖昧極るもの〻云ひ方で以つて(??)、所謂「帝國主義」のエポックに於て發生した戰爭は、皆、「帝國主義戰爭」であつて、(猪俣曰ふ、それが、獨占的地位爭奪の爲めの戰爭であることは、私の前稿で再三强調してあるではないか。「獨占的地位の爭奪」といふ小みだしまで附してある)[1]、その戰爭のバックをなす交戰國の經濟事情は問ふに及ばざるかの如くであり、(?! どうしてさう言へるのか)、又さうでもなくて(?)矢張り、その戰爭のバックをなすその國の經濟事情を重視せねばならない(もちろん!)かの如く、色々と當時の日本の經濟狀態を述べられてゐる。(そら御覽なさい)。が、云ふ迄もなく、(えらい!)、氏の帝國主義理論(前に引用した)——(たつた五行ほどの理論!)からは、その戰爭をなした經濟的バックが重大でなくてはならない。そこで、先づ、試みに氏が、當時の日本に「(新興資本主義國を)帝國主義國たらしむべき一切の條件は已にそこにあつた」と言はれ

1) 改造六月號、74頁以下。本書、144頁以下。

る、當時の日本の經濟事情を『瞥――(一瞥は眞に適語である！)して、氏の現實の把握が如何に破天荒に「正確」であるかを御目にかける。』

玆で高橋氏が讀者に御目にかけるのは、問題の日露戰爭より七ケ年ほど「バック」した明治三十一年十月の第三回農商工高等會議議事速記錄の一節であつて、謂ふ所の經濟事情とは、日露戰爭直前のものではなく、日清戰爭直後のそれである！　議事錄では、『時の總理大臣大隈重信氏』が、日清戰爭後、條約によつて、居留地は、蘇州、抗州などにまで擴がり、上海、天津、履門、漢口等には、日本の專屬居留地をさへ拵へたが、そこに家を建てる日本人がなく、「どうも草が多い」といふことは甚だ遺憾だと述べ、大いに帝國主義的進出發展を慫慂してゐる。すると、高橋氏が最も信頼されるところの「實業家の代表者が大部分」を占めた委員會は、政府に對し書面をもつて答申した。その一節に曰く、

『清國新開港に得たる我が居留地に本邦商人の店舗を開く者稀少なるは、今日の形勢に於て不得已の結果なり。抑々國力內に充實して諸業外に暢ぶ。是れ、自然の氣數にして、商業の海外に振ふこと亦此數に外ならず。今や內地の事業を振興するに外資を要する時に當り、多くの商人をして資本を外に用ひ、新に事業を興さしめんこと頗る難きを見る。……』[2] と

右の諸問答中において最も明白にあらはれてゐるのは、日本の資本主義的發達の指導者をもつて

2) 改造八月號 63頁

任じた藩閥政府が、日清戰爭直後においてすでに、如何に熱心に帝國主義的進出を意圖し、如何に巧妙にそれを××しつゝあつたか、そして資本家は資本家で、如何に熱心にそれに響應し、如何に巧妙にそれを自身の立場と結びつけつゝあつたか、の一事である。玆に資本家諸公が、婉曲な辭令をもつて主張してゐるのは、帝國主義的進出の先要條件としての新しき保護政策に移れ、といふことである。また、「多くの商人の資本を外に用ふる」ことの困難を說き、先づ比較的强大なる少數商人の資本を進出せしむべく、それに特權を與へよといつてゐるのである。そして、それらはみな、政府の意中と、完全に一致したものでなければならない。日本の資本主義的發展がそれを要求してゐたのだから。政府は、たゞ此の「實業家の代表が大部分」を占める委員會の答申によつて、「輿論」の支持を得たのである。――かやうに、當時の資本主義的發達がすでに强き海外發展の要求を孕んでゐたこと、そして戰爭の獲物として專屬居留地を得て割込んで行つたのは、進出の足だまりとしての外は全く無意味であつたこと、それらはたゞ、日清戰爭がすでに萠芽的、志向的に帝國主義を包藏せる戰爭であつたことを語るのみではないか。で、高橋氏はいつたい右の引用文から如何なる意義を引出せといふのか？　草ぼう〳〵の專屬居留地などを取つたのは、取つたのが「見當外れ」だとでもいふのか？　まさかさうではあるまい。新居留地が出來た、さあ出掛けろと「多くの商人」が雪崩れを打つて殺倒しなかつたのが、いけないといふのであらう。それ程の勢ひを、「經

濟的バック」にもたなければ帝國主義ではない（！）といふのであらう。だが、御安心あれ、吾々は、日清戰爭が直ちに帝國主義戰爭だといつてゐるのではないから。また、高橋氏は、保護主義の要求を體現してゐるところの、資本家の言葉、『抑々國力內に充實して諸業外に暢ぶ、是れ自然の氣數にして、商業の海外に振ふこと亦此數に外ならず』を、文字通りに解せといふのか？　即ち、「自由貿易」時代の經濟理論そのまゝに？　だが、資本主義世界は既に獨占の時代に入込んでゐたのである。しかし、氏が最も重要視してゐるのは、恐らく次の一句であらう――『今や內地の事業を振興するに外資を要するの時』。即ち見よ、帝國主義の「經濟的バック」は資本輸出であるのに、しかるに當時の資本家は逆に資本の輸入を說いてゐる。これは帝國主義でなく、「被帝國主義」である！　――形式論理仕掛けの頭は、かやうにいくらでも、凱歌をあげ得る。

だが、我が高橋氏が、理論と現實との『彼天荒に正確な把握』を、泥といつしよに投げつけるのは、下の一文においてゞある――

『翻つて、猪俣氏の御講義に由ると、（讀者よ、氏が今ま、私をして如何なる「帝國主義戰爭論」を「主張」せしめるかを括目して見られよ、帝國主義戰爭とは、資本主義の發達が國內に於て包み切れるだけは已に發達しつくして（！）、その發展存續の爲めには、何を措いても（！）外國に暢びねばならない資本主義の必然に根ざして戰ふことであらねばならぬ。斯くの如き帝國主義論を主張せられながら（！）、以上に引用せるが如き日清、日露（！）戰爭前後の日本の經濟事情に基き、（猪俣いふ、日清戰爭と日露戰爭とは同時に起つたのか？　あの絕大な過渡的重要性ある十ケ年の現實を、氏は、あの答申書一枚を把握するやうに把握したのか?!）、如何にして日露戰爭を帝國主義戰爭だとする氏の結論が引出し得られるであらうか。（然り、氏の如き奇術師でもなければ……）。この樣な藝當（！）は、恐らく氏及び其の一派の左翼理論家諸君のみ獨占する專賣であつて、他に之を求めることは出來ないのである。[3]』

第一、氏のあげた草ぼう〳〵の居留地は、日露戰爭前後の「經濟事情」を語るものではない。第二、氏が右において「私の帝國主義戰爭論」であるとして紹介してゐるものと、氏が右の文章數頁前に引用したところの、帝國主義戰爭について私の言つた言葉の一片の意味との間には、何の共通點もないものである。何時の間にか事實をすり換へ、文意をすり換へる手辯の惡るさは、高橋氏にあつては殆んど常習的である。

だが、もつと面白いのは、氏自身の帝國主義戰爭の把握（？）である。讀者諸君は面倒でも右の引用文中私が傍點を施した部分を今ま一度讀んで頂き度い。『資本主義の發達が國內に於て包み切れるだけは已に發達しつくす』とは、抑々どんな狀態か。また、そんな風に發達しつくした時に初めて、『その發展存續のためには、何を措いても（？）外國に暢びねばならない資本主義の必然』

3）改造八月號 63頁

が生ずるのか？　まことに呑氣で低能な資本主義ではある。が、間違つてゐたら失禮、――此の高橋氏の表現の原型こそは、氏の言葉のすぐ前に出てゐる所の、例の『國力內に充實して諸業外に暢ぶ』ではなかつたのか？　『國力內に充實し』を、『國內に於て包み切れるだけは發達しつくし』と誇張し、此の誇張をうけて更に、『諸業外に暢ぶ』を、『何を措いても外國に暢ひねばならない』と誇張すれば、そこに『必然』といふ感じだけはとにかく出る。たゞさうしただけの事ではないのか、――たゞ資本家代表の答申書と辻褄を合はせる爲めに?!

(3)　帝國主義戰爭と交戰國の經濟

いづれにせよ、そんな「帝國主義戰爭論」なるものは、高橋氏の洗錬されたジヤーナリスト的な頭の中以外には何處にも存在しない「論」である。吾々の把握する『資本主義の必然』は、全く反對に、國內の發達が極めて不十分なるにも拘らず、早くも資本は『何を措いても外國へ暢びねばならなくなる』ことにある。そこに帝國主義の必然性は根ざしてをり、そこにこそ帝國主義の、無產階級運動に對する至要の意義が見出されねばならぬ。國內の發達の不十分さは、如何なる帝國主義國においても、農業の不振と農民の窮乏化と無產者の增大並びに貧窮化とに、最も顯著に現れてゐる。資本主義の下にあつては、各國の經濟、各國產業の各部門は決して調和ある發達をなすことが出來ない。一國について言へば、與へられた諸事情の下において資本家的に最も有利な產業部門が、他の諸部門の發達を犧牲にして發達する。かゝる產業部門は、國內の發達が未だ極めて不十分なるにも拘らず、早くも海外に市場を求めねばならぬ。かくして、日淸戰爭後の日本はすでに輸出工業を有つてゐた。また資本主義生產の下にあつては、個々の資本は初めから大きさを異にし、力を異にし、發達と共にます〳〵大小强弱の差が著大になる。だから、國內にはまだ無數の小資本が存在し、雜多の幼弱產業が在るにも拘らず、强大な資本は早くも國外に進出せねばならぬ。更にまた、產業にせよ、資本にせよ、國內の市場や放資物が全く無くなつてから、のそ〳〵と海外へ出掛けるのではない。海外において、ヨリ有利な市場、ヨリ有利な放資の機會が得られさへすれば、何時でも遠慮なく頂戴する。否な、進んで奪取し、占領する。獨逸も、米國も、また日本も、一方ではまだ資本の輸入を必要としながら、他方では既に資本を輸出した。そして各國は爭つて海外に市場を獲得した。個々の國內の不十分なる發達と同時に生ずる市場關係及び資本關係の國際化は、資本主義の必然である。だが、此の國際化の過程は、競爭の過程、鬪爭の過程である。その進行は、各國產業の各部門の發展、各國の經濟の發展に調和を齎す代りに、ます〳〵不均衡を齎し、資本主義固有の諸矛盾を、世界的規模において擴大再生產して行く。かくして尖銳化し行く矛盾には、遂に、質的變化が生ずる、――獨占の時代の到來によつて。即ち、國際化した資本主義體系に、レーニン

の指摘する五特徴が生ずる時、世界資本主義は帝國主義の段階に達する。今や戰爭は、ブルジョア的秩序の存續發展の爲め、即ち矛盾の克服の爲めの不可缺手段となるのである。主要產業部門の獨占化、獨占的な產業資本の金融資本化は、多かれ少なかれ時を異にし、樣相を異にして、二三の最先進國に生じた。そして、かゝる獨占的產業乃至資本は、資本主義世界體系の全體に亙つて支配的な力をもつて來た。「獨占と金融資本の支配の確立」とはそれである。それは他の三つの特徴と共に、全體系の特徴である。だが、一國の主要產業に獨占の成立したことは、決して『資本主義の發達が國內に於いて包み切れるだけは已に發達しつくした』ことを意味さない。獨占の成立は、國內的には、各產業部門の發展の不均衡と、資本力の不平等と、資本＝勞働の對立とが極點に達することを意味する　それが、無產階級及び被壓迫大衆の政治的反抗の物質的基礎である。獨占の支配の確立と領土分割の結了は、國際的には、國家權力を結び目とする個々の資本主義の發展の不均衡と、從つて生ずる矛盾とが、各國にとつて今や致命的な苦痛となることを意味する。以前の海外發展は、資本主義の必然に根ざすとはいへ、比較的に平和に、衝突を避けて遂行され得た。しかるに今や衝突は不可避的であり、武力における優越が、發展の爲めの必須條件となる。しかも、既得の市場が、既得の生產力に對して絕對に狹隘である以上、武力は遂に用ひられねばならぬ。資本の勢力範圍、再分割の爲めに。

(4)　日露戰爭の必然

もう一度、日露戰爭に戻らう。高橋氏は、それが帝國主義戰爭か否かを決定するには、戰爭當時の交戰國の「經濟的バック」を見なければならぬと言はれる。吾々もそれに異存のあらう筈はない。ところで氏は、如何なる「經濟的バック」を見たか？　氏は、日露戰爭より一昔前の日淸戰爭の直後、日本の獲得した專屬居留地に草が茂つてゐたことを見た。日本が外資を必要としてゐたことを見た。それによつて、日本の「資本主義の發達が國內において包みきれるだけは已に發達しつくして」ゐたのではないことを立證した。たゞそれだけ！　これはまた、何といふ資本主義の見方であらう。しかも、氏が見ようと努めたのは、たか〳〵日本一國の資本主義の不完全な一斷面にすぎない。共產黨宣言を引用して資本主義の國際性を强調される氏よ、當時の日本は『單一孤立的な資本主義國』であつたのか。『私のプチ・帝國主義國論は、世界資本主義の一環としての日本の地位を指してゐるのである』と力味返へられる氏よ、當時の日本は、さうした一環ではなかつたのか。だが、正にこの資本主義世界體系の一構成部分としての日本の一九〇五年前後の「經濟的バック」こそは、プチ・帝國主義者の遂に見得ざる所である、――彼の眼は、「バック」にくつツいてゐる。全面を正視せよ、世界はすでに獨占の時代に入込んでゐた。

人がもし、高橋氏に向つて、日露戰爭が帝國主義戰爭であるのは、あの戰爭によつて日本は草ぼう〳〵の樺太、朝鮮、滿洲、蒙古、等を獲得したからこそであり、しかも金融資本主義の故にそれらを獲得したからこそである、と言つたならば、氏はびつくり仰天して飛び上るかも知れない。そしてその拍子にうまく憑きものが落ちるかも知れない。だが、事實はまさにさうである。

獨占の時代において支配的な資本形態は金融資本であり、獨占を主要特徴とする金融資本主義は支配的な生產關係である。金融資本は、獨占的搾取域の擴大の爲めに鬪爭する。その決定的な武器は、もはや安い價格ではない。「外交」であり、陸海軍である。既に、獨占が生存原理であり、獨占が相互の鬪爭目標である以上、獲得に價ひする物、獲物し得る物は、すべて他に先んじて獲得せねばならない。それは草だらけの專屬居留地であるかも知れぬ。何時掘るかわからない炭坑であるかも知れぬ。十呂盤のとれない鐵道であるかも知れぬ。それによつて直接に自分を强め得なくとも、敵を强めない爲めにそれを取り、しば〳〵敵を弱める爲めに取る。獲取物はまた多くの場合において、進出の足溜りであり、發展の根據地である。更にまた既に武力が此の鬪爭の決定的手段となつてゐる以上、獲取物の價値は言ふ迄もなく軍事的見地から評定される。例へば豆大の一孤島が幾度び國際的紛爭を捲起したことか。およそ此の獨占的地位爭奪のエポックにおいては、先んずることによつてのみ人を制し、先んぜざるは必然に滅びねばならぬ　金融資本主義は、支配的な生產關係

として、此の「鐵則」を創定し、傳播する。英、獨、佛、米、露の金融資本の東洋への進出は、日清戰爭前後から顯著になつた。戰勝の若き資本主義日本は遼東の還附を强制された。彼は如何にすべきか。帝國主義鬪爭に邁進して生きんか、退いて半植民地國とならんか、――日本は前者を撰び得た。而して日露戰爭を準備した。高橋氏が、日露戰爭は『日本國家が當時に於ける歐米の併合から免かれて……「國家の統一」を期せんが爲めの努力であつた』といふ時、氏は美事に氏の反動的な小ブルジョア意識を暴露する。氏の意識には、異民族を隷屬せしめることまでが「國家の統一」として映じてゐる。氏は、當時の日本經濟が引入れられてゐた世界的生產關係の本質を掴むことが出來ない。氏よ、あらゆる帝國主義國は、「併合から免れ」んが爲めに戰爭せねばならないのだ。

私はさきに、日露戰爭が帝國主義戰爭なることを明かにする爲めに、九つの理由をあげて置いた。今ま述べた「經濟的バック」――世界的なそれ――は、それらに追加さるべきものとして、恐らくは最も重要な理由の一をなすであらう。日本が明治二十七年十月に獲得した京仁、京釜兩鐵道の敷設權は、間もなく日本を國際的紛爭の渦中に投じ、京仁鐵道の利權は一時アメリカ金融資本の手にさへ歸した。金融資本は、「屈伸性に富む」資本であり、變容自在の資本である。典型的な金融資本が國內において發達するに先立つて、米國も、露國も、日本も、みな自國の資本を、對外的には金融資本として機能せしめた。それが既に支配的な資本形態となつてゐたからである。帝國主

義の全體系の特徴は、決してそのまゝ、その構成部分たる一帝國主義國の特徴となることは出來ない。だが、前者は後者を制約する。高橋氏は、全體と部分とを、その相關において把握することが出來ない。相關的なる兩者を、更に發展において把握することが出來ない。氏は、特殊をば普遍との關聯において把握することが出來ない。氏の意識には、中學生程度の公式主義と、空疎な形式論理と、チグハグの現象とが横行濶歩するのみである。

(5) 帝國主義國と植民地

高橋氏の思考は、單純そのものゝやうに、しかも、ガタ馬車のやうに泥を飛ばして疾走する。氏によると、帝國主義國か否かを決定するのに、レーニンの一定義を用ひれば「科學的」であり、さうせずに植民地を問題にすれば「通俗的」である。(「駁論」六〇頁、六二頁、)

『而して、私(高橋氏)の繰返し述べてゐる如く、問題の重點は、植民地を取つたか取らないかではなくて、その取るに至つた衝動そのもの、その經濟的バックそのものにあるのだ。氏(猪俣)は、氏自身の帝國主義について講義せられてゐる意味を解せられないで、小僧が御經でも讀むやうに、機械の如く論文の再生産をやつてゐられるらしい。……

單に植民地を有するといふことがその國の帝國主義國たることを少しも立證しないと云ふことと(! 何といふ嶄新な命題だ)を證明するには更に、氏(猪俣)が宗教的信仰をさへ持たれるかの如きレーニンの次の一句を玆に引用することが、氏等に對して最も効果があるであらう。

「……ホルトガルは獨立の主權國である。然し事實に於ては、スペイン繼承戰爭以來、二百年以上も、イギリスの保護國となつてゐる。』

然るにそのホルトガルは、次ぎの如く、その本國に比し領土に於て約二十倍近く人口に於て約一倍半の大植民地を有してゐる。試みに之を日本及その植民地と對比せよ。(プチ・帝國主義者は、ホルトガルとの比較上、日本が本國に比して如何に僅少の植民地しかを有たないかを肝に銘せよといふのだ。だが、我が親愛なる帝國主義者よ! なぜあなたは、植民地のみを比較し、その所有者を比較してはいけないのか? 一九〇五年の新興資本主義國日本は、ホルトガルの如き「保護國」であつたか? ホルトガルが植民地を得たのは何時か? 帝國主義のエポックにおいてゞあつたか?!) 而して、尙ほ植民地を『取つたか、取らぬかが』猪俣氏の「造詣深き國民經濟學」上問題となるならば、それは私に喰つてかゝられる勇氣(!)を持つて、氏の師事せられるレーニンに喰つてかゝられるがよい。(プチ・帝國主義者よ、何といつて喰つてかゝれといふのか?)。氏(猪俣)は死せるレーニンをして私に答へしめられるスバラシイ手腕(不幸にしてそれは全然見當外れであつたけれども)を有してゐられるのだから……。[1]』

1) 改造八月號 64頁。

かういつて、高橋氏は、ポルトガルの植民地の細目をあげ、おの〳〵の面積、人口の數字とその調査年次までを添えた詳細な統計を示してをられる。此の統計表を一見さへすれば、何人も日本がプチ・帝國主義國なることを無條件的に承認するであらう。特に日本人は無條件的に數字が好きであるから。

一の資本主義國が獨占的搾取の爲めに植民地を獲得したか、他國に侵入したか、――それは、その國が帝國主義國なることを決定する主要標準の一である。そしてその植民地や半植民地の被壓迫大衆と、本國のブルジョアジーとの對立が、如何なる發展段階にあるか――それが帝國主義國の無產階級運動にとつて最も重要な意義をもつ。氏が次ぎの如く言つた時、故意に此の標準を無視し、特に此の無產階級的意義をまやかそうとした氏の意圖は餘りにも見えすいてゐる――

『斯樣なわけで、日本が果して帝國主義國であるか否かは、單に日本が多少の領土を侵略してゐると云ふ點から見るわけに行かない。それは、更に別な標準から檢討するべきである。[2]』

右に對して野呂氏が、『何と云ふ詭辨！　何と云ふ血迷ひ！　何といふ遁辭だ！』と罵倒したのは、當然の當然であつた。

2) 太陽四月號 8頁。著書 49頁。更に改造八月號 65頁に再引用されてある。

八、「プチ・帝國主義國論」の本質

(1) 蛸的概念としてのプチ・帝國主義國

問題は未だ殘つてゐる。一番いゝものが殘つてゐる。即ち、高橋氏の謂はゆる『プチ・帝國主義國論の問題の所在』[1]。

吾々は前に言つた、――「プチ・帝國主義國」なる概念それ自體がノンセンスであると。ノンセンスは、高橋氏自らがプチ・帝國主義國に與へてゐる定義そのものに最も明白にあらはれてゐる。曰く、

『日本の資本主義は　之を國際的に見れば、なる程、帝國主義「的」であるかも知れないが

(1)、しかし、それは精々の所、大ブルジョアに對する小ブルジョアの如き帝國主義「的」國

(1) であつて、若しプチ・ブルジョアーと云ふ言葉に倣つて (1)、プチ・帝國主義國と云ふ分類が出來るならば、日本はそのプチ・帝國主義國の一つに過ぎない。[2]』

氏のすべての論文を通じて、此の外にプチ・帝國主義國の定義らしいものは何處にもない。そしてもちろんこれは、定義ではなく、比喩である。『大ブルジョアに對する小ブルジョアの如き帝國主

1) 改造八月號 65―68頁
2) 太陽四月號 8頁

義的「的」國』であるなどと言ふのは、『頭は猿で、尾は蛇の如き、虎「的」動物』であると言ふのと何處が違ふか？「プチ・帝國主義國」なるものは、何人も到底その特性を科學的に記述し得ないところの鵠のやうな存在である。それはたゞ、日和見主義者の妄想の中にのみ棲息し、現實とは全く無緣なものである。

帝國主義は、政治＝經濟的な概念である。科學的觀點からは、吾々は一國が植民地國乃至は半植地國であるか否かを、就中、その國の政治的獨立の有無によつて決定することが出來る。また、帝國主義のエポックにおいて、政治的獨立を有する資本主義國が、帝國主義の國か否かを決するのには、明確な標準がある。その國が、(一)强大なる陸海軍を擁するところの、獨占的地位の爭奪者であるか、(二)資本の獨占的搾取の爲めに外國を侵略してゐるか、即ち異民族を、(a)或は完全に隷屬せしめ、(b)或は半ば隷屬せしめてゐるか。此の標準に從ふ時、我が日本は、日清戰爭前後から帝國主義に轉向し、日露戰爭によつて帝國主義國としての自己を決定的に立證し、更に世界戰爭以來は、獨佛の衰退により、今や英米と直接的に對立抗爭するところの、世界の帝國主義强國である。この事實は、資本主義沒落期における至要の力學的要因たる半植民地國支那をめぐる三國の外交並びに最近の「軍縮會議」において、最も劇的に表現された。

しかるに高橋氏の「プチ・帝國主義國論」は、かゝる帝國主義日本をば、全くえたいの知れぬ存在と化す。即ち氏が、氏の「論」を如何に要約してゐるかを見よ。

『私のこゝに指摘したい點は、この小論全體を通じてさうである通りに、日本の資本主義は未だ漸く、プチ・帝國主義段階に達したか、達しないかの段階にまで漸く到達してゐるに過ぎないい、といふことである。[3]』

玆に、「プチ・帝國主義段階」とは、何のことか。前掲の定義（？）を「當嵌め」るなら、資本主義發展段階には、大ブルジョアーに對す小ブルジョアーの如き帝國主義「的」段階があり、日本の資本主義は漸くそれに達したやうでもあり達しないやうでもあるところの變な段階にまで漸く到達してゐるに過ぎない、といふことになるであらう。此の朦朧たる「段階」を捕捉し得るものは、鵠を捕捉し得る高橋氏以外にはあり得ない。たゞ、猿のやうで虎のやうでの筆法で行く時にのみ、日本資本主義は今ま、資本主義的發展の法則とは全く反對に、プロレタリア「的」段階から小ブルジョア「的」段階に達したか達しないかといふ、禪問答か謎かけのやうな感じが浮んで來るだけである。しかもその點こそは、高橋氏が、「この小論全體を通じて』指摘したい點であるといふのだ！

(2) 如何にして生れ出でたか？

だが、氏の全論文を精讀すると、氏の指摘し度い點だけはやゝ明瞭となる。即ち氏は曰ふ、

3) 太陽四月號 11 頁。著書 55頁。

『以上に由つて分る通り、之を食料及資源の獨占といふ立場から見れば、日本の如きは、プチ・帝國主義國にも値しないのである。』ではどんな國か？『この點から云ふ限り、日本は、全く被帝國主義國であつて、斷じて、帝國主義國ではない。[1]』

氏は更に曰ふ——

『斯樣のわけで、日本資本主義の國際的地位は、その販路から云ふも、全く、被帝國主義國の地位にあると云つてよい事情にある。』——では日本は、「被帝國主義國」とかいふものであるのか？　さうでもない。『尠くとも帝國主義國と云ふに値しないものである。[2]』——此の曖昧さを見よ。

然らば、その「被帝國主義國」とかいふ聞いこともないものは何か？

『斯樣な事情であるから、之を國際的に見る限り、日本は被搾取國であつて斷じて、搾取國ではない。（讀者よ、御記憶あれ　猪俣）。被獨占國（！）であつても決して「獨占國」ではない。被帝國主義國の仲間に入りこそすれ、決して、帝國主義的仲間（？）に這入る地位ではない。[3]』

即ち、日本は、搾取されてゐる國（！）であり、獨占されてゐる國（？）である。被帝國主義國とは、それである。そして、かやうに被帝國主義國であること、——それが玆では結論的に斷定されてあることを讀者は銘記して置かれ度い。だが、氏の論文全體の結語に當る部分に至ると、現在の

1）太陽四月號 30頁。著書 36頁
2）同上 31頁。著書 87—8頁
3）同上 32頁。著書 88—9頁

帝國主義日本は、再び捕捉すべからざる存在として現はれる。朦朧乎たる「プチ・帝國主義」として。

『以上、極めて粗笨ながら、私は、日本資本主義の帝國主義的地位について、一通り檢討したつもりである。而して、その檢討の結果得たる結論の重なるものをこゝに更に繰返すとかうであつた。日本資本主義の帝國主義的地位は、之を各種方面より伺ふに、未だ帝國主義としての段階（？）にまで到達してゐない。（將來もその望みは殆んど絶望である）。否、寧ろ反對に、被帝國主義國としての地位に屬する事實の方が多い位（？）である。（猪俣曰ふ、何といふ曖昧さだ。氏はまたかくして、資本主義的發展の特定段階に關する認識と、一國が搾取されてゐる國、「被帝國主義國」であるといふ認識、この全く別種のものを混淆し、同格化してゐるのだ！　次の一句をも注意して讀まれよ）。尠くとも、日本資本主義の帝國主義的地位は、プチ・帝國主義國（！）以上の何ものでもない。從つて、その階級的利害（?!）は、英米等の帝國主義國と一致する所よりも、却つて、支那、印度其他の被帝國主義國と一致する所の方が遙かに大である』[4]

以上の如く、動搖し、逡巡し、遲疑する思考の最後の表現として、『尠くとも、日本資本主義の帝國主義的地位は、大ブルジョアーに對する小ブルジョアーの如き帝國主義「的」國以上の何物でもない』といふけつたいなことを口走るに至つてゐる高橋氏の「論」から、吾々は何を看取し得る

4）同上33—4頁。著書 91—2頁

か？　氏の意識に向つて認識を迫るところの客觀的事實――現實――と、之れを拒否し、歪曲せんとする氏の意欲との間の闘爭これである。即ち、(一)氏の日和見主義者的意欲は、日本が帝國主義國なること――此の嚴然たる事實――を否定して、日本は支那や印度等の如き「被帝國主義國」であると主張せしめる。(二)しかも彼れは、日本がまさしく帝國主義國であるといふ事實、――この否定せんとしても到底否定し得ざる事實に面しては如何ともすることが出來ない、かくして彼れは、「プチ・帝國主義國」といふ蟷のやうな範疇をでつち上げねばならなかつた。

(3)　高橋氏の反擊は屈服の告白

高橋氏の「プチ・帝國主義國」論の全力點は、明かに、日本が支那や印度の如き「被搾取國」「被帝國主義國の仲間に入る」ことを立證するにあつた。氏は先づ、氏の論文の冒頭において氏は問題を提起して言つた。

『若しも、被帝國主義と帝國主義國との間に、無產階級運動の色彩に差がありとするならば、(而して後述する如くこの間には多大の差がある)、日本の無產階級運動は、果して帝國主義國としての立場に於て進むべきか、寧ろ被帝國主義國としての立場に於て進むべきか、……』

氏は、更に言つた。

『若しも日本の國際的地位が、我が左翼理論の盲信せるが如く、帝國主義階級の仲間ではなくて、寧ろ被帝國主義階級の仲間に入るべきものでありとするならば、我が左翼今日の戰陣は、この點に於て根本的に覆されることになるわけである。』

即ち、氏の希求する如く、夢想する如く、「左翼今日の戰陣が覆」へる爲めには、日本が、支那や印度のやうな「被帝國主義國」、即ち植民地國や半植民地國の「仲間」であることが立證されねばならぬ。それを立證してもつて日本の無產階級は英米佛と戰爭せねばならぬと主張すること――それこそが高橋氏の論文の中心目的なのであつた。更に、それを立證する爲めには「世界標準」によらねばならぬ、國際的に見ねばならぬ、私はさうしたのだと絕叫する高橋氏の金切聲は未だ讀者諸君の耳に殘つてゐるであらう。更にまた、高橋氏が、その世界標準に基づいて檢討したる日本は、國際的には明かに、「被帝國主義國」、植民地、半植民地國の仲間であると二度まで斷定してゐたことは、まだ讀者諸君の記憶に新しいであらう。されば こそ私は前稿において言つた――

『高橋氏の全意圖は、日本帝國を弱小國に、帝國民を被壓迫民族に仕立てあげつゝ、氏の最近の二論文をば、此の弱小國を愛せざるかの如き不屈きの「左翼」に對する挑戰狀たらしめようとするものである。[1]』と。

1)　改造六月號 6 頁。本書 119頁

しかるに高橋龜吉氏は、今や、此の言葉に向つて牙をむいて嚙みついて來る。即ち氏の「駁論」の第四點なる、『プチ・帝國主義國論の問題の所在』において言ふのだ。

『私のプチ・帝國主義國は、野呂氏が愛國的な憤激を以て叫ばれるやうに、「苟も三大强國の一として自他共に許す日本を指して植民地や植民地國だと云つたのでは無論ない。大ブルジョアーに對するプチ・ブルジョアーの如き位地にあると述べたものであること、現に猪俣氏の引用（改造六一頁）せられてゐる通りである。然るに、「これほど公正を重んずる私」と自稱せられる猪俣氏は、私の……論旨を、（右の）如く變裝さして、讀者の前に恥しげもなく、出してゐられる。斯くの如き言ひ掛りは、例へば、小商工業者や中小農者を指して、小ブルジョア階級に屬すと云つたと認ひ、以つて自己の立場を有利に轉廻せんとするの卑劣極まる論法だ。と云はれて何の辯解があり得るか。いま少し男らしく堂々と論陣を張つて來られてはどうである。』

讀者諸君、いづれが『言ひ掛り』であるか、いづれが『卑劣極まる論法』であるか?!、高橋氏よ、『いま少し男らしく堂々と論陣を張つて來られてはどうである』?!

だが、高橋氏の此の『恥しげもない』反擊は何を意味するか？　此のプチ・帝國主義者は、吾々の批判と追究とに逢つて、もはや、日本は「被帝國主義國」であるといつた馬鹿げたことを公然と言ひ得なくなつたのだ。『苟くも三大强國と自他共に許す』日本を、言外に承認してゐるではないか？

最近に行はれた東京市電自治會の大會において、同組合の日和見主義的右翼幹部は、我が高橋龜吉氏を理論的指導者と仰いだのであらう、日本は「被帝國主義國」だと叫び、帝國主義國ではないと臆面もなく主張した。ひとり自治會と限らず、あらゆる勞働者の組合や政黨の「右翼」幹部の日和見主義は、常にかゝる讒言の借用を必要ならしめる。だが、借用者諸君よ、「被帝國主義國」、即ち「帝國主義される國」といふ此のたわいもない言葉のメッキはとつくにはげて、諸君の用に立たなくなつてゐたのだ。製造元の高橋氏の「駁論」からさへ影をひそめてゐたのだ。諸君が、日本は「被帝國主義國」だと叫んで得意であつた時に、當の名親の高橋氏は、大聲揚げて吸鳴つてゐたのだ、――『此の僕が日本は被帝國主義國だと言つたなんてひどい「言ひ掛り」をする奴は誰れだ』！

だが、痩我慢そのものゝ如き高橋氏はまだ頑張つてゐる。曰く、植民地や、半植民地國即ち被帝國主義國ではないところの、世界三大强國の一なる日本は、大ブルジョアーに對するプチ・ブルジョアーの如き位置にある、『日本は、「最後の段階」といふ言葉で特性づけられた意味の帝國主義的搾取（！　諸君何のことかわかるか？）を蒙つてゐる國の方により大なる利害の一致を見出す地位（？！）にある。[2]』そしてそれが、日本現在の「帝國主義的地位」であると。

2）改造八月號　66頁

が、しかし、吾々は、誤謬の泥海の如き、氏の駁論の中にぽツつりと眞理の孤岩らしいのが浮んでゐるのを見落してはならぬ。曰く、『謂ふ所の帝國主義時代に於て、或る一國の特殊事情を研究するとは、要するに、……その一國が搾取してゐる位地（所謂帝國主義國）にあるか、乃至は搾取せられてゐる位地（所謂植民地又は半植民地其他の被壓迫國）にあるかを究めることである』。[3] 見よ、此の「研究方法」によつて見出さるべきものは、搾取する帝國主義國と、搾取される植民地及び半植民國との二者あるのみで、搾取してゐるやうで又た搾取されてもゐるやうな譯のわからぬプチ・帝國主義國なるものは斷じてあり得ない。氏にしてもし、此の「研究方法」に終始一貫せんか、氏の「プチ・帝國主義國論」はきれいに自己清算をしたであらう、だが、プチ・帝國主義者はそれをこそ恐れた。そして眞理と事實とに面をそむけた。かくて彼れの「駁論」は維持し得べからざるプチ・帝國主義國論の辯護の駄辯に終つてゐる。それは氏にとつては全く徒勞であつた。だが、プチ・帝國主義國概念の容捨なき分析批判は吾々にとつて無用ではない。否な悉く必要である。それによつて吾々は、日和見主義イデオロギーの一典型を理論的に克服し得るから。

(4) 「小ブルジョアのやうな帝國主義國」！

日本が「プチ・帝國主義國」であるとは、一方では帝國主義國なることをいや〳〵ながら承認し

3) 同上 57頁

他方では大ブルジョアに對する小ブルジョアのやうに搾取されてゐる國であることを强調せんとするものである。では、何故に此の概念が、前段で見たやうに、鵠のやうなものでなければならなかつたか？ （一）それは階級と國家とのルーズな類推から出來たり、しかも兩者が混淆されてゐる。（二）此の概念には更に、一國の資本主義の發展段階の諸特徴と、その國が世界において占むる獨占的地位とがごつちやになつて盛り込まれてゐる。（三）帝國主義ブルジョアジーが植民地や半植民地國に對して行ふ特殊の搾取と、帝國主義ブルジョアジー同士が互に搾取されてゐると感ずる時の「搾取」とが同一視され、あまつさへ後者のブルジョア的見地が强調されてプロレタリア的重要性ある前者は隱蔽されてゐる。（四）帝國主義ブルジョアジーが、自國の無產階級に對して行ふ明白な搾取と、かく搾取するブルジョアジーが常にもつところの感じ、卽ち他の帝國主義ブルジョアジーから搾取されてゐるといふ感じとが混同され、後者の强調によつて前者が隱蔽されてゐる。（五）以上の如き救ふべからざる混淆の結果、搾取者の利害と被搾取者の利害とが混淆され、事實において帝國主義戰爭を是認し主張する根據として役立つ概念に化けてしまつた。

高橋氏が駁論においてなせる反擊――實は屈服――によつて明かなやうに、氏は日本を帝國主義國と認める。では、氏が、帝國主義國としての日本が、大ブルジョアに對する小ブルジョアのやうに搾取されてゐるところのプチ・帝國主義國であるといふのは、そも〳〵如何なる理由によつて

あるか？

一、氏は、日本における生産の集積の程度、獨占化の程度、金融資本の發達の程度、資本輸出の程度が、他の帝國主義國との比較上、劣つてゐるといふ理由で、日本を小ブルジョアのやうな帝國主義國であるとする。まことに驚くべき比喩ではある。既に八月號社會科學の拙稿（四一九——四二〇頁）[1]に於て指摘して置いたやうに、帝國主義のエポックにおいても各國の資本主義は種々なる發展樣相を呈するのであつて、一國內に生產の集積、獨占化、金融資本主義、資本輸出が一樣に發展するのではない。それらの發展の程度の比較と、大ブルジョアと小ブルジョアの比較との間には何等の共通點もあり得ない。また、言ふさへ馬鹿げたことであるが、一國におけるそれらの發達が劣つてゐるといふことによつて、その國が他國に搾取されてゐることには勿論ならない。

二、高橋氏は、此の馬鹿げた比較を、もう一種の馬鹿げた比較と結びつけ、『全體を綜合して判斷して貰ひ度い』と言つてゐる。[2]だが、關聯を異にし、性質を異にするものを「綜合」することは出來ない。强いて結びづければ、猿面虎身蛇尾が出來るだけ……。

三、もう一種の比較とは、一の帝國主義國の獨占する資源及び販路を他の帝國主義國のそれと比較し、大なる分前を有する國を大ブルジョア階級に比し、小なる分前を有する國をプチ・ブルジョア階級に比することである。これは國家と階級との類推である かゝる粗大な類推によつて高橋氏

1）本書 198—200頁
2）太陽四月號 11頁。著書 55—6頁

は、日本の如く小なる分前を有する帝國主義國は小ブルジョア階級のやうに搾取されてゐると主張する。だが、兩者の間に如何なる共通點があるといふのか？ 兩者は全く反對の特徵を有するではないか。

(a)帝國主義國の資本は、異民族に對する獨占的搾取を特徵とする、——かゝる搾取の分前が如何に少ないとしても、——しかるにプチ・ブルジョアジーの資本は、如何なる意味においても決して獨占的に搾取し得ざることを特徵とする。プチ・ブルジョアのやうな帝國主義國、プチ・帝國主義國、卽ち獨占的に搾取せざる帝國主義國とは、皆目意味をなさない言葉だ。

(b)小ブルジョア階級の特徵は、彼等の搾取範圍の爭奪において到底大ブルジョアと對抗することが出來ず、反對に後者に對する隷屬的地位に甘んずる所にある。しかるに、帝國主義國の特徵は、互に獨占的地位の爭ふことに存し、獨占における分前の小なる者は者ほど猛烈に爭ふことに存する。

(c)後進的な帝國主義國の特徵は、先進的な帝國主義國の既得權を奪取して伸びる所にある。だが、小ブルジョア階級は、最初から滅亡への道を辿る所に特徵がある。これらによつていよ〳〵明かなやうに、プチ・ブルジョアのやうな「帝國主義國」なるものは斷じてあり得ない。

四、果して然らば、如何なる帝國主義國にせよ、苟も帝國主義國がプチ・ブルジョアのやうに搾

取されてゐるといふこともまた絶對にあり得ない。獨占の分前が少ないが故に搾取されてゐるとするのは、獨占を爭ふ者の感じである。即ちそれは、帝國主義ブルジョアジーその者のイデオロギーである。此の點は、八月號社會科學において既に强調しておいた。[3] 高橋氏のプチ・帝國主義國は、此のイデオロギーの體現である。三井、三菱、住友の三コンツェルンは、獨占的地位を爭つてゐる。住友コンツェルンの分前は他より少ない。進出せんと欲する住友は、此の產業、彼の市場において獨占の門戸を閉してもつて彼れの進出の道を塞いでゐる他のコンツェルンによつて搾取されてゐると感ずるでもあらう。——吾々は、炭坑獨占において一五%を占めるに過ぎない、鐵獨占においてはたつた七%だ、おかげで割高の石炭や鐵を買はされる、等、等、等。かくて吾がコンツェルンは、プチ・コンツェルンだと嘆ずるかも知れぬ。だが、それは獨占爭奪者の言ふことである。吾々は、住友コンツェルンの勞働者諸君と共に、彼れが獨占的資本であることを見るのみであり、見れば足る。

二十世紀初頭の獨逸は、典型的な帝國主義國であつた。しかも市場並びに植民地における彼れの獨占の分前は、英國のそれに比較すれば貧弱そのものであつた。然らば獨逸は「プチ・帝國主義國」であつたといへるか？　飛んでもない。獨逸において生產力が急速に發展しつゝあつたのに、獨逸が市場と植民地とを有たなかつたこと、——それこそが獨逸を帝國主義の國たらしめたのだ。そして獨逸が獨占的地位の爭奪を開始したことによつて、帝國主義のエポックが成立したのだ。が、もちろん獨逸の帝國主義者及びその代辯者は、あの運命的な世界大戰に至るまで、常に、獨占の分前の少ないことを高唱してゐた。高橋氏の「プチ・帝國主義國」は、彼等の遺產である。

之を要するに、大ブルジョアに對する少ブルジョアのやうに搾取されてゐる帝國主義國なるものは、世界の何處にも存在しないものである。日本は、如何なる意味においても、プチ・帝國主義國ではない。

五、日本は、帝國主義的搾取をやつてゐる國であつて、帝國主義的搾取を蒙つてゐる國ではない。帝國主義的搾取を蒙つてゐる國は、多かれ少なかれ政治的獨立を喪失せる植民地、半植民地國である。帝國主義國の資本は、かゝる國々において、その民族を隷屬化し、民族の勞働力を、直接に搾取する。高橋氏よ、日本において日本國民が斯やうな搾取を蒙つてゐることを立證されよ。その時にのみ、氏は日本を、支那や印度の「仲間に入れる」ことが出來よう。その時にのみ吾々は、氏の主唱する「反帝國主義運動」を支持するかもしれない。

(5) プチ・帝國主義國の押賣り

序でながら、讀者諸君は、血眼になつたプチ・帝國主義者が、自分の主張と他人の主張の見さか

3) 422--424頁。本書 201—3頁

へも無く、プチ・帝國主義國の押賣りをする半狂亂の暴狀を憐殺すべき今一つの機會をもつ。――

高橋氏によると、猪俣は、前述の如き『言ひ掛り』をするやうな『卑怯極る小細工をやらなくては、私（高橋氏）のプチ・帝國主義論を眞正面から駁し得ない疵を脛に持つてゐられる』のだといふ。はて、何のことだらう？？　何でもない、私は『社會科學』四月號に書いた論文の中の附註で、帝國主義時代の世界資本主義を構成する諸單位は少くとも三群に大別し得ると述べ、

第一群、代表的な金融資本主義國及びこれに準ずるもの、

第二群、植民地または半植民地化されつゝあるもの、

第三群、それ自身金融資本主義の段階に達してはゐないが、第一群の帝國主義的攻勢の影響の下に、反作用的に自衛上もしくは對抗上帝國主義政策をとる國、

であるとなし、『例へば日本は、日清戰爭前後から既に第三群に屬し……たが、內的轉形によつて今や第一群に屬さんとしてをる。』と述べて置いた。[1] 高橋氏が血眼で見つけ出したのはそれである。そして氏はすごい險幕で言ふのだ――

『氏（猪俣）に反問する。氏（猪俣）の云ふ第三群は果して何ものであるか、用語の差異（！）及び分類の基準の異同（！）等、多かれ少なかれ（？）意味の相違は無論あるが、結局（！）それが、私の分類に於けるプチ・帝國主義國に準當（!!）するのではないか』、[2] と。

1）本書　104頁
2）改造八月號　68頁

「恐入りました」、曾つては私の言ふ第二群に屬し、今や第三群に屬さんとしてゐるところの帝國主義日本とは、憚りながら、『小ブルジョアのやうに搾取されてゐる』國なんかにはチットモ『準當』してるんぢやなくて、今や沒落期帝國主義の重心たらうとする東洋において英米と獨占的搾取域を爭奪しつゝある大日本帝國のことであります。

だが、讀者諸君、序でにもう一つ高橋さんの言ひ分を聞いて置きませうか。曰く、

『尠くとも、私（高橋氏）が、日本を第三群だと云つたことが、何故第二群だと云つたことにならざるを得ないのだ』、[3] と。

日本が私の言ふ第三群に屬するとお仰言るのなら、吾々は「尠くとも」あなたを「プチ・帝國主義者」と呼ぶことだけは止めませう。では、いよ〳〵御變說ですか？　しかし、「第二群だ」、「支那や印度の仲間の被帝國主義國だ」と「云つたこと」になさらなくても、あなたを理論的（！）指導者と仰いだ右翼幹部諸君に對して面目が立ちますか？

序でにもう一つ――

『のみならず氏は、日本を以て、今や第一群に屬さんとしてをる』（傍點高橋）と曖昧極まるもの〵云ひ方をなしてをられるが、しかし、斯の如き言ひ方は、云ふ迄もなく、論理上（！）日本は未だ第一群に屬してゐないことである。』[4]

3）同上
4）同上

さうでせうか？　『屬さんとしてをる』といふのが『曖昧極まるもの〻云ひ方』だといふなら、そのほかに、過渡期を現はす言葉がありますか？　それとも、過渡期といふものを御存じない？　さうではない、吾々の常に最も重要視するところの過渡期の事實が、あなたの機械論理的、公式的な御頭腦には、「猫に小判」なんです。

だが、

論理上第一群に屬してゐないことになるのに、『然るに氏（猪俣）は私に對する駁論に於ては、恰かも（？）、日本が第一群に確定的に屬してゐるかの如きもの〻云ひ方（？　？）をなしてゐられる。甚だ失禮な云ひ方ながら、氏よ、人の理論を駁論せられる前に、先づ自分の論文を徹底的に駁論せられたがよからう。[5]』

有難う！『甚だ失禮な言ひ方ながら、氏よ』、變な『言ひ掛り』をする前に、先づ、『日本が第一群に確定的に屬してゐるかの如きもの〻云ひ方』を私が事實してゐることを、示せるならハツキリと讀者に示し、さうすることによつて、御自分の、金融資本主義への發展過程に關する完全なる無智を遺憾なくさらけ出されたがよからう。

5）同上

九、日本は「被搾取國の仲間」か?!

(1)　ブルジョアジーへの奉仕

最後に吾々は、「日本は小ブルジョアのやうに搾取されてゐるプチ・帝國主義國であつて、被帝國主義國の仲間である」といふ馬鹿げ切つた言葉を、我が高橋氏は如何に馬鹿げ切つた「論證」に基づいて吐いてゐたかを示すことにより、高橋氏以下の日和見主義者をして、再びかゝる譫言を口にし得ざらしむるであらう。「駁論の駁論」における高橋氏は常習的の臆面なさをもつて、その「論證」は例のレーニンの定義の第五の特徴――世界の領土的分割の結了――を「相對的意味」に解し、日本といふ一國に「當嵌」めたものであると稱してゐる。[1]　さうして言ふのだ――

『現に、私はこのレーニンの第五の特徴を問題にしてゐないどころか已に引用した拙文中にある如く、「第五節で別に述べる」ことを約束し、その第五節で、約八頁（全體の論文が三十二頁であつたからその四分の一の多量（！）を割いて）を費して之を詳論してゐる。この量（！）は實に（！）レーニンの擧げた五つの特徴の中の、他の四つの、特徴について論じた頁數に匹

1）改造八月號　60頁

敵するの多量である』[2]、と。

こんなに多量に論じてゐるのに、しかるに猪俣は恰かも高橋氏がそれを、レーニンの第五の特徴としては到底論じ得ないところから、『「この點については從つてこゝに問題は起らないわけである」と逃げ口上を言つたかの如く文意をスリ換へてゐられる』といふのだ。ところで、此の新米の刑事か何かのやうに、やたらに人をスリ扱ひにしたがる血眼の高橋氏は、實はスリ以上のたくらみをもつてゐる。何故といつて、氏がその八頁にも亘つて言つてゐることに對する吾々の批判――（改造六月號拙稿七三頁――七四頁）――に對しては、氏は遂に一言も答へ得ないではないか。自分自身のスリ換への惡事の破綻に恐れをなし、逆に批判者をスリ呼ばはりして急場を逃がれる、――それが右翼日和見主義の「理論家」（！）高橋氏の常套手段である。

では、その驚くべき分量において、氏が論じたといふ部分は何であつたか。それは、レーニンの世界帝國主義の第五の特徴を「相對的意味」に解して日本といふ一國に「當嵌」め、『資源（食料及原料）の獨占と販路の獨占』とにおいて日本ブルジョアジーの分ケ前が少ないことを示さうとしたものである。[3] そしてそれは何を意味したか？　第一には、レーニンの定義の意味のスリ換へである。レーニンが、『世界の領土的分割の結了』をもつて帝國主義段階の特徴となした時、彼れがその事實に見出したところの意義は、分割の狀態に含まれる驚くべき矛盾であり、その矛盾の增大の

2）同上
3）太陽四月號　25―32頁。著書、79―91頁。

不可避性であり、從つて再分割の爲めの世界戰爭の必然性であつた。もはや他國と衝突せずに掠奪し得る土地は地球上にない、然るに一方では領土分配の不平等があり、他方では發展の不均衡がある。一方では既に生產力の發展の甚しく鈍ぶつた英吉利のやうな古い資本主義國が尨大な領土を獨占してゐるのに、他方では資本主義的發展力が旺盛で急速な、獨逸や日本の如き新興資本主義國の領土は甚だ狹猛である。此の矛盾こそは、獨逸や日本をば帝國主義强國として登場、進出せしめずには置かない、そして帝國主義的對立を激成せずには置かない。これが、レーニンの第五の特徴の意義である。卽ち、大なる發展力を內包しながら資源や市場の獨占的分ケ前が少なかつたこと、――そのことこそが我が日本を、世界の帝國主義列强の一たらしめたのだ。しかるに、見よ、我が日和見主義者高橋氏は何をしてゐるか。レーニンの定義の第五の特徴に當ると稱して日本は領土の分ケ前が少ないことを示し、見給へ、小ブルジョアのやうに搾取されてゐるところの、「被帝國主義國」の仲間だ、と叫ぶ。そして我が無產階級に向ひ、諸君よ、英米の獨占を破壞する戰爭の爲めに起て、資本主義の基礎において諸君自らを解放（！）するの道はそれのみだ、と。――讀者諸君、如何に氏が、『レーニンの第五の特徴を問題にしてゐないどころか』、まさにブルジョアジーの利益の爲めに專心それを問題にしてゐたことよ！